



始



醫學士石田昇著  
新撰催眠療法  
全

60-387

醫學士石田昇著



# 新撰催眠療法

南江堂書店發行

大正  
6. 10. 25  
內交

## 緒言

精神的療法の嗤笑を以て迎へられし時代は去れり、汪洋たる醫學の各分科を通じて疾病の的確なる診断と共に適切なる療法を施さむとすれば、須らく患者の心理状態をも斟酌する所なかるべからず、殊に心的要素が病の成立に關與し、其經過に影響を及ぼしつつある場合に於ては、之に對抗するの策、啻に藥劑療法、理學的療法のみを以て足れりとすべきや、從來其名ありて其實殆んどなかりしは精神的療法にあらずや、其效既に認められて、其用洽からざるは恐らく實地醫家、學生諸君の其技に熟せざる

に因由すべし、其技に通ぜざる所以のもの、蓋し好良なる参考書乏しかりしが爲めなり。予茲に看る所あり、精神的療法の主腦と見做すべき催眠療法及び精神分析的療法を説き、其術式を述べ、之を一小冊子と爲し、讀者諸子の爲め安全にして忠實なる同伴たらしめむと試みたり、冀くは適當なる機會に於て本書の有用なるを發見せられむことを。

終りに本書の索引に就ては醫員竹内君の勞を、日本の文献に關しては武内君の努力を多とす。

大正六年九月

著者識

### 新撰催眠療法目次

#### 緒論

#### 第一章 催眠術の沿革

メスマル	三
フアリア	四
ブレード	五
リエポール	七
ベルンハイム	七
ナンシー學派	八
巴里學派	八

#### 第二章 催眠状態の學理

睡眠	一三
----	----

催眠状態……………一五

生理學說……………一九

心理學說……………二一

第三章 暗示……………二二

覺醒時暗示……………二五

魅心状態……………二六

自己暗示……………二六

第四章 催眠的現象概論……………二九

運動……………二九

知覺……………三〇

注意……………三一

記憶……………三二

幻覺……………三二

錯覺……………三三

消極的幻覺……………三四

感情生活……………三四

判斷……………三五

意志……………三五

催眠後現象……………三七

被催眠性……………四〇

異常なる夢遊催眠……………四四

第五章 催眠状態の程度……………五七

シャルコーの分類……………五七

リエボールの分類……………五九

ベルンハイムの分類……………六一

フォーレルの分類……………六三

第六章 催眠療法の豫備條件……………六四

第七章 催眠療法の術式……………六八

    メスマルの方法……………六八

    凝視法……………六九

    言語暗示法……………七一

    音響催眠法……………七四

    電流暗示法……………七五

    複合催眠法……………七五

第八章 催眠状態の持續……………七六

第九章 覺醒……………七八

第十章 實地的暗示療法……………八一

    總論……………八一

    各論……………八六

        (一)疼痛……………八六

(二)神經性不眠症……………八九

(三)神經性嫌食症及消化不良……………九四

(四)氣分變換……………九六

(五)知覺障礙……………九七

(六)痙攣及麻痺……………九九

(七)便秘……………一〇〇

(八)月經障礙……………一〇二

(九)強迫觀念及強迫的恐怖……………一〇三

(十)慢性アルコホル中毒……………一〇六

(十一)慢性モルフィン中毒……………一〇七

(十二)慢性ニコチン中毒……………一〇八

(十三)手淫……………一〇九

(十四)色情倒錯……………一一〇

(十五)神經性心臟疾患……………一一二

○(十六)機能性言語障礙……………一三四

(十七)諸種の神経症……………一五六

(十八)小兒に對する暗示療法……………一五六

(十九)顔面痙攣……………一一九

(二十)齒科と暗示……………一二〇

(二十一)精神病と暗示……………一二七

(二十二)船暈……………一三〇

(二十三)ヒステリーに應用せらるゝ精神分析學……………一三二

第十一章 治療的成績……………一五九

第十二章 被術者ごなれる術者……………一六五

    プロイレル……………一六六

    フォーレル……………一七三

    タツツェル……………一七四

催眠中の患者の感想……………一七四

第十三章 暗示の刑法的意義……………一七九

寫真三葉

索引……………一七七

附錄 催眠術に關する日本の文献……………一七八





# 新撰催眠療法

醫學士 石田 昇 著

## 緒論

催眠術を施し之を説く者甚だ少からず所謂其研究者なるもの亦多數に上るが如し而してそれ等の術者の目的とする所は疾病治療にあらずんば悪癖矯正にありて然も疾病に通せず悪癖の由つて來る所を知らず器質的疾患なるや機能的疾患なるやを判別すること能はず如何なる患者に向ひても同一態度と同一方法を試み以て萬一を僥倖せむとする者多し宛然萬病を治療せむが爲めの藥劑として只一種のアンチピリンを備ふるが如し、實に寒心に堪へざるなり。

若し如上の條件の下に催眠術を施されたりとすれば其効果を豫期すること

新撰催眠療法 緒論

## Literatur.

- Liebault*, Der künstliche Schlaf. 1892.
- Bernheim*, Die Suggestion. 2. Aufl., 1896.
- Forl*, Der Hypnotismus. 5. Aufl., 1907.
- Hirschlaff*, Hypnotismus u. Suggestivtherapie. 1904.
- Gerling*, Handbuch der hypnotischen Suggestion. 3. Aufl., 1908.
- Freud*, Psychoanalyse. 1910.
- Moll*, Hypnotismus. 1903.
- Preyer*, Der Hypnotismus. 1890.
- Jacoby*, Suggestion and Psychotherapy. 1912.
- Journal für Psychologie und Neurologie. Bd. XIII, Bd. XIV, Bd. XVII und Bd. XXL.
- Monatsschrift für Psychiatrie und Neurologie. Bd. XXXVI 1914.
- Allgemeine Zeitschrift für Psychiatrie. Bd. LXX. 1912.
- Zeitschrift für die gesamte Neurologie und Psychiatrie. Originalien. Bd. XXVIII.
- 吳 精神病学集要前編第二版
- 日本内科全書卷三
- 三宅松本 精神病診断及治療學第三版
- 門脇 安眠法
- 石田 新撰精神病学第七版
- „ 健康なる精神

と能はざるのみならず其害甚だ尠少なからざるものあるを見る。然れども世人往々にして迷信に捉はれ、精神上のことに就ては醫師は殆んど何等の交渉をも有せざるが如く思惟し、従つて醫師以外の術者より暗示を受け精神療法を施さるゝを冀ひ、所謂不思議の療法、奇蹟の如き施術に關する誤れる印象に支配せられ、貴重なる生命と科學的觀察を要する疾病とを妄斷臆測の指導に委ねて怪ます、眞に驚歎に堪へざるなり、斯くいへばとて予は決して社會に迷信の存在するを以て背理的現象と見做すものにあらず、却つて其反對に迷信の發生すべき必然的條件の社會に存在するを認むるものなり、何となれば醫師と雖も如何ともすべからざる所謂難治乃至不治の疾病、各科に亘りて其例に乏しからざればなり、長き期間に亘れる醫療の效なきを見るに共に、懊惱せる患者と過敏なる家人との信頼は漸次醫師を離れて或は神佛に赴き、或は俗間の療法に走り、一點の光明を發見せむが爲めに焦心するに至るは蓋し自然の勢なり。

需要に伴ひて供給生じ、催眠術は漸く非醫者の手に渡り、精神療法は俗人の

專有物なるが如き觀を呈し、世人も亦深く之を怪まざるに至れるが、今や吾人の心靈を包圍せし秘密の幕は褰げられ、心的現象は身體的機轉と關連してのみ理解し得べく、神經中樞と離るべからざる關係を有する時代に於ては、精神的療法の現況に照して醫家の努力未だ足らざるものあるを信ぜざらむと欲するも能はざるなり。

## 第一章 催眠術の沿革

英國の醫師 *Franz Anton Mesmer* (1733-1815) 以前に催眠術様方術、若くは眞の催眠術の行はれしは幾多の記録の證する所なるが、メスマルは蓋し近代的精神療法の鼻祖を以て目すべきものにして、其所説によれば、當初治療の爲め彼の使用し來れる磁鋼は必ずしも必要缺くべからざるものにあらず、此種の人工的磁鐵に依らず、單に素手を用ひて患者の頭部より四肢の方へ觸擦する時は、動物磁氣の作用により一種固有なる現象を發生せしむるを得べし、其現象たるや、呼吸作用及び心動の輕き障礙と、顔面の一時的潮紅とを以

て始まる、上眼瞼は震顫しつゝ下り、随意に之を開くこと能はず、身體の一部若くは全部に硬直起り、若くは痙攣現はれ、而して深き睡眠状態に陥るものなりと。

之より先、羅馬教のヂュエツト派の僧侶 Kircher は 1645 年に既に鶏の雛にメスマリズムを施して不動の姿勢を執らしむるに成功し、二百年後に於て Wilson は倫敦に於て狼、馬及び其他の動物にカタレプシーの状態を惹起さしめ、彼の有名なる生理學者 Virchow は此種の多數の實驗を鳥、蛇、蛙及モルモット等に試みて成功せり。

1815 年に Abbe Faria が印度より巴里に歸り來るに及んで磁氣説は新生面を開けり、彼は種々なる試験を爲し其成績を五年後に發表したるが、所謂メスマリズムを惹起す爲めに必ずしも磁氣の力を藉るの要なし、從來磁氣の流れが患者の身體に作用するによりて發する現象と見做されたるは誤謬にして、純然たる精神的作用、即ち暗示 Suggestion に起因するものなりと説き、從來の學説を根本的に覆し、新しき真理の發見者たるの榮譽を荷へり。

然れど彼の施せし方法たるや今日より見る時は甚だ幼稚にして、被術者を椅子に倚らしめ、閉眼を命じ、注意を集中せしめたる後、彼は突然命令的口調を以て高聲に「眠れ」と叫び、必要なる時は三回乃至四回之を繰返したり、此に於て被術者は數回軽く搖蕩したる後、催眠状態に入るを例とせり。

斯くして Magnetismus なる語に代ふるに Hypnotismus 若くは Suggestion の語を以てするの端緒は開かれたり。

Faria に、次ぎて暗示及び催眠術に關する信用ある研究を遺したるは英國の外科醫 James Braid なりと。

Braid は佛蘭西の磁氣學者 La Fontaine が公開試験を爲すに刺戟せられて一七〇〇年に別途の研究に着手し、其妻及び友人 Walker と従僕とに、光澤ある任意の物品を二分乃至三分間凝視せしめたるに、如上の試験人物は孰れも、催眠状態を呈し、ラ、フ、ン、テ、ー、ン が磁氣説を以て説明したると、同様の現象を呈したるを目撃し、所謂不可思議なる磁力的學説を排し、其原因を主として精神的作用に歸せしめたり。

ブレードは更に進んで其専門とする外科的手術に適當なる無痛覺 *Analgesic* をば此方法によりて惹起さしむるを得べきを経験し、1852年に彼は約三百頁より成る *Neurophysiologie* 神経性催眠學と稱する一書を著せり、催眠術の名はブレードに始まる。

ブレードの説く所によれば催眠状態は術者より流れ出づる秘密なる力の影響にあらず、催眠状態及び之に屬する現象は同一にして、單に主觀的性質のものなり、且つ其根源は被術者の神経系に存す、光輝ある物體の凝視は上眼瞼の疲勞を來さしめ、單一觀念の上に注意を集中し、以て睡眠を喚起するものなり、此状態に於ては想像甚だ盛にして自然的に浮上する觀念、若くは他より暗示せられたる觀念に對しては特殊の注意と信賴とを拂はれ、實際的知覺の如き強さを有するに至る、此種の現象を繰返す時は聯想及び習慣の法則によりて益々容易に施術するを得べし、術者の意志は若し言語或は舉動を以て表出するにあらずんば、或は被術者より理解せらるゝにあらずんば、何等の作用をも有せざるなりと、不磨の言と謂ふべし、フアリア、ブレード

ドの學説は未だ一般に承認せらるゝに至らざりしが、ナンシーの實地醫家 *Liebrecht* 出で、科學的根柢漸く完成の域に近づき、單に言語のみにて催眠状態を惹起し得べきを公表したり、即ち術を受けむとする者が術者の言に聽従する場合に於ては、此方法により暗示を生せしむることを得るに反し、若し被術者が暗示されたる思想に反抗する場合に於ては、凝視法、言語法、共に何等の効果を齎さざるが故に、催眠術の現象全部が悉く精神的原因に歸すべきものなりと説けり、是れ實に 1863 年なりき。

斯くして一道の光明は紛糾せる混沌界を照射したれども、リエーポールの主張は長く學者の承認を得るに至らず、苦き經驗を積みつゝ其學説の傳播と研究の發表とに努力したるが、偶々ナンシーの醫學專門學校教授 *Bernheim* の來りて教を乞ふあり、リエーポールの所説悉くベルンハイムの信する所となり、一大勢力を加へたり、1884年にベルンハイムは一書を著し、催眠的現象を力説するに及んで、久しく學者の注意する所とならざりし上記リエーポールの卓見及び業績は漸く醫學社會の信用を博するに至り、名聲大に揚

り、催眠療法 of 習得、研究の目的を以てナンシーに集り、リエーボールの門に入るもの甚だ多く、就中 *Bainis* の如きは催眠術の生理を研鑽し、*Ligeois* の如きは法醫學的關係を詳論し、茲に所謂ナンシー學派の勃興を見るに至れり。

此學派と對抗するものは *Charcot* を中心とせる巴里學派にして、ナンシー派と所見を異にする點は、主としてヒステリーののみが暗示と催眠術とに適すと思惟するにあり、1873 にシャルコーはヒステリー患者に施したる催眠術のデモンストラチオンを爲し、催眠的現象の眞因として患者の神經及び筋肉の興奮性亢進を挙げ、多數の學者の賛同を得たるが、如上佛國兩派の所見の相違は漸次合體するに至り、ヒステリーは素より暗示に對する感受性大にして、精神療法を施すには優秀なる材料の一なれども、他の神經性疾患に於ても効果顯著にして、或程度迄は器質的疾患にも影響を及ぼすものなりといふに一致するに至れり。

1873 年、動物の催眠術に關する觀察は獨逸に於て *Carmak* によりて公表せら

れたり、既記のキルヒネルの業績は鶏の脚を結びて地上に線を引き、其上に之を置く時は、一定時の後には安靜となり、其紐を去れども同一姿勢を保ちて動かざるを認めたるものなるが、ツェルマックの實驗は之と異り、足を結ばず、地上に線を引きかすして同一結果を得たるものなり、動物の頭部及び頸部を軽く伸展せしめて暫く安靜なる位置を保たしむるに成功せり、尙他の動物、鳥類、鯢魚、蟹、鳩、家兎及び雀等は其目の前に凝視せしむべき物體、例へば指、マツチの一本等を示す時は催眠状態に入り、中にはカタレブシーを惹起すもありと述べたり。

されどブライエルは此種の状態は恐怖の結果なりとて之を *Kataphore* と名けたり、即ち恐怖麻痺に過ぎずと思惟せり。

1828 年に *Balassa* は馬に蹄鐵を打つ際の簡易法を述べて曰く、馬を確り凝視して、一、二歩退かしめ、頭を高く擧げ、頸椎を硬固に保つ時は概して物に驚かざる状態となり、耳邊に於て銃聲聞ゆとも、びくともせざる様影響せらる、又軽く手を以て、前額と目の上を十文字形に觸擦するは、荒れ馬を鎮靜せし

むる無上の良法なり」と是れ一種の催眠様状態なり。

1839年に英國の Wilson は如上の状態を動物園の動物に、惹起せしめ、之を France が稱せり、1881年に Brand は、ボストンに於て動物の所謂「トランス」なる状態は人間の催眠状態と同様なるを述べ、之を惹起すべき種々なる方法を列挙せり、例へば恐怖、觸擦、凝視、強き光線の直射及び音楽等是れなり。1882年に Danilevsky は種々なる動物に關する催眠術實驗例を報告せり、彼は鶏、モルモット、家兎、蟹、鰐魚の子等に異常なる位置を與へ、(例へば仰臥)一定時間之を軽く壓定する時は催眠状態を起すを實見せり、其際苦悶甚だ少く、且つ此状態は一種の暗示に歸因するものなり、彼の言によれば此場合、言語暗示の影響ありと見做すこと能はざれども、動物は實驗者の行爲を命令の如く受領し、且つ之に服従せしめらるゝに際して、暗示と同様なる作用が動物の單純なる觀念を支配するものと考察するを得べしと、而して彼は人間の催眠状態に於ける症候群を動物に就き検査せるに、單にカタレプシーのみならず、高度なる知覺麻痺が種々なる動物に於て十分乃至三十分間持續するを徵

し得て次の結論に到達せり、即ち、人間の催眠状態は動物のそれより發育史的に蟬脱したるものなり、兩者同一にして人間に於ては只遙に複雑なる心理的、生理的、機械的作用を示すに過ぎずと。

畢竟するに動物の場合に於ても、恐怖麻痺に歸因する現象にあらずして、暗示の影響による催眠状態なりと見做すを妥當とす。

其他米國に於ては Grimes は催眠状態を供覽し、生物電氣的現象として之を説明せり、米國に居住せる佛國醫家 Durand de Gros は 1853 に歐洲に歸り、電氣生物學 *Elektrobiologie* の傳播に盡瘁せり、James Esdaille (1808-1859) は暗示的無痛覺の外科的目的に應用し得べきを實驗し、腫瘍の切除、四肢の切斷等の大手術を試み、僅に 5% の死亡率を見たるに過ぎずといふ、彼は主としてメスマルの觸擦法を用ひ、時としては手術に適する状態に達する迄十日乃至十二日間施術せりと稱せらる、最近米國に於ける斯學の權威としては Prince, Putnam, Sidsis 及び Munsterberg 等を數ふ。

獨逸に於ては 1879 及び 1880 に、デンマークの商人 Carl Hansen が伯林及びプ

レスラウに於て催眠術の公演を試み、特に醫家のみを招待せし事ありしが、其刺戟を受け、幾多の研究、實驗は之を出発點として起り、プレスラウの *Hahnke* 及び *Berger* 伯林の *Freyer* 及び *Eulenberg*、ライプツヒの *Mobius* 及び *Wundt*、ウエーンの *v. Kraft-Ebing* 及び *Benedikt* 等其尤なるものなりき。其他 *Ford*, *Löwenfeld*, *Moll*, *Vogt*, *Oberskainer*, *Birschwanger* 等は獨逸語國に於ける斯學の大家と稱すべし。

佛には上記の外 *Voisin*, *Bérillon*, *Lays*, *Dejerine*, *Cullere*, *Regnault* 等現はれ、伊に *Lombroso* 出で、英に *Hack-Tuke* 及び *Lloyd-Tuckey* 露に *Tokarski* 等輩出せり。

本邦に於ても亦斯學に關する論說、著書及び實驗少なからず、余は十餘年前より神經病及び精神病の適應症ある毎に催眠療法を施し、自餘の療法と相俟つて往々著效を奏する場合あるを實驗せり。

## 第二章 催眠状態の學理

催眠状態とは人爲的方法を以て發生せしめたる睡眠様状態をいふ、即ち術

者は睡眠の觀念を被術者に暗示し、被術者其暗示を迎へ入れたる際に於て此現象を見る。然らば催眠と睡眠とは同一なりや、相違の點ありや、若し差異ありとすれば如何なる點に於てなりや、是れ何人も知らむと欲する所なるべし。

從來の觀念によれば、催眠状態 (*Hypnose*, *Hypnosis*) は覺醒生活 (*Wachleben*) と對照して、變化したる心的状態にして、施術者の指揮に對する被術者の被影響性の亢進を以て特徴とするものなりと、されど此定義は淺表性催眠状態に於ては適合せざる場合あり、何となれば覺醒時と比較して必ずしも變化せる心的状態を呈せざればなり。反之深き催眠の場合には如上の意義を包含すと見做して可なり。

而して催眠状態と睡眠とは何等共通の點なしと思惟するものは *Wundt*, *v. Kraft-Ebing*, *Mendel*, *Dillien*, *Max Hirsch* 等の諸家にして、兩者は同一の物なりと考ふるものは *Lieban's*, *Ford*, *Lehman*, *Vogt* 等にて折衷説とも見做すべきは、淺き催眠状態に於ては普通の睡眠と同一視すべき徵候を有せざれども、深

き催眠の場合に於ては眞の睡眠と異なる所なしこの見地を有するものは

*Berheim, Kruepelin, Delboeuf, Moll* 等の諸學者なり。

余は如上の問題に就き聊か卑見を述ぶる機會あるべきを信すれども、今試みに睡眠 *Schlaf* の催眠 *Hypnose* の兩状態を比較するを興味ある順序なりと思惟す。

差異 先づ注意 *Aufmerksamkeit, attention* の狀況に於て兩者の差異大なるものあるを見る、普通の睡眠は注意の集中を要せずして來る、五官を一定の點に振向けずして起るのみならず、眠らざらむとして注意と意志とを緊張せしむれども遂に所謂睡魔に襲はるゝに至るは、何人も經驗せし所なるべし、即ち疲勞産物の蓄積一定の高さに達する時、吾人は夢の世界に入るものなり、斯様の際注意は集中せられずして寧ろ散逸し濃厚ならずして寧ろ著しく稀釋せられ統一を失ひて分離したるの觀あり、されば精神、身體共に安息を得覺醒せむとする際の狀況を考察するに、分離、散逸したる注意は漸次、收攬、結束せられ些細なる五官的刺戟例へば音響、光線等によりても容易に意識

を恢復するに至る。

催眠状態に於ては以上と異なり、被術者の五官は先づ術者の與ふる刺戟に集められ、睡眠の觀念殆んど全精神界を壓伏するの勢を以て活氣を帯び來り、茲に暗示の效を著はすものにして、催眠術を施されたる者は、自ら就眠せりと思惟するのみにて通常の場合、眞に、就眠するにあらずして睡眠の錯覺を起すに過ぎず、始めて余の施術を受け、暗示の作用完全なりし一神經衰弱者は深き催眠状態より覺めたる後、彼の豫期したる睡眠状態とは趣を異にする點あるを指摘し、不審の念を抱けるもあり、是れ被術者自身隨意に目を開くこと能はざれども、一方に於ては眞の眠にあらざる自覺をも有し得る一例なり、若し眞の睡眠にして起らむか、術者の與ふる暗示的刺戟は最早對手の頭腦に到達せず、宛然軒聲雷の如き熟睡者の枕邊に座して説論を爲すが如くにして、何等の效果なきに至らむ。

術者の言は聞かれ、領解せられ、被術者の應答は得られ、指揮は一々従はるゝ、催眠状態に於ては被術者、施術者兩者間の精神的通路は完全に維持せられ、



被術者の有する一切の思想は總て術者の手に收むるを得べきを以て、意識は睡眠状態に於けると同様の變化を呈したるものにあらざるを見るべし、反之吾人は睡眠中の人と交通を保たむこと不可能なるは既記の如し、是れ兩者の顯著なる相違なり。

Max Hirschは被術者の意識は、覺醒時意識なりと思惟せり、何となれば其五官器、運動機能、注意、判断、感情及び意志にして暗示的影響を蒙れる部分を除き、其他は全然覺醒時の精神状態の機能と一致するものあればなり、深き催眠状態に於ては、方處及び歳時の所在識好良にして覺醒者の如く歩行し、談話し、筆記し、且つ開眼するを得べし、其他施術後に於ける記憶も亦、暗示的影響を除外すれば一般に佳良にして侵さるゝ所なし。

反之、眞の就眠者は無意識なり、尤も夢の意識は或は淺き睡眠の際に、或は睡眠より覺醒への移行期に於て發生することありと雖も、其性状は決して覺醒時意識と見做すべからず、且つ就眠者は所在識を喪ひ、其感覺、注意、判断、感情、意志は凡て其作用を休止し、醒覺期に入るに及んで意識先づ清明となり、

睡眠状態に關する直接の追想を有せず、併し夢に關するものは之と異り、或は明に或は漠然と想起し得れども、覺醒時迄連續することなし。催眠と睡眠とは上記の如き本體的差異を有す。

以上の本體的差別はヒルシ等の所説なるが、被暗示者の意識を覺醒時意識と論斷せる點を除き、他は大體に於て真相を穿てるものと見て可なり。

其他重要若くは些末なる相違の點を標示すべき個條を擧ぐれば、

- (一) 自然的睡眠の特徴の一なる眼瞼の閉鎖は、催眠状態に於ける必發的現象にはあらず。
  - (二) 數秒乃至數分間に於て發現する催眠状態は普通、睡眠の吾人を訪るゝ際の經驗よりは短時間に急速に起り來るを例とす、且つ就眠の際には疲労の感あれど催眠の際には之を缺く。
  - (三) 自然的睡眠の際に於ては之を見ざる推感性若くは暗示性は、催眠状態に於ける最も重要にして特異なる現象なり。
- 尤も暗示によりて普通の催眠状態より眞の睡眠を惹起さしむるを得べく、

此種の睡眠より再び催眠状態に復歸せしむることも亦可能なり。

兩者の如上の差異と共に相互の接觸點も亦少なからず、故を以てヒルシュの見解に従ひて之を覺醒時意識と認むるは稍妥當ならざるが如し、余は多年の實驗を本とし之を次の如く改むるの可なるを思ふ、即ち

普通の深き催眠状態の意識は睡眠てふ觀念の衣を纏ひたる覺醒時意識なりと、換言すれば自然的睡眠の外形を有したる覺醒時意識にして、被術者の精神的作用は其内容に於て概して覺醒時の如き機能は存在すれど、外形は睡眠てふ觀念に收束せらるゝが故に、睡眠時の如き無意志の状態を呈したる意識を生じ従つて暗示感性の亢進を見、施術者の命する儘に行動するに至るものなり。

ベルンハイムの所説は大體に於て余の論に類似し、催眠は暗示感性の亢進したる状態なりといふに歸着すれど、何故に如上感性の亢進を生ずるやに就いては毫も言及する所なかりき。

又レーウエンフェルドは催眠の際、暗示感性の亢進を見るは聯想作用の滯滞す

ると注意の範圍の狹隘となることによりて生ずと説けるは、一面の眞理を有するに相違なきも、聯想の滯滞なきを例とすれば、到底眞髓を捉へ得たるものと思料する能はず。

#### 催眠状態の生理

Heidenhainの説く所に據れば、軽く顔面を觸擦する刺戟によりて(凝視の際には視神経を、聴取の際には視神経を)大脳皮質の神経細胞の機能停止を促し、之によりて催眠状態を惹起するものなりと。

之に反して Mall は單に五官神経を刺戟したりとて催眠状態を惹起するものに、あらず、被術者の意識するとせざるを問はず、睡眠の觀念の之に加へらるるを必要とすと云へるは蓋し當を得たり、加之言語催眠の際には何等特殊なる末梢神経の刺戟なし、ハイデンハインは毫も之に論及せざりき。

次に脳の血液循環の變化を以て之を説明するものあり、催眠の際には大脳の貧血起ると思惟せしもの Braid, Carpenter 等にして、大脳皮質の部分的血管痙攣を以て説明せむとせしは Hack-Tuke なり。

*Landmann* は催眠状態は全皮質下神経細胞及び皮質細胞の人為的貧血と機能障碍とに歸因して起るものと假定せり、尤も其際連結する所の神経纖維の機能不能も亦之に與るものとせり。

之に反して催眠は腦の充血によりて惹起さるゝと見做すものは *Schick*, *Bouchut*, *Langlet*, *Carmy*, *Tich*, *Langé* 等なり。

*Brodmann* が穿顔術を施されたる多數の患者に就き試験せし所によれば、睡眠の各型及び各期に於て之に一致する腦量若くは腕量の一定不變なる變化は一もあるなし、且つ眠つき、安眠及び醒覺の際の血液循環の關係は種々なる副現象によりて影響せられ移動し易き性質のものなり、故を以て腦に於ける血液循環の變化の中よりは到底睡眠若くは催眠の唯一の原因若くは一定不變の隨伴現象をも求むること不可能なりと。

*Peyer* の催眠状態に關する生理的學説は次の如し、即ち一方に緊張せられたる精神的作用のみが催眠状態を惹起すものにして、凝視の際の注意の緊張は腦の當該部分に活氣を與へ、急速に疲勞物質の蓄積を生ずべし、従つて

其部に來れる血中の酸素の急激なる局所的消費起り、其結果として大脳皮質の機能の部分的消失あると共に、他の部分に於ける興奮を惹起するものなりと。

*ベルンハイム* は右の學説を駁し、瞬間に催眠し、急速に醒覺する際、疲勞物質が斯く迄迅速に或は發生し、或は運び去られ、或は無害ならしめ得るや、是れ事實と學説と一致せざるものありと難せるは蓋し當を得たり。

#### 心理的學説

如上の生理學説に満足せずして心理學説を唱ふる學者亦少からず。

*Burger* は既記ハイデンハインの生理學説に反對し、人為的に興奮せしめられたる觀念と注意とに重きを措き、*Schneider* も亦異常なる一面的意識の集中を以て本現象の原因と見做せり。リーポールは上記の如く睡眠と催眠とを同一現象と思惟し、*Pierre Janet*, *Dessoir* は二重意識の假説に基ける催眠心理説を抱けり。此複意識説に賛成せしものは *Moll*, *Eschenfeldt* 等にして、其所説によれば人の意識は決して單位を爲すものにあらず、既に覺醒時に於ても少

くとも二つの分離し得べき領域より組成せられ、兩者は追想連鎖によりて結合せらる、而して覺醒時に於ては主として上意識が主宰し、時に下意識の混入するあり(例へば散漫の際、晝間の夢想の際、睡眠若くは催眠の際には之に反し、主として下意識が表面に現はれ、暗示の各現象を呈すと、*Mind*は此假説を一笑に附し去り且催眠の際の現象を論じて曰く、意志そのものにあらねども随意運動失はれ、注意全般にあらざれども隨意的注意缺乏すと、且つ本現象の原因に論及して、注意の一方に偏倚したるに因する統覺中樞の部分的機能制止にありとせり、ヒルシュは之に反對して實際と適合せざる所論なりと見做せり。

### 第三章 暗示

廣義に於ける暗示 *Suggestion* は單に催眠術を施されたる際に發現するのみならず、覺醒生活 *Wachleben* に於ける諸般の近似現象の一切を包容するものなり。

狹義に於ける暗示の意義は全く催眠状態のみに限られたる現象として取扱はる。

*Mind* は暗示を狹義に解釋し、且つ曰く、暗示は聯想にして、同時に聯想によりて活氣を帯び來れる觀念に對する意識の縮小を惹起するものなりと。

*Loge* の説によれば、暗示は感動を伴はざる目的觀念にして異常に強盛なる結果を喚起するものなりと。

然れど、*グント* の説くが如き意識の縮小は必ずしも起らず、又、*フグト* の所説の如き目的觀念は寧ろ催眠状態に於ては甚だ稀に遭遇するに過ぎず。

*Berheim* は暗示に就きて所見を述べて、或觀念が腦に輸入せられ且つ受領せらるゝ所の一の作用なりと、いへり *Agathon de Potter* は之に對して、暗示はベルンハイムの主張するか如く觀念を腦に輸入し、且つ腦によりて受領せらるゝ所の一の作用にあらずして却つて教訓と證明とを意味するものなり、吾人は屢々虚偽なる疑はしき觀念を眞實らしく暗示せしむることを得、而も被術者には未だ證明せられざる事なりと。

Foré によれば暗示は、觀念の聯合せられたるものを分解し、且つ未だ聯合せられざるものを聯合せしむる作用なりと。

斯くして、吾人の頭腦に於て、多年の經驗若くは教育の結果構成せられたる思想の連鎖にして、吾人の知的活動の基礎を爲す所のものも暗示によりて分解せられ、新しき思想の連鎖を形成せしむるを得べし。換言すれば未だ嘗て吾人の精神的生活に知られざりし縁もゆかりもなき思想を暗示の力によりて新に輸入するを得べし。

是れ一面の眞理を語れるものなり。

然れど凡ての暗示が毎常其目的を達するものにあらず、或は自己暗示の爲めに失敗に歸することあり、又ベルンハイムの所説の如く吾人の頭腦に引寄せられ、採用せらるゝに及んで始めて其影響を現はすことあれど、概して覺醒の際の説服と異り、證據、結果等に顧慮せず、論理に拘泥せず、術者の言のまゝに左右せらるゝを例とす。

次に他の學者の所説を紹介すれば、暗示は合理的ならざる條件の下に於て

惹起さるる限り或觀念の空しき存在より出發する精神的作用なり、通常判斷の構成を促す合理的方法は根據なり、感覺を發生せしむるには五官的刺激を要す、意志的作用を起さしむるには目的若くは慣習の價値に關する意識なかるべからず、反之暗示の際に起り來る心的作用は、暗示の直接的再生作用より誘發せられたる觀念運動の異常なる程度に迄達したる制止若くは麻痺に起因すと。

是れ亦催眠状態に於ける精神状態を巧妙に分析し得たるものと謂ふべし。

以上は催眠状態に於ける暗示に關する諸説なるが、次に覺醒時暗示 *Wachsgestion, Waking suggestion* に就き一言せむ。覺醒時暗示とは覺醒時に於て催眠状態に類似する現象を呈するを云ひ、之に關するリテラツルも亦多數なり。リーポールは時として覺醒生活に於て起り來る「生理的被動状態」にして、顯著にして病的なる暗示感性を呈せしむるものなりと述べたり。

而して或學者の實驗せる所によれば、覺醒時に於て一農夫に對して暗示的に水を赤酒に變化せしめ、二日間はその効力を失はざりしといふ。又ブレード、

ブライエル兩氏は之を *Fascinationsstunde* 魅心状態と呼べり。然れど此種の現象は何によりて起り來るや、畢竟するに想像の亢進と判断能力の減弱とに歸因す。而して此種の状態の根抵たるや、決して大脳皮質等の瞬間的に變化せる興奮性に存するにあらずして、其個人の精神的な結構の如何に存するものとす。即ち事は暗示より起り來る現象なり、迷信精神薄弱等より胚胎するものなり、真成の催眠的暗示と同一視すべきにあらず。されど熟練せざる催眠家にとりては、暗示感性の増進に必要な程度の催眠状態を惹起すこと困難なるを以て、催眠術に對する能力を疑ふ術者は寧ろ醒覺時暗示を施すを可とす。醒覺時暗示は單に合理的なる思想を患者に賦與し得るのみならず、催眠術と關連せる幾多の危険を避け得る利益あり。叮嚀に之を反覆すれば効果を奏すること必ずしも稀ならず。次に上記の暗示と異なるものは *Autosuggestion* 自己暗示なり。こは何等他人の影響を蒙ることなく、外觀上自然的に個人の中に起り來たる思想にして、例へば觀念の聯合によりても自己暗示の現象を誘發するを得るが如し。

モルの所説によれば強迫的恐怖例へば廣濶苦悶の如きは其根源を自己暗示より發すと、此種の恐怖ある者は廣濶なる場所を横切ること能はざる觀念に支配され、之と抗爭するの勇氣なきを以て、通過せむとすれば激烈なる恐怖に壓倒せらるゝに至るものなりと。生理學者ブライエルは嚴寒の砌、其研究室を暖むるを許さず、其意志の力をを用ゐて即ち自己暗示の効によりて寒冷といふ感覺を除去し得たりといふ。温暖の如しといふ自己暗示的感覚によりて寒冷なる室内に於ても、彼は心地よく勉強し、又冰冷なる水中にも浴するを得たりといふ。カントの所謂意志の練習のみを以て亂れたる感情を制すといへるは自己暗示の作用に歸すべし。ブライエルに據れば興味を以て彼の施術を傍觀したる伶俐なる一令嬢は翌夜劇しき齒痛の爲め熟睡より覺めたり、此時ふとブライエルの施術を思ひ出で、其單調なる音聲と暗示の内容とを模倣したるに、完全に奏效し、再び熟眠し、翌朝目覺めたる時は齒痛去りて痕なかりしと。

又或婦人は任意に月經の期を二三日後らかす方法を知れり、例へば舞踏會の晩に潮來の危険ある時には、單に左の手の小指に赤き絲を結へば足れりとせり、これ亦無意識に行へる一種の自己暗示なるが、素より凡ての人に對して同様の効あるものと認むるを得ず。

催眠的暗示が往々自己暗示の爲に障礙さるゝことあり、例へば好良なる食欲を有すれども不眠症ある人に安眠の暗示を與へ、奏功したる場合に、其代り食欲の不振を來すことあり、斯様の場合に於ける食欲の不振は自己暗示に歸すべし、此種の豫期せざる結果は經驗ある術者と雖も時に避け難きことあり、慎重なる注意を要す。

フーレル曰く、自己暗示とは神経系に於ける、通常意識せられざる作用の發生をいふ、其作用たるや、知覺よりすると、觀念よりすると、感情よりするとに論なく、他の暗示的作用と同様、若くは著しく近似なるものなれど、他人の企及したる影響より發生したるものにはあらずと。

#### 第四章 催眠的現象概論

運動 深き催眠状態に於ける者の運動は二つの方向に發現する被影響性を呈す、即ち相當の暗示によりて隨意的筋運動が解發され、若くは抑壓さる、例へば、脚が硬くなつて動かぬと告ぐれば、脚部の強直不動の現象起る、從つて軀幹筋、四肢等に硬直を起さしめ、全身一枚の板の如く、頭部と足部とを兩つの椅子にて支へしめ、橋架せしむることも可能なり。

又早發性痴呆に於て往々遭遇するカタレプシトを惹起さしむること容易なり、即ち *suggestive Katalepsie* 暗示性カタレプシト是れなり、通常カタレプシトには抵抗なく、術者の手の動かすに任せて自由に其位置を變更すれど、強直は一旦誘發さるれば他の暗示を與へざる限り、術者の手と雖も之を屈曲せしむること困難なり。

「脚の硬ばりが取れた」と告ぐると共に普通の狀況に恢復す。  
次に自動状態即ち *Automatismus* なる現象起る、是れ緊張病に於て見る所の反

響現象と近似するものにして一種の命令自動なり、暗示によりて被術者はぐる／＼廻轉し、或は間斷なく歌ひ、舞ひ、泣き、叫び、走ることも可能なり、且つ其中間に於て任意に之を制止するを得べし、若し室内に於て目を閉ちて踊れと命ずれば、被術者は椅子、テーブルに衝突し、轉倒するも意とせず踊り廻るを常とす、更に *notorische Anfallserschünnungen* 運動性脱落現象を發現せしむるを得べし、是れ一定の筋群の麻痺にして自動状態の際中にも之を暗示せしむるを得、或は一定の運動の任意の時期、例へば物を口に入れむとする瞬間に麻痺を起さしむること容易なり。

眼瞼、口唇の閉鎖して開かざらしめ、又其反對に開けるまゝ閉ぢざらしむるも亦困難ならず、言語運動も亦同様に影響せらる。

**知覺** 深き催眠状態に於ては任意に感覺を亢進せしめ、減弱せしめ、又は脱失せしむるを得、皮膚の觸覺、痛覺及び溫覺共に適當なる暗示によりて感覺の過敏、減弱及び無感覺を惹起さしむるを得べし、暗示を與へずんば感覺の變化は起り來らず、痛覺脱失を起さしむるには熟練と綿密なる注意を

要す。

味覺、嗅覺共に影響せしむるを得べく、聽覺を奪へば聾となる、暗示によりて生じたる聾は最も強き刺戟によりて除去するを得ず、即ち其耳邊に於て突然大音響を發せしむれども被術者は毫も驚く色なきに反して、術者の發する微かなる言語によりて任意に聽力を恢復するを得べし。

視覺に於ても同様の關係を見る、即ち暗示によりて失明せしむるを得べし、目を開けるまゝ視力を失はしめ、歩行を命ずれば宛然盲人の搜り／＼歩むが如く、種々なる物體に蹉くを見るべく、且つその中より一定の物品を運び來るを命ずれば辛うじて撰り出すを得べし。

此種の失明は何等器質的の變化あるにあらず、ヒステリー患者の失明に相當するものにして、瞳孔は稍散大し、光線調節兩反應共に存するを例とす、色覺も亦同様に左右せらる。

**精神的作用** 催眠の際に於ける**注意**の自然的變化は撰擇的にして、催眠後に於ては記憶は多少減弱す。



注意の變化は著しく被術者の周圍よりする印象に對しては頓着せざれども、術者の言語、行爲に向つては甚大なる注意を拂ふ、即ち術者よりする刺戟に對する反應時間は覺醒時よりも短し。

記憶は催眠後減弱し、催眠間の出來事に對する追想は一程度迄空漠たるを例とすれど、數日を経る間に追想像が自然の睡眠により、夢によりて喚起され、遂には催眠時の經驗を殆んど遺漏なく想起するを得るに至る。

されど暗示を施す時は部分的若くは全部の健忘症を起し、術後之を想起するに能はざれども、別に催眠術を施す時は、其健忘症を除去するを得ると宛然他の術者によりて施術せられたる際と同じ。

こは催眠後の追想に屬すれども、催眠時の記憶の狀況に就いては更に重要なものありて存す、即ち覺醒時に於ては失念して想起すること能はざる過去の經驗、小兒期の出來事、外國語、俗語等を思出すことを得る點なり。

精神分析的療法の根柢茲に存す、又犯罪の發見にも資するを得べし。

次に催眠状態に於ては幻覺 *Hallucination* 及び錯覺 *Illusion* を發現せしむるを

得べし、是れ深き催眠状態即ち夢遊的催眠 *Somnambulypnose* の際に於ける自然的現象の中には本來屬せざるものなるが、暗示を以て之を生せしむるを得べし、例へば小き鏡面を與へて懷中時計なりといふ暗示を與ふれば、被術者は時、分、秒に至る迄詳細に答ふべし、又コップを手に握らしめて白薔薇なりと告ぐれば香氣馥郁として被術者の鼻を撲ち、その形狀、大さ、花辨及び葉數等に就き、問に應じて陳述するを得む、椅子に跨りて馬に乘れりと思惟し、犬となれりとして四つ這ひになりて室内を吠え廻る、或は猛獸目前に現はれて畏怖し、或は潜艇中の人となり、飛行機上の人となり、巴里を訪ひ、倫敦を過ぎ、再び東京に歸り來るも亦容易なり、予の姿は忽焉として被術者の前に消え、後に現はれ、空に飛び、地中に入る、或は蔭中に放尿し、情交の秘密を漏らし、其架空的愛兒を刺すべく命すれば涕泣して争ふを見む。

美しき花面前に開くかと思れば最愛の人は屍體となりて脚下に横はり、愉快なる機會は一變して戦場の慘劇となり、大火となり、洪水となる、即ち種々なる精神病を速成せしむるを得べし。

如上の幻覺とは正反對に、實在する人體、物體等の消失は屢々暗示によりて喚起せらるゝを得べく、ベルンハイムは此種の現象を *Negative Hallucination* 消極的幻覺と名けたり、是れ目を開きて催眠せる患者に予は消失すと云ふ時は、患者は最早予を見ず、聞かず、感ぜざるをいふ、されど、再び暗示によりて常態に復するものとす。

而して如上の消極的幻覺を置換ふるに普通の幻覺を以てするを得べく、又其正反對に幻覺に代ふるに消極的幻覺を以てするを得べし。

予は本年七月予の聴講生の面前に於て一患者に覺醒後の消極的幻覺を暗示し、其實現せられたるを見たり。

フォーレルは精神病者に於て屢々消極的幻覺症あるを實證したりといふ。

**感情生活** これ亦多種多様な變化を受く、自然的催眠の有様にては著變なしと雖も、一旦暗示を與ふる時は、ヒステリー患者の如く急激なる感動の波瀾を生ずべし、暗示して曰く、報あり、君の財産は他人に奪ひ去られ、一家離

散せりと、然らば被術者は深き悲みに沈み、慟哭禁する能はざるを例とす、又暗示を與ふ、曰く、誤報なり、隣人の財産が奪ひ去られたるにて君の一家は安全なり、今や家族は劇場にありて愉快に見物しつゝありと告ぐれば、愉快なる表情は悲哀の微候と代り、樂しげなる笑聲を發すべし、各種の感情例へば憎惡の如き嫉妬の如き、希望、懷疑、驚愕、懊惱、憤怒、輕蔑、恍惚等の如き、いづれも皆適當なる暗示の下に活躍するを得べし、されど此種の感情的波瀾は催眠後も持續すべきを以て容易に試むべからず。

**判斷** 術者の不用意によりて何時とはなしに暗示を與ふるにあらざるよりは概して覺醒時と變る所なし、鯨船に乗つた事がありましたかと問へば有無孰れとも其經驗をありのまゝに答ふべし、然れども、鯨船に乗つた事がありましたらうと問へば、既に幾分の暗示的作用を混ふるを以て、正確なる應答を得難き事情の下にあり、注意すべきことなり。

**意志** 被影響性は極度に充進す、されば催眠療法を反覆すれば意志は次第に薄弱となり、遂には無意志の状態となるが如き謬見を抱く人なきにあら

す、されど實際は其反對にして意志薄弱なる人も催眠術によりて漸次鞏固ならしむるを得べし。

其他呼吸は深く規則正しく緩徐となり、自然の睡眠の際に於けるが如し、一分間に呼吸數二乃至四を減するに過ぎず、尤も苦悶を惹起するが如き暗示によりては著しく増加するを見る。

脈搏は概して變化なし、多少其數を減するが如し、暗示によりて直接に脈搏の數を増すこと能はざれども、精神感動に隨伴して呼吸と共に其數を増すは當然の結果なり。

不隨意的筋運動は通常催眠状態に於ては起らざるを例とす、皮膚及腱反射は深き催眠状態に於ては變化なし、其強さ、性状共に變化なく、催眠前に於けるが如し、筋肉の器械的興奮性亦然り、咳嗽、嘔吐、欠伸、噴嚏、排尿、排便及び勃起等は暗示によりて惹起さるゝを得べし、尿意を高むるも亦容易なり。

クラフト、エビンク及びフォーレル其他は皮膚に充血、出血、火傷、水泡を起さしめ得たる例を有す、妊婦に於ては早流産の危険あれば、催眠術を施す際特に

此點に對して慎重なる注意を拂はざるべからず。

**催眠後現象** 催眠術の最も重要な現象の其一は *Posthypnotische Erscheinungen*

催眠後現象なり、即ち催眠状態に於て惹起すを得べき凡てが又催眠状態より覺醒したる後に於て實現せらるるを得べし、そは催眠中暗示を與ふる際、覺醒後に於て實現せらるべきを豫告すれば、殆んど凡ての者に於て本状態を惹起さしむるを得べし。

されば本現象は單に心理學上の興味を有するのみならず、主として又催眠状態の治療的應用の見地より觀察して大なる意義あるを認む。

此の如く其價値大なるだけ其弊も亦大にして、未熟なる術者が催眠初期に暗示したる事項を其儘に放置する時は、催眠後現象として覺醒後迄持續すること稀ならず、例へば脚の麻痺を暗示して之を除去することを失念せば、覺醒後に於て歩行困難を見ること多きが如し、是れ暗示の實現が催眠中より覺醒後迄持續し得る一例なり。

次に催眠中に暗示したる事項の、覺醒後始めて實現するを欲せば、是れ亦容

易なり、更に又覺醒後一定時間の後始めて實現する暗示を與ふることを得べし、即ち明朝六時半に起床すべしといふが如し、或は又覺醒後三十分の後、再び余の室に入り來り、予の帽子をとりて予の頭上に載せよと命ずる時は大抵の場合に於て實現せらるべし。

如上の運動、行爲のみならず、種々なる幻覺、妄想等を惹起さしむるを得べし、例へば、目を覺した後五分程経つと室内の様子が丸つきり變つて來る、青い光が室内に漲り、座布團は紫色となり、障子建具は眞紅の色に燃える、そして床の間の懸物は金色を放つて美しく輝くと語る時は、被術者はやがて驚嘆の目を放つて周圍を見廻はすべし、凡ての點に於て暗示と符合する變化を呈するを以てなり。

或は又術者の顔貌紅色となり、二本の角頭上に生じ居るを發見せむと告ぐれば、催眠後患者は術者の顔を見て抱腹絶倒せむ。

催眠後現象の動機に就て之を問ふ時は、種々なる應答を得べし、例へば卓上の書籍を椅子に乗せ、再び之を前の所に置き直すべしと告げ、實現したる後

其理由を問へば、一人／＼其答を異にし、

「貴方のお指圖によつて致しました」

「夢を見てさうしたくなつたのです」

「只何となくさうして見たくなつたのです、譯は分りません」

「ふと考へ付いた迄です」

等患者の氣質、性格、教育等に應じて種々なる返事を與ふべし。

催眠後暗示が、若し除去せられずして其儘に放置せられたりとするれば、いかに程長く持續すべきかといふ問題を解決するには、主として與へられたる暗示の性質と強さと、之を受領したる際の被術者の狀況との二條件を顧慮せざるべからず、實驗的催眠状態、例へば右の幻覺の如き場合よりも治療的催眠状態の方、其後影響甚だ長く持續的のものなるは事實の證明する所なり。催眠後現象の實現せらるゝ際の心的状態は、斯くして全然清明なるか、若くは朦朧なる状態なるか、其一なるが、孰れにしても新なる暗示の下に此状態より再び容易に催眠状態に變せしむるを得るものなり。

覺醒より催眠後現象の現はるゝ迄の期間に於て、試験人物は概して完全に清明にして異常なき状況の下にあるを例とす。只何となく落付かず、一定度の不安を徴し得るは、之より何事かを爲さざるべからざる責任を帯べる人の如き觀を呈す、暗示の實行終了するに共に此種の不安は一掃せらる。又催眠後現象に對する健忘も亦容易に惹起さしむるを得べし。

**被催眠性** *Hypnotisierbarkeit* 何人が被催眠性に富めるか、是れ治療的催眠状態の發生に際し極めて重要な意義を有する問題なり、クラフト、エビングの主張せる所によれば、強き意志と考慮とを有するものは容易に催眠状態に置き換へらるを得べし、反之、外界の影響を蒙らざる精神病者及び神経衰弱ヒステリーの一部は被催眠性に乏し、ヒルシュによれば術者の手腕及び人格が被催眠率の標準となるものなりと、或は被術者の疲勞性の如何に關係すと説き、又他の著者は聰明にして集中能力に富み、從順なる者最も被催眠性に富み、神経質にして頑固なる懷疑者は施術し難しと述ぶ。

概言すれば被術者の十中九迄は簡單なる言語暗示によりて催眠せしむる

を得べし。

**健康者と神経病者と孰れか催眠し易きや**、プラムウエルは多數の例によりて此問題の解決を試みたり、其結果左の如し。

百人の健康者中反應せざる者一人もなかりき、中十二名は淺き催眠状態を呈し、四十名は中等度、四十八名は夢遊的催眠に入れり、第一回に於て九十二名催眠し、其他は多くとも四回の試験にて十分なりき。

百人の重き神経病者中二十三名は反應なく、三十五名は輕度、十三名は中等度、二十九名は夢遊度を呈せり、第一回に於て催眠せしは五十一名にして其他は十五回の試験を重ねたるもありき。

反應せざりし者の數につき諸家の報告せし所左の如し、ウエツテルストランドは 3148 例の施術者中 57 例、フォーレルは 265 例中 34 例、リンギアは 210 例中 12 例の催眠不能者を有せしに過ぎず。

其他リーポールは 8%、ベルンハイムは 10%、ピンスワンゲルは 50%、フオグトは 0% を算し、ファン、レントルゲーム等は 1089 例中 533% を數へしに

過ぎず。

男女いづれか被催眠性高きか、Bainisの統計的觀察によれば、男女同様にして異なる所なく、夢遊状態の關係も亦殆んど同數なり、即ち男一〇〇例中一八、八に對して女一〇〇例中一九、四を數ふと。

年齢の關係につきては同氏の統計表(百分率)に就きて觀察するを便とす、即ち左の如し。

年齢	不眠	初眠	輕眠	深眠	深甚	夢遊
七歳迄	—	四、三	五二、一	一三	四、三	二六、五
七歳より十四歳迄	—	—	一三、八	二三	七、六	五五、三
十四歳より二十一歳迄	一〇、三	八	五、七	四四、八	五、七	二五、二
二十一歳より二十八歳迄	九、一	一七、三	一八、三	三六、七	五、一	一三、二
二十八歳より三十五歳迄	五、九	一三	一七、八	三四、五	五、九	二二、六
三十五歳より四十二歳迄	八、二	五、八	二八、二	三五、二	一一、七	一〇、五
四十二歳より四十九歳迄	一二、二	九、四	二二、六	二九、二	四、七	二一、六
四十九歳より五十六歳迄	四、四	一〇、二	二七、九	三五、二	一四、七	七、三
五十六歳より六十三歳上	一四、四	一三	一八、八	三七、六	八、六	七、三
六十三歳上	一三、五	六、七	二〇、三	三八、九	八、四	一一、八

右の表に就きて特に注意すべきは、小兒期及び少年期に於て夢遊度を呈すること最も高き點なり、即ち七才迄の**二六、五**、七歳乃至十四歳の**五五、三**是れなり、此年齢に於て被催眠性乃至被暗示性の最も高きは一方より見る時は教育上、感化上重要な意義を有するを察すべし。

次に諸家の統計中より被催眠性の最も高きもの、即ち夢遊度を呈せる者の百分率を擧ぐれば左の如し。

ヒルシュ	一〇—一五%
ファン、レンテルゲーム	—%
リーポール	—%
ウェッテルストランド	—%
ベルンハイム	一五—一八%
フォーレル	—%
フォン、シレントク、ノッティング	—%
ヒルゲル	—%

フョグト

八三%

以上の統計により被催眠性の概要を知るを得べし。

異常なる夢遊催眠 異常なる本状態と對照せしむる爲め先づ普通なる夢遊状態を記述すべし、即ち人間の器械化せる有様とも名くべく、自動現象完全にして醫師の命令は絶対に服従せらる。立てと云へば立ち、歩けといへば歩み、座れといへば座す、前進は出來ぬが後退が出來るといへば無益に前進を試み、次第に後へ退くを見るべし、又前進、後退共に不可能にして足蹠は床板に固着して離れずと告ぐれば、棒の如く立ちたるまゝ、一動をも爲す能はず。

兩脚麻痺せりといへば卒然倒れ、右の脚麻痺せりといへば左の脚もて跛行すべし、次に脚力恢復せりといへば普通の歩行となり、踊れといへば舞蹈す。知覺も亦自由に影響せられ、亢進、減弱、錯誤いづれも任意なり、例へば被術者の口中に鹽を入れ、砂糖なりといへば、一部の者は暗示を不完全に受領し、若くば鹽味を發見するに反し、一部の者は砂糖として之を味ふ、又同様に水を

與へて酒と爲すを得べし。

聽覺失はれたる暗示によりて聾となり、答へず、強音に反應せず、又啞者、吃語家、盲人たらしむるも勝手なり、其他鉛筆を與へて卷煙草といへば被術者は之を口中にし、心地よげに想像の煙りを空中に吐く、或は筆を簪として與ふれば之を髮に搜みて喜びの色を現はす。

次にベルンハイムの所謂高等なるものに至つては各種の妄覺を發し、多様な幻覺急速に且つ鮮明に發生し得るは既記の如し、其他の行爲、動作、一として意の如くならざるはなし。

又夢遊状態に於ては暗示により寫字、勉強、音樂等を爲さしめ、互に遊戯せしむることも容易なり、目を開きて活動しつゝある彼等を目撃する者誰か深催眠度の状態なりと信せむ、術者の虚構を疑ふべきも、暗示一下、綿の如く床上に横るを見れば又驚異の眼を睜るべし。

概して夢遊度に於ては暗示を與へずんば完全なる弛緩の下に静臥するを常とす。

之に反して病的なる夢遊状態に於ては一、二の暗示は受領せられて其他の暗示は實現せられず、若くは最深催眠度なるにも拘らず、暗示感性の亢進毫も存在せざるが如き場合多し、而して自然的現象の發動あり、普通の夢遊催眠には附屬せざる徵候なり。

若し普通の催眠状態の特徵として無限なる暗示感性感、催眠中に於ける自然的現象の缺乏と、適當なる暗示によりて發生したる催眠後の絶對的快感を擧ぐるを得ば、病的夢遊状態は凡ての點に於て差異あるを見るべし。ヒルシュによれば病的夢遊状態を左の如く分類するを得べし。

(一) Elektyhypnose 選抜催眠

催眠状態に於ける暗示に對抗する自己暗示の強盛を以て特徴とす、普通の夢遊状態に於ては自己暗示は單に從屬的關係の下にあり、即ち普通の夢遊状態に於ては、外見上自然的に、若くは自己暗示の結果、發生したる現象少なからず、例へばカタレプシー、無痛覺、自動現象及び其他の徵候の如き是れなり、然れども被術者が果して術者の言に聽從するか、若くは以前の暗示が習慣性に反覆せられたるかによりて其一若くは其二なるを察すること左迄困難ならず。

然れども本状態に於ては全然其關係を異にし、自己暗示盛大にして術者の言に聽從せざるのみならず、却つて其反對に之と逆行し、交叉するを見る。尤も普通なる催眠度に於ても術者の暗示の少しく拒まるゝことなきにあらねど、そは被術者の情緒が暗示によりて苦痛を呈し來れる場合なれば、適當にして強盛なる暗示を加ふれば容易に之を鎮靜せしむるを得べきに反し、本状態に於ては、試験人物の意志は術者の命令に對して優勢なることあり、これ素より特殊なる事情の下に於てなり、例へば試験人物が催眠前に於て既に自己暗示的に影響せられたる如き現象に關する時は是れなり。

斯くして本催眠状態は伴症及び滑稽の印象を與ふる所の特殊なる象型を呈すべし。

當初此種の人物は普通なる夢遊催眠に於けると全く同様に幻覺及び催



眠後暗示の全部を遺憾なく實現すべし。

されど今回の催眠に於ては其反對に各種の實驗の遂行を拒むを見む、是れ既に本人がこれ迄經驗したる所に對して催眠前より自己暗示的に準備する所ありし結果なり。されば本人の豫期せざりし未知の實驗を試むる時、其反對に好良なる結果を收むるを得れども、之とても遂に自己暗示によりて抵抗し去らるるを例とす。

例へば、右の腕が全く硬くなつて曲らぬといふ暗示に對して、「いゝえ、どうして此の通り曲りますよ」と嘲弄的口調にて答ふるを見む、次に他の催眠者に一片の紙を與へて、チコレートの一片なりと暗示したるに、試験人物は笑ひて紙切れです、又此の實驗をされるに相違ないと思ひましたから、もう今度からは騙されまいと、ちやんと其の用意をして來たのですといへり。

此種の自己暗示的抵抗強きに拘らず、特殊なる事情の下に於ては暗示の影響の實現を見ることあり、例へば簡單なる運動性暗示、即ち強直、麻痺の

如きは長き自己暗示的抗爭あるにも拘らず、反覆して強烈に暗示する時、若くは突然該暗示の急襲を行ふ時は、模範的に發現せらるることあり、されど此現象の持續は術者の暗示の勢ひ衰ふる時は被術者によりて隨意に短縮せらるるを例とす。

幻覺的暗示を成立せしめむには、試験人物は豫て之に對して自己暗示的に準備する機會を有したるべきを以て、暗示的幻覺をば斬新にして豫期せざる聯想的成立を以て按配し、備へざるを突く底の奇襲を行ふを要す。

例へば試験人物を犬に變せしめ四ツ這ひとなし室内を吠え廻らしめたりとすれば、次回の試験の時には斯様な馬鹿らしき眞似は斷じて爲すまじと決心し、此實驗に對する準備を爲せりと見做すを妥當とす、されば同一形式の暗示を與ふれば、僕は犬ではありませんと答ふるに相違なし、斯様の際、沈着なる態度と抑揚に富む音聲とを以て併し頭が次第く前に前の方へ伸びて行くのに氣が付いたであらう、それ位のことでは明瞭に分る筈である、鼻の先が潤つて冷たくなり、美しい白黒の斑の毛が身體中に

生へさがり、腕も脚も細く固く引締つて、身體は四つ脚で支へられ、尾を振りながら室内を駆け廻つて吠える。

と語る時は恐らく其暗示は再び奏功すべし。

次の一例はヒルシュが一團の醫師に供覧したるものなるが、試験人物は各種の暗示に抵抗して一も實現せられず、試験は失敗に了れるまゝ、本人を靜に眠らせ置きしに、突然本人は劇しき渴を覺えて水を乞へり、之に鉛筆を與へて一杯の冷水なりと云ひしに、彼は手もて觸れながら、鉛筆にあらずや、此室には冷水はなき筈なりと語れり、此時余は室外に出で、水を取り來るべしと告げ、戸を開きて眞實に室を出で、一個の音叉を携へて歸り、一杯の水こゝにありと云ひしに、彼は手に取りて音叉を口に入れ、想像的の冷水を心地よげに呑み、渴癒えたるを喜べり、試みに右の如き觀察を定型的普通の夢遊催眠状態と對比せば、實地的、學理的の意義を包藏すること少なからざるを見すべし。

以上の外選抜催眠に於ては普通の夢遊度に於ては見るを得ざる Spontane

*Erscheinungen* 自然的現象を見ること稀ならず。

即ち本人は自然的に動作し、不安らしく其位置を變じ、夢想到に耽り、自然的に覺醒し、或は呼び起されて、催眠時間の不足なる不平を鳴らし、時間の延長を希望す、覺醒後も快感なく、却つて強度の疲勞嗜眠の感等あり、欠伸し、頭痛、眩暈、精神昏濛を訴ふ。

既記の實驗的催眠状態に比して治療的催眠状態は障礙の度稍輕き感を呈すれども、自己暗示の出現は依然として術者の暗示を打破するを例とす。本状態は主としてヒステリー中の自己暗示型に於てのみ現はるゝものとす、元來ヒステリーの行爲は催眠状態以外に於ても種々なる外來の暗示及び自己暗示によりて複雑なる色彩を呈するは人のよく知る所なり。選抜催眠の程度は多様に於て右に掲げたるは其最も高度なるものの例なり。

(二) *Die abnorme Schlaflynose* 異常なる睡性催眠

本状態の特徴は催眠術によりて普通なる催眠状態を惹起す代りに、普通

なる睡眠若くは病的なる睡眠状態を呈するをいふ、即ち最も單純なる例に於ては眞の自然的睡眠を生ずべし、是れ獨りヒステリーと云はず、疲勞の場合等に於ても發現す。

此種の睡眠状態に於ては鼾聲を發して安眠し、暗示は到底受領せらるゝことなし、自然的に覺醒したる時は驚起したるが如き觀あり、覺醒後は普通の催眠者に於けると同様の關係の下にあり、若し覺め來らずんば前額の觸擦若くは低聲に其名を呼べば睡眠を終了せしむるを得べし。次に不自然なる睡眠が催眠の代りに現はるゝは主としてヒステリーに於て見る所にして其意義大なり、吾人がヒステリー、癲癇等に於て見る所の深き意識障礙を有する夢遊症と一致するものなり、催眠者は不安にして右に左に身を動かし、急突なる全身の搖ぐが如き運動を爲す、且つ凡ての暗示試験に對して聾にして、強き疼痛をも感せず、夢想に耽るを例とす。斯様の際之を覺醒せしめむこと困難にして、未熟なる術者は數時間を徒費することあり、自然的覺醒は長時間を要す。

ヒルシユは次の如き方法を講ずれば五分乃至二十分にして不自然なる睡眠者を覺醒せしむるを得べしといふ、先づ耳邊に於て強く音を鳴らし、聽覺の醒されたる證左として頭を動かす時、高聲に二三の暗示を與ふ、その中に二三の治療的暗示を混じ、終りに上眼瞼を軽く刻時的に動かすつゝ、自然的に目を開くに至つて覺醒方法は完結するものなり。這般の不自然なる睡眠後に各種のヒステリー性症狀の發するを見る、尤も前より興奮を呈せる時に於てなり、概して深眠後の快感を徴し得べし、仔細に觀察する時は此種の不自然なる睡眠を呈するヒステリー患者は其深き自然的睡眠に於ても催眠的試験に於けると同様な現象を呈するを發見すべし。

(三) *Das hysterische Hypnoid* ヒステリー性催眠

當初フロイド及びブローエルが稍異なる意味に使用したる名稱なるが、茲には催眠術によりて普通の催眠状態を呈する代りに一程度迄重きヒステリー性障礙を發する状態をいふ。

軽度なるものは、障礙はヒステリー性震顫に限られ、苦悶状態、心悸亢進、嘔吐等を伴ひ、術者の作業は停止せざるべからざるに至る。又他の場合に於ては、先づ眞實の催眠状態を呈すれども、上記のヒステリー性障礙は依然として存し、色情的興奮を見ること稀ならず、而して後者は之を鎮静せしむること容易ならず、此種の状態に於て常に部分的暗示感性の維持せらるゝを認む、之に反して最も重症なるものに於ては暗示感性は全然消失す、即ち催眠状態の代りに最も重き定型的ヒステリー性発作の出現あり、例へば意識喪失及無痛覺を伴ふカタレプシー状態、間代性痙攣、叫聲、泣聲、後弓反張、演技状態及び譫妄期等各種の變型に至る迄、複雑に出現し、シャルコーの所謂大ヒステリー發作に酷似し來るを例とす。此發作の持續は一定せざれども概して長きを常とす。覺醒後は絶對的健忘症と全身状態の増悪とを發生し、殆んど常に何回となく續け様にヒステリー發作を反覆し、或は其際卒然として倒れ、重き損傷を生ずることあり、此種の危險と治療的暗示の見込なきと相携へて見

はる、本状態を呈するもの比較的稀なり。

(四)

*Die spontane Somnambulie in der Hypnose* 催眠中に於ける自然的夢遊症。

異常なる夢遊催眠中の此種に屬する状態は既にフロイド、ブローエル、ブルューゲルマン、スターデルマン、レーウエンフェルド及びフォグト等により精細に描寫せられたるものにして、當初外見上異常なき催眠の觀を呈し、暗示感性は部分的に減弱し、可なり突然に自然的色情的色彩を有する興奮状態を發す、こは既に遠き過去に屬したる出來事に關し、嘗て強く興奮し、精神を震盪せられたる經驗の再現せられたるものなること多し、一患者は(ヒルシュ)此状態に於て以前の新郎の活潑なる幻覺を現はし來り、宛然演劇様場面を現出し、同様の非難、請求及び怨嗟を反覆したることあり、患者は術者を想像して新郎と思惟し、彼に對して熱涙を揮つて愛情の濃かなるを誓ひたり。

此種の自然的夢遊催眠に踵ぎて先づ自然的健忘症現はる、其他催眠後の違和、眩暈等あり、或は覺めて少時の後、催眠中に於ける重きヒステリーの

徴候を有せる全現象の自然的摘要を演出するもあり。

催眠中の夢遊の状況は常に同一にして、現在に於て忙しく其心を用ひつゝある件が其内容となること絶えてなく、嘗て其精神的生活に於て最大なる空間を占領せしことある同一なる出来事の反覆に過ぎず、フロイド一派の所謂箝頓せる感動の状態に於けるものは是なり。

此種の催眠中の自然的興奮状態は概して物理的に患者の身體に觸接したる際例へば額上に手を宛て、觸擦するが如しに發生するものゝ如く、單に言語暗示を與へたるのみにては決して其の發現を見ることなし、從つて物理的觸接を除く時は數分間にして興奮去るを例とす。

該興奮状態に於て暗示感性は素より減弱すれども消失したるものにはあらず、普通の場合と其性質をも異にしたるを見る、例へば如上の一例の如く新郎の幻覺起れる際には、術者が新郎の資格を以て場面上の人となり、暗示を與ふる時に於てのみ其結果の實現を期待するを得べし。本状態は甚だ稀有にして大ヒステリーに於てのみ之を見る。

夢遊催眠の異常なる如上の四状態は最も定型的なるものゝみの描寫なるを以て、其他稍輕度なるものより普通の催眠状態に近き程度に至る迄、多様な階級、差異あるは疑を容れず、畢竟するに病的夢遊度に於ては、暗示感性の減弱若くは喪失と、催眠中に發生し來る自然的現象と、覺醒困難と、催眠後に於ける快感の障礙とを有するを以て特徴と爲す、而して如上の凡ての固有なる状態は、例外なく、ヒステリーに於て發見せらるゝものとす。

## 第五章 催眠状態の程度

### (一) シヤルコーは催眠状態を次の三期に分てり、即ち、 *Lethargie* 初眠期

凝視により直接に此時期を生せしむるを得べく、又人為的閉目により間接に起さしむるを得べし、眼は閉鎖し、四肢は弛緩性に垂れ、反射は亢進し、皮膚は無感覺となり、神経筋肉の器械的興奮性高まり、筋力は四肢の積載

力より推す時は覺醒時の五倍程大となり、暗示は受領せられず。

(二) *Kataleptic* カタレプシー期

右の第一期より人為的に開眼せしむる時、若くは突然強き音響を發すれば此状態を生ず、即ち目は開き、四肢は與へられたる任意の不便なる位置を維持す、其時顔貌にはおのづから四肢の位置と一致する表情現はれ、反射は消失し、無痛覺にして暗示を受領す。

(三) *Somnambulismus* 夢遊期

本状態も亦直接凝視により、若くは第一期、第二期より前額の觸擦に因り時に發生することあり、目は半ば閉ぢ、若くは全く閉鎖す、皮膚刺戟により、例へば觸擦すれば該部の下に横る筋肉の攣縮を起し、人為的に四肢の位置を變化せむとすれば一定の抵抗を感ず、攣縮を去るには之を生じたるが如く皮膚刺戟を要す、暗示は受領せらる、催眠後に於ては健忘症を見ず、催眠後の命令は自動的に執行せらる、以上の三時期は歴史的興味を有するものとして茲に掲げたるが、實際に

於ては催眠状態の正確なる描寫にあらずして、寧ろ術者の不用意に與へたる暗示の技術的產物、若くはヒステリー患者の自己暗示の發露に過ぎず。

次にリールボールの分類を記さむ。

第一度 多少著明なる睡眠あり、眼瞼の壓重の感及び初眠を以て主徴候とす、初眠は數分乃至三十分間持續す、其間大抵靜臥すれども稀には覺醒せざるまゝ身動きを爲すもあり。

多數は此時期に於て真に就眠するにあらず、單に眼瞼を閉ぢ、問に答へ、暗示によりて開眼不能となる、是れ亦第一度催眠の一種なり。

第二度 暗示性カタレプシーを以て主徴候とす、即ち四肢は任意に與へられたる位置を保つを見る、或は著明なるあり、或は微弱なるあり、以て暗示感性の厚薄を察すべし。

第三度 睡眠は一層其度を加へ、觸神は減弱若くは消失す、而してカタレプシーと共に自動運動の起るを見る、之を検するには被術者の兩腕を執り、之を

交互に廻轉せしめ、此通り手が廻つて止らぬと告ぐれば、或は長く或は短く廻轉すべし、且つ暗示性攣縮をも生せしむること可能なり。

被術者は已れに話されたる言語の凡てを聴取するを得べし。

**第四度** 既記の徴候以外に、被術者の外界に對する關係の喪失を以て特徴とす、即ち被術者は術者の言語を聴取するを得れども、他人の言を聞くこと能はず、術者とのみ交通する状態なり、尤も術者の意志によりて特に外界との關係を保たしむることを得。

**第五度及第六度** 催眠中に起れる凡てに對する健忘症を特徴とし、夢遊状態を發す、第五度は夢遊状態の輕度なるものなり、而して不定の追想を有し、個々の記憶の浮揚あり、知覺の除去、暗示性カタレプシー、自動運動、暗示性幻覺等の現象完全に構成せらるべき時期なり。

第六度に於ては夢遊状態の程度深く、後よりの追想全く失はれ、自ら覺醒すること能はず、一切の命令に聽從する時期にして、術者若し之を欲せば追想を有せしむることを得べし。

次にベルンハイムに據れば、催眠状態の程度は左の如く分類せらる。

**第一期** カタレプシーも知覺脱失も暗示性幻覺も起り來らず、睡眠の暗示の下に靜に目を閉ちて安臥すれども、自己の意志を以て容易に目を開くことを得べし、即ち影響は微弱にして疑はしきにも拘らず、或範圍内の暗示性の亢進あり、例へば身體の一定部位に温感を惹起さしめ、幾多の疼痛を除くを得るが如し、即ち理學的現象に對する暗示感性の亢進を特徴とす。

**第二期** 外觀は第一期そのまゝなれども、相異の點は自己の意志を以て目を開くこと能はざると、催眠的影響の疑はしからざることなり。

**第三期** 閉目、開眼を問はず、暗示せられたる位置を保ち、更に命令せらるゝ迄は之を變更せざるを以て特徴とす、暗示性カタレプシー、著明なり。

**第四期** 暗示性カタレプシー一層顯著にして、上肢の自動的廻轉運動(上記)を起さしむるを得べし、稀には自動運動なきもあり。

**第五期** 第四期の徴候以外に一定度の攣縮を起さしむるを得べし、即ち腕を屈曲し、手を開き、口を開閉するの運動不可能となる。

**第六期** 以上の徴候の外、命令によりて自動するを得、例へば暗示により起立し、歩行し、停止し、逆行し、不動となるが如し。幻覺錯覺は以上の諸期に於けると同様發現すること少し。

右の諸期に屬する患者は就眠の暗示を與ふるにも拘らず、覺醒後十分なる追想あり、其中一部の者は就眠せし自覺あり、他の一部は睡れるや否や明瞭なる自覺を有せず、尙殘りの一部は明に就眠せざるを信ず、第四期乃至第六期の者は概して暗示の効果あるを見る。

次に催眠的影響の各期にして、覺醒後追想を缺く所の状態を夢遊状態 *Somnambulismus* と名く、換言すれば知覺なく、幻覺可能にして各種の運動を暗示し得る時期を夢遊状態と稱す。されど其程度種々なるを以て此時期を分ちて左の數種とす。

**第七期** 覺醒後追想なけれども催眠中幻覺を起さしむるを得ず、カタレプシ、攣縮、自動運動及び命令聽從等の諸現象を呈す、甚だ稀に此等の徴候を缺き、健忘症のみを特徴とすることあり、眼は或は開き或は閉づ。

**第八期** 以上の諸徴以外に幻覺を發生せしむるを得べし、但し幻覺の催眠後暗示 *posthypnotische Suggestion* は不可能なり。

**第九期** 催眠中の幻覺 *intrahypnotische Hallucination* は素より、催眠後の幻覺の發生可能にして、或は幻視を起さしむるを得ずして、幻聽、幻嗅を發現せしむるを得るあり、其程度、種類多様なり。

右の時期を通じて暗示性無感覺及び無痛覺の發露あり、殊に夢遊状態の程度深き程此等の徴候著明なり。

次に**フォーレル**の分類を左に掲ぐ。

(一) *Somnolens* 睡氣期

軽度なる催眠にして自己の力により暗示に抵抗して目を開くことを得る時期なり。

(二) *Leichter Schlaf, od. Hypotaxie, od. Charmé* 淺眠期

被影響者は最早自ら目を開くこと能はず、暗示の一部若くは全部に聽從し、多くは運動性暗示の實現あり、幻覺及健忘症を缺く、往々催眠後の現象



の發露を見る。

(三) *Tiefer Schlaf, od. Somnambulismus* 深眠期若くは夢遊期。

幻覺と催眠後暗示と催眠後の健忘症とを以て特徴とす。フォーレルによれば夢遊状態なる名稱は妥當ならず、何となればヒステリーに於て往々見る所の症候なればなり、暗示感性は必ずしも大ならず、場合によりては深眠期に於て甚しく微弱に或は全然缺如することあり。

以上諸家の分類の中リーボール、ベルンハイム・フォーレルのを以て最も適切なるものとす。

第六章 催眠療法の豫備條件

催眠療法の實地的應用適當なる現代的術式を述ぶるに先ち、豫備條件を説くの要あり、之を左の數項に分つ。

(一) 周圍に對する豫備條件

成るべく車馬、製造所等の音響の到達せざる閑靜なる一室を選び、敷物、窓

掛皆調和したる靜穩なる色合を用ひ、日光、電燈を鈍らし、強き香氣、若くは臭氣を避け、石炭酸、ヨードフォルム、リゾール、フォルマリン等の藥品を置かず、あるかなきかの心地よき香氣を漂はし、安靜と催眠とに都合よき條件を具備せしむべく、假にも過敏なる患者を畏怖せしむるが如き裝置を室内に設くるを禁ず、例へば外科的器械、婦人科的內診臺、大なる電氣裝置等の如し。

(二) 患者に對する豫備條件

今日の催眠術様の療法は往古エヂプトの僧侶の司る所にして、所謂 *Tempel-schlaf, Temple sleep* 寺院睡眠と稱せられたるは、一種の催眠状態なりしが如く、患者は其眠りの間に於て僧侶の問に答へ、療法に對する幾多のヒントを自白せしかば此種の應答は神託と見做されたり、希臘、羅馬時代に於ても此種の療法盛に行はれたるが、今日の如き科學的基礎を有せず、何等の醫學的根據なかりしにも拘らず、患者の信仰と推服とを確實ならしめむが爲に種々なる準備的方法を講じたるが如し。

今日に於ては患者の信頼を博する最上策としては精細なる身體的精神的診察に優るものなく、是れ施術の目的を達する豫備條件の隨一なり。而して診察の結果、輕快若くは全治すべき性質の疾病ならば豫め之を告げ置くべし。又患者の重きを措く心的状態にして其價値小なりとするも、決して之を輕視するが如き態度を示すべからず。患者は往々催眠術に關する誤れる見解を携へて醫家に臨む、即ち其思惟する所によれば、催眠術は一種の麻酔術の如く吾知らず内心の秘密を打明くる虞れありと、或は色情の濫用を恐れ、又他の者は後害を憂ふ、要するに患者の殆んど凡ては催眠術によりて眞の熟睡を惹起すものと考ふる傾向あり。就中此種の憂慮は豫め除去せざるべからず、尤も患者の憂慮する範圍に於て其不安を除くに力むべく、患者の語らざる點に對しては術者より進んで觸れざるを可とす、而して催眠の間、神経系の爽快なる安息を來すべきを力説すべし。

(三) 施術者に對する豫備條件

施術者は時間と心の安靜を有する時に於て施術すべく、疲勞して興趣なく、不安なる際には之を避くるを可とす、且つ倫理的感情に富み、博く社會の知識を有し、同情あり、機智あり、堅忍なるを要す、而して術者は催眠術に關する絶對的技倆を有すべきは勿論なり。

次に注意すべきは術者の手にして、メスマルの觸擦を行ふ際、患者の前額等に觸るゝを以て、其柔軟にして滑に、餘りに温からず、又冷からざるを要す、加之其外觀、臭氣等より不快の感を抱かしむる虞あれば、施術前には必ず手を洗滌し、グリスリン、バスタ、若くは蠟バスタを塗り、香水を點するを可とす、余の經驗によれば、手につける烟草の臭氣は往々神経質若くはヒステリ性の婦人の嫌忌する所となり、施術の障礙を醸すこと多きのみならず、呼氣の際の食物の殘餘、烟草等の臭氣も亦不快なる印象を與ふべきを以て、術者の口中は常に清潔ならざるべからず。

(四) 場所及び時刻に關する豫備條件

施術の場所は概して患者より醫家の治療室を適當とす、但し起臥不自

由なる患者に對しては其場に於て之を施すも可なり、長椅子、肘掛椅子、診察臺、いづれも窮屈ならざる姿勢を取り得る限り、治療に便なり、兵古帯の結び目は之を解きて、巻帯となすべく、羽織、洋服の釦等の餘りに窮屈なるは之を寛うすべし。

施術の時刻は午前よりも午後若くは夜間を撰び、立會人なければ安心して施術に應ずること能はざる患者には家族を附添はしむ、場合によりては同時に二三の患者を施術する方便なることあり。

## 第七章 催眠療法の術式

### (一) メスマルの法

メスマリズムなる語の嘗て包容したりし不可思議にして超自然的なる勢力の秘密の幕は除去せられ、今やメスマルの觸擦は暗示的作用を有するのみならず、一面に於ては又物理的性質を帯び、輕微なる觸擦、手温、空氣の震動と尙他に一定度の電氣的作用を發揮し、且つ種々なる感覺を生ぜ

しめ、催眠状態の誘導に好影響を及ぼすものなること明白となれり。メスマルの施術せし方法として言傳ひらるゝ所によれば、兩手の指を擴げ之を徐々ど一様に動かし、患者の身體に最も近接して頭部より心窩部迄若くは脚部迄觸擦し、之を反覆して催眠する迄持續するにあり、此種の手觸は單に數分間に止らず、數時間、數日間に亘りて行ふことあり。次に以上の變法として術者の手掌と被術者の手掌とを近接して繁雜なる上下の運動を行ふ法もあり、或は温の感覺を與へて催眠せしむるもあり。要するにメスマルの手觸法は廣き範圍に亘りて之を行ふの必要なく、他の方法と結合して單に前額のみ之を施すを可とす、斯くすれば長き時間を要せずして催眠するの便あり。

### (二) 凝視法

既記の如くブレイドの創めたる方法にして、光輝ある物品を凝視せしめて催眠を促すものにして、時計、水晶の印材等最も可なり、視線は稍上方に

向ふが如き位置を保たしめ、凝視點と眼との距離を約二十五仙迷乃至三十仙迷とす。若し光輝ある物品を厭ふ者あらば術者の指頭を見つめしむるによりても施術し得べし。

ハンゼンの用ひたる催眠術用器械は黒色に染めたるコルクの中に光輝物を固定したるものにして、其後 *Hypnoscope* なるもの坊間に販賣せらるゝに至れり、此催眠鏡なるものは黒色板に結晶を固定したるもの、若くは硬ゴム匣の前壁に開口部ありて、其内面は微弱に反射する所の鏡面となれるものより成る、尙他に案出せられたる器械あれど、いづれも必要缺くべからざるものにはあらず。

本法によりて眼疾患頭痛眩暈等を起すことあらば他の方法を使用するを可とす。

尙本法の一種にして凝視物の代りに術者の眼を用ふるもの、即ち睨視法、若くは魅心法とも稱すべきは彼の有名なるフアリアの懲憑せし所にして、術者は鞏固なる意志を以て患者の眼を睨み、命令的口調を以て *Darner*

睡れと叫ぶものなり。

### (三) 言語暗示法。

是れリエーポールの方法にしてベルンハイム、フォーレル等更に研究を遂げ、廣く應用せらるるに至れり。

患者は靜に坐臥し、明示せられたる一點に眼を注ぎつゝ、左の如き術者の言語に耳傾く。

「眼瞼は次第／＼に重くなつて來る、目の前の物は一つ一つ消えて行つて、視力は益々弱く、ぼんやりして見えない、眼瞼はばち／＼として閉づる、全身はちつとしたまゝ動かない、疲れが出て來て最早堪らない様になつた、寝くて／＼堪らない……………もう眠つた、確に眠つて居る。」

此種の暗示を與へて催眠を促すものは最も無害なる方法と稱せらる、されど之に關しては尙幾多の議論ありて、眼瞼閉鎖の暗示を不必要にして寧ろ有害なりと見做すもあり、又右の言語の點線の所に省略したる言葉、例へば「段々考が亂れて來て纏らない様になつた、氣が遠くなつて何もか

も別らない、夢心地だ、

の如き暗示に對しては、往々自己暗示を喚起し來りて、術者の目的を頓挫せらるゝ虞ありとの理由の下に之を是認せざらむとする學者もあり、其説によれば、自然的就眠に出來得る限り接近したる言語的暗示を以て最良と爲す、即ち自然の眠りつきの際に於ける現象は左の四條件より成るべし、

(1) 呼吸型の變化 即ち覺醒時に比して緩徐となり、深さを増し、より平等なる回数の呼吸となる。

(2) 固有なる精神状態 即ち通常意識なく、思考停止し、若くは緩徐なる時に夢あり。

(3) 筋肉の弛緩

(4) 眼球の上内迴轉若くは上外迴轉 之によりて自覺的に暗黒の度を加ふ。

以上の現象の中大部分は隨意的に喚起すことを得べく、従つて言語の暗示は右の心理的、生理的現象を寫生的に模倣するを可とす、即ち次の如き言語

は如上の要項を具備するものと見做さる。

「静に徐に、平等に呼吸をする——始めから終迄自分の呼吸に注意する——すると夜床に這つて目を閉ぢて眠りに就く時の様な心地よい休息の感じが起つて來る——段々疲れが増して來て睡くなる——神経が休まる——思想が散ばらになつた——疲れが一層増して來た——全身が氣持よくなるくなつて來た——四肢が重くなつた——目の前が益々暗くなる——深い、甘い睡眠が起つた、よく睡つて居る」

次に始めて施術を試むる場合にして稍長き言語的暗示を與へむとする時は左の如く述ぶるも亦一法ならむ、

「静に、平等に、徐に呼吸をする、そして始めから了ひ迄呼吸に注意をする——胸廓は静に高まり、又低くなり、息は出たり、這入つたりする——これから、就眠しやうとする時のやうな深い、心地よい休息の感覚が心の中に一杯になる——段々身體がたるく、眠くなつて來る——神経の安靜が始まつた——考へは休息と疲労の方へ集つて來る——休息を妨げる様な思

想は一切消えて亡くなつた——疲れは益々増して来た——全身は心地よく、たるくてたるくて堪らない——筋肉はゆつたりとなつて、張りがとれた——腕も脚も重くなつた——身體を動かすのが大儀な程、重いといふ感じが強く著しくなつた——もう自分で手足を動かすことが出来ないうやうになつた——身體中が今氣持よく暖かになつた——先づ脚の方が温かになつて、それから手の方も温かになつた——それから眼瞼にも同様に氣持よい温さを感じる——疲れはそれと共に益々加はつて、眼瞼は一層重く、重くなつて来た——身のまはりが暗くなつた——深い氣持よい休息と安静とが全身に擴がつた、よく眠つた——

(四) 音響催眠法

凝視法は眼の疲勞を惹起するを以てハイデンハイン、ワインホルド等は音響を以て催眠せしむる方法を考案せり、例へば懷中時計、柱時計等の音に注意を集中せしむるが如し、尤も周圍の喧囂なる際には適せざるも、然らざる時には好良なる暗示法の一種なるべし。

(五) 電流暗示法

オイレンブルヒの懲應せし方法にして、頭部に弱き平流電氣を應用しつゝ、催眠の暗示を與ふるものなり。

(六) 複合催眠法

本法は催眠的治療に經驗ある人の間に於て最も廣く行はるゝ方法にして、余も亦本法若くは言語暗示法を推稱する一人なり。是れ凝視法と、言語暗示法と、メスマル手法とを合併せしめたるものにして、術者は先づ左手に光輝ある物品を執り、之を患者に凝視せしめつつ、傍より上記の簡單なる言語暗示法を施すと共に、右の手を以て軽く患者の前額部を觸擦するなり。斯くすれば凝視の時間を短縮し、比較的急速に深き催眠状態を起さしむるを得べし。治療上最も有効なるものとして以上の六種の方法を數ふべし、其他俗間に於て行はるゝ術式は多種多様にして枚舉に遑あらず。最も簡單なる方法は神經質の患者に時々試むるを得べく、單に術者の指

端もて患者の眼瞼を閉鎖すると共に極めて軽く眼球を壓するにあり、斯くして催眠状態を惹起せしむるを得べし、此種の患者に對しては凝視法を試むるの餘地なく、又其必要を認めざるなり、斯くして催眠せばそれより先は言語暗示法を施せば任意に其程度を深からしむるを得べし、施術前後に於て鎮靜催眠劑を投ずるを可とする場合あり。

### 第八章 催眠状態の持續

通常の場合に於ては施術の時間は概して短し、餘り長き暗示は却つて患者を苦ましむる虞あり、されば治療時間は一日一回十分乃至十五分間に制限するを可とす。

斯の如き短時間の催眠を一日の中に數回反覆せしむれば、暗示感性は著しく高まるを例とす、稍困難なる治療例へば不眠症、震顫、痙攣等に對しては、一、二時間に亘りて此種の反覆催眠を試むるも可なり、最も注意すべきは數回施術したる後の患者は單に術者の顔を見るのみにも催眠すべく、電話に

より、又は電報によりて、或は指端の合圖によりても催眠すれども、毎回必ず正常の術式を以て之に臨むことを忘れざる點なり、即ち術者の雙肩に掛れる飽く迄嚴肅にして重要な使命の誤解を蒙らざるやう絶えず相當の注意を拂ひ、毎回言語態度を慎むを以て、効果の迅速にして且つ十分なるを期する所以なるを曉るにあり。

*Watershand* が始めて治療に應用せる *Dauerhypnose* 持續催眠は患者をして數日乃至數週間催眠状態に止まらしむる方法にして、患者の持續的に安臥を爲し得る事情の下に於てのみ之を施すべきは當然の事なり、例へば自宅、若くは病院に於てマストクルの必要ある場合は此種の施術に最も適したる例なり。

患者は晝夜を分たず催眠状態の下にありて、飲食其他必要なる事項を果す際のみ全然覺醒し、其事終れば再び催眠する様暗示を與へ置かる。斯くして生活状態を時間によりて調整せしむるを得、而して術者は毎日病床を訪ひ、精神療法的好影響を與へ、看護婦若くは附添人を附し、食事其他の際には

其人に信賴すること宛然術者に對する如く其指揮を遵守し、一舉一動凡て其人の許可を得て後に爲すべしと暗示し、且つ肥胖療法の實施を命ずれば、身體的、精神的効果の實に驚嘆に値するものあらむ。伯林の神經醫ヒルシュラフはヒステリー、アルコホル中毒等を以て本療法の適應症なりと懲懣せり。

## 第九章 醒 覺

患者を覺醒せしむるには、目が覺めたと告ぐれば夫にて足れるが如しと雖も、かくすれば諸種の惡影響を、目を覺ませる後迄も存續せしむる虞れあり、催眠術の危險は此種の簡單なる暗示と無經驗とより胚胎すと云ひて可なり、乃ち覺醒せしむる際、必ず失念すべからざる緊要なる事項は左に記すが如し。

**注意第一** 言語暗示の端緒に於て與へたる疲勞の感覺、重き四肢等に關する暗示の完全なる除去は覺醒の暗示に先立たざるべからず、更に進ん

で、覺醒後の爽快なる氣分及び頭腦と神經との安靜に歸因する頭部の輕き感覺を附加するを可とす、若し術中に感動、感覺障礙、痙攣、硬直等を起したりと假定すれば、是れ亦拭除を要すること勿論なり、且つ施術の眼目とする所の重要なる暗示に至りては、其要領を覺醒前數語に摘んで繰返すを可とす。

**注意第二** 次に覺醒せしむるには徐々と覺醒の暗示を與ふべし、即ち、今日が覺めたと告げむよりは、一、二、三、で以て眼が覺めると云ふ方穩當なり、以上の二つの條項を具備する所の暗示は左の如し、

「さ、これから次第に目を覺させる——疲れが取れた——頭が軽い——手足も輕くなつた——爽快な氣持である——これから私がそろ、く、と一、二、三と數へる——三、で以て靜に目をあける——元氣がよく、さつぱりとした氣分で目が覺める——あとに催眠術の爲め故障は何も残らない——一——二——三、」

右の暗示は普通一般のものなるが故に、特殊なる治療の様式、内容によりて



は之を變更し増補するの必要あるべし例へば凝視法の時間長かりし場合には目に關する不快なる感覺、頭痛、眩暈等の起らざるやう暗示を與へ、比較的長き催眠状態の後に於ては、覺醒時に於て發作的に催眠することなく、從つて夜間の睡眠好良となるべしこの暗示を附加ふるが如し、何となれば余の一患者は施術後二三日に來りて、一寸横になると睡につく、そして力も何もなくなる」と語れるを以て、更に注意を加へて此種の障礙を緩和したることあり、殊に夏期に於ては細心なるべし。

醒覺後に於て注意すべき個條は、催眠中暗示を與へたる事柄に就きて彼是質問するを避くべき事にして、苦悶は去りしや、疼痛は如何催眠中の氣分はなごゝ好奇心に驅られて患者に問ひ訊すを嚴禁す、術者自らは餘儀なき場合に於てのみ之を問ひて、患者の誤解を釋くの便に供すべく、家人、附添人、朋友等に至りては、深く之を戒めて、此種の問を發せざるやう注意を與ふべし、何となれば被術者の注意を散漫ならしめ、治療の效果の薄弱を來す虞れあればなり。

術者若し催眠の強弱及び効果等を知らむと欲せば、施術直後に於て之をせずして次回の施術の初期に於てすべし。

## 第十章 實地的暗示療法

### 總論

催眠状態に二種あり、一は實驗的催眠状態にして他は治療的催眠状態なり。前者は筋強直、幻覺、恐怖、夢遊状態等を起さしめむが爲に、出來得る限り深き程度に施術すれども、治療上の目的に向つては深き催眠は價値なきのみならず、却つて有害なり、即ち神経系の健康を増進せむが爲めには如上の深催眠を避け、淺き催眠状態に就くを可とす、尤も深き催眠に於ても、効果ありし例少なからざれども、淺き催眠に比すれば其効果微弱にして一時的なり。次に注意すべきは暗示に與ふべき形式なりとす、一切の暗示を簡單なる命令的言語を以て行ひしは既に過去の事に屬す、現今に於ては赤裸々の暗示よりも、更に有効にして完全なる形式と内容とを之に與ふるに苦心せざる

べからず。

されば暗示を治療上に應用する際には左の諸點に注意するを要す。

(一) 單純なる言語暗示よりも、之に複雑難解ならざる理學的、若くは醫學的基礎を與ふるを可とす。例へば皮膚の異常感覺ありとせんか、單に「直ぐ取れる」と云はむよりは、輕き指壓、若くは觸擦ながら、指先の温度の作用の爲めに、いやな感じは直ぐ取れる」といふ方、効力遙に大なるものあるが如し。催眠術を施さずして加療せば、煩勞にして多數の時間を消費すべき障礙も、此種の暗示によりて急速治癒に赴くを實見すること敢て少しとせず、或はマッサージを施し、電氣を用ひ、體操を試みしむるも亦右の趣旨に合致す。

狹隘苦悶ある者には術中に於ても歩行の練習を試みしめ、術後も亦相當の練習を命ずるを可とす。術中に於ては醒覺時の如く叮嚀反復練習を重ねる如き手数を費さず、寧ろ簡單なるを適當とす。

如上の暗示活躍法は今後益々研究を積みて其印象を強大ならしむるに

力むべく、考案の餘地十分なりと思惟す。

(二) 暗示は詳叙するを可とする場合多し、換言すれば、同一暗示の反覆、若くは形式を異にせる同一暗示の反覆を可とす。乃ち數回施術の要あり、例へば不眠症に對して、單に「今後、夜間安眠することが出来る」と云はむよりは、「夜間就寤前、疲勞の感加はり、其爲めに苦悶の起る餘地もなければ、睡眠を妨げる様な思想の起つて来る邊もない、床に就くや否や、身體精神の安靜と休息が起り、無我夢中で眠ることが出来る、萬一、深更に目を覺すことがあつても、少しも目の冴えることもなければ、不安になつて彼方へ轉げる氣遣ひもない、直ぐ深い、甘い睡に就くことが出来る、翌朝目を覺した時は、十分に眠つたといふ感じと、精神爽快の感じとが全身に漲つて居るといふ方、遙に有効なるが如し。

(三) 施術者は命令を以て催眠中に於て、病苦を除去する旨を告ぐべからず。豫言的に命令的に効果の現はれ来るにあらすして、催眠療法によりて神經が鎮靜し、健康となるが爲に病苦の除かるるを暗示するは、最も、妥當に

して穩健、有効なる手段なり、例へば苦悶、感情變換ある患者に對する奏効顯著なる言語暗示はヒルシユによれば左の如きものなり。

「催眠療法によつて神経は次第に安靜になつて來た、體内の各種の緊張、興奮が解けて、ゆつたりとした氣持のよい安靜が起つて、精神の平衡が段々と恢復して來た、殊に催眠直後に著しく、丁度荷物でも卸した様だ、各種の苦悶や、感動は拭除される、日一日、一回一回、氣軽く、心地よく、家を出ると町の新鮮な空氣を胸一杯に吸ひ、日光と自然の色彩とを見て喜びを感じ、生々とした氣分になる。」

催眠術療法此様なよい利きめは、其度毎に強く明になり、益々長く續く、それで神経は愈々強くなるから、並大抵の心配や、苦勞に遭うても、びくともしないやうになる、云々。

要するに、施術の反覆と暗示の階段的漸進とを以て、諸種の症候を一つ一つ除去するの法を講せざるべからず、只一面の暗示によりて奇效を奏したる例なきにあらざれども、此の如きは甚だ稀有なる事に屬す、各病型の

個人的特徴に就き仔細に觀察し、之に適應する所の精神療法的方針を確定するを以て第一義とす。

次に催眠状態と關連して暗示を與ふる時期により後者を三種に分つ、

#### (1) 催眠前暗示

吾人は屢々催眠療法を行ふに先つて、患者は早く既に一定度迄、催眠せしが如き觀を呈する場合に遭遇することあり、余の一患者は始めて施術椅子に倚りたるばかりにて、既に半ば其目を閉ぢ、睡裡にあるが如き表出あり、余傍に近寄り數語を放ちたるに、直に、カタレブシーを起せるを見たり、即ち患者の精神は施術に向つて如何に都合よく準備せられ居るやを推測するに足るべし、此種の暗示の見はるるは、治療上有害なる自己暗示の起り來らざる證據と見做し得る場合多し。

#### (2) 催眠内暗示

催眠中に様々暗示を與へ、且つ催眠中に於て之を肯定せしむるものにして、實際上甚だ少數なる暗示のみ之に屬すべし、多くの輕症患者は此方法

にても奏效せむ、尤も暗示の終了に先つて、患者は術者の言を能く會得せしや否や、問を發して之を検するの要ある場合少なからざるべし、何となれば催眠時に於ける聽力注意は強く侵さるることありて、術者の低く濁らしたる音聲を聽取し、理解すること困難なることあるべければなり。

(3) 催眠後暗示

催眠療法中、最も普通にして且つ最も有意義のものにして、催眠中に於て暗示を與へ、其効果を催眠後迄も持續せしめ、若くは催眠後に於て始めて肯定せしめむとするにあり、之を要するに、總ての術者は催眠後暗示をして有效ならしめむが爲に努力するの使命を帶べりと斷言するも不可ならざるべし。

各論

一、疼痛

元來疼痛なるものは、其物だけ存在すること稀にして、往々患者の氣分に影

響を及ぼし、或は沈鬱せしめ、懊惱せしめ、不平と絶望とを齎らし、苦悶せしむ。されば患者を不安に導く所のもものは、單に疼痛そのものにあらずして、諸種の精神的作用の加はり來るが爲めなり、従つて催眠療法の版圖に屬する王國は決して狹隘なるものにあらざるを知るべし。

此種の患者の心理状態を察するに、疼痛の持續につきて憂慮し、若し此儘永續せば、業務を廢するの止むなきに至り、差づめ生計に困難を生じ、一家路頭に迷ふに至らむ、或は疼痛によりて己れは生命を失ふに至るべしなど、想像を逞うするもの、蓋し少なからざるべし。

又一方に於ては、疼痛そのものの性狀を知悉するの必要あり、例へば刺すが如き、裂くが如き疼痛は著しき不快感を伴はざることあれども、脈打つが如き、壓定するが如き疼痛は、毎により強き不快感を生ずるを例とす、加之患者の個性の影響する所少なからず、彼是打算して、疼痛が如何様の影響を患者の氣分に及ぼしつゝあるかを察すべし。

疼痛不堪症 *Intoleranz gegen Schmerzen* ある患者は實際よりも強く疼痛を感じ、

故意ならざる誇張爲にする所なき針小棒大に陥るは自然の勢なり、之を伴症と認むるを得ざること勿論なり、殊にヒステリー患者に於ては顯著なり、故を以て、疼痛に對する患者の精神的關係を審査するは暗示の奏效を迅速ならしむる一法なり。

其他、患者の疼痛に對する處置法の誤謬より却つて理學的に之を刺戟し、増悪せしむることあり、例へば局部の觸擦、壓迫、不安なる運動による不隨意的の筋緊張等に因する疼痛の増進の如し。

此の如く疼痛の心理的、生理的、分析的の智識を應用して患者の訴への眞價を判斷し、之を催眠的療法に資せしむるを主眼とす、即ち疼痛に纏綿する精神作用を除去するは勿論、一方に於ては相當なる理學的、食餌的、電氣的及び藥劑的療法を行ふを可とす。

疼痛の中機能的のものは一般に豫後良なり、頑固なる頭痛も、器質的ならざる限り、左の如き言語暗示により除去するを得べし。

「今頭に乘せて居る手の温度で以て頭痛は數分間に快くなる、頭は段々輕

くなつて來る、いやな感じも漸々去る、催眠術が濟むと、從來存在して居つた疼痛の痕跡が少し許残つて居る、けれど表へ出て新鮮な空氣に觸れると、其痕跡さへも消えて亡くなる、頭はさつぱりとして、生れ變つた様にはつきりして來る、斯様な變化は催眠療法の一回毎に著しく、長く持續する様になり、短い間に病氣は全快する。」

畢竟するに、各種の疼痛に就き、其物理的成分と、精神的成分とを分離し、先づ精神的成分を全治、輕快せしめ續いて其影響を物理的成分に及ぼすことを考案すべし。

極端なる例を引けば興奮大なる時は、瞬間的に疼痛を覺えざることあり、例へば戰場に於ける負傷は、往々戰友の注意によりて之を覺り、續いて疼痛を發すといふ、即ち注意一方に集中せられたる際に於て、痛覺の減弱乃至鈍麻を生じ、創傷―疼痛の聯想によりて常態に復す、此種の關係を了知するも亦理想的暗示に到達するの一法ならむ。

## 二、神經性不眠症

本病は或は神經衰弱により、或はヒステリーによりて發す、之が治療を爲すに先つて、普通の睡眠の豫備條件を知悉せざるべからず、即ち、

(1) 其人の作業能力に相應したる十分なる作業の量、

(2) 就眠前及び就眠の際に於ける都合よき條件、

は其最も重要なものなり、例へば夕食の量過多なる時、就眠前の喫茶多量、作業の方法宜しきを得ざる時、精神感動ある時、通常睡眠は缺乏す。

其他患者の睡眠觀念に對する妥當ならざる關係をも察知すべし、換言すれば晝間に於て患者が夜間の睡眠を思ふ時、不快と苦悶を感じ、就眠不能の期待性感動を生ずる點に想到せざるべからず。

次に不眠患者の狀況を察するに、絶えず右に、左に、褥上を轉がり廻り、一時間毎に時計の鳴る音を聞き、遂に早朝に至りて僅に、うと／＼とする位にして、夫にも拘らず日中は就眠すること困難なり、起き出でて頭重と不快と倦怠とを覺ゆ。

此種の不眠症に罹れる患者は、深更目冴え、筋肉の神經性緊張あり、自ら歎息して、到底眠れざるの自己暗示の所有者となるを例とす、故を以て患者に對する暗示は、健康者との對照より作製の端緒を開くべし、即ち、

(1) 健康者は就寤の際、確實なる睡眠の期待あり、即ち眠れるといふ自信を抱いて床に入るに反し、患者は此種の期待を有せざるのみならず、却つて上記の如く *Nichtschlafen können* 眠れざるの期待を有す。

而して恐れを抱いて就寤し、今夜も亦眠れぬのかと歎息し、焦慮し、斯くして有害なる自己暗示を完成するに至る。

されば患者に與ふる暗示は左の如くなるべし。

「これから先、白晝精神が安靜になり、夜間の睡眠のことを少しも氣に掛けぬやうになる、却つて夜になればよいと待兼ねる位で、屹度睡れる、といふ自信が出来て来る、それといふのは夕食後、次第に氣持のよい疲勞を身内感じ、其勞れが段々高まつて、何時も床に這入る時分になると、もう眠くて／＼溜らない様になる、床に這入ると、身體がぐつたりとして、張りも凝もなく、目が塞つたまま靜に動かす休む、呼吸は靜穩に徐々と規則正しく、考

へも亦落付いて、不快な思想は丸つきり消えて亡くなる、そして穩かな呼吸に氣を止めると、次第に氣が遠くなつて、疲れの極點に達するから、夢のない深い睡眠が起つて來る、床に這入つてから眠りつく迄、ほんの僅かの時間である、萬一夜中に目を覺すことがあつても、目が冴えない、直ぐ目も閉ぢ、心も安まつて、左右に轉がるやうなことがなく、忽ちにして熟睡する、翌朝目を覺すと頭が軽く、氣分は晴々として元氣がよい、それといふのは、昨夜安眠した爲めに、積日の疲れが取れて、神經が健康になつたからであつて、これから毎晩同じ様に安眠することが出来る、それで仕事をしても直ぐ疲れぬやうな事はない、云々

次にヒステリー患者の不眠症は、上記の障礙よりも甚だしく複雑なる事情の下にあり、即ち、

(1) 眞に不眠症を有する場合に於ても、患者の訴ふるが如き高度の不眠症ありしや否やに注意せざるべからず、何となれば此種の患者は往々相當に熟眠せる後に於ても判断を誤ることあり、誇張することあり、又伴作の傾

向あるを以てなり。

(2) ヒステリーの發作後に於て、患者は往々之を誤りて睡眠と判断し、恐しく寢苦しく、且つ惡夢の爲に身を悶きたるらしく、皮膚は皸だらけとなり、手足は著しく貧血せりと陳述すること多し。

果して不眠症ありとすれば、既記の暗示を試むるも可なり、若し患者が發作を睡眠と誤りたる場合に於ても、術者は之を患者の思惟するが如く睡眠として取扱ひ、左の如き暗示を與ふれば奇效を奏すること少なからず、是れ著者の考案せる暗示にして、施術の際に於ては患者を蒲團の上に横ふるを必要條件とす。

「今後睡つた時は、手も足も硬ばるやうな事がなく、身體中がゆつたりとして凝りもなく、のんびりと休む、それで血のめぐりがよく、手足の貧血などは起つて來ることがなくなる、寢苦しいこともない、恐しい夢もなくなる、恐しい夢を見るのはゆつたりとして、眠らなかつた爲めであるから、今後は節々がゆるんだ様に、軟に休めるやうになるので、夢を見ることはない、

誠に氣持よくゆつたりと眠る、いやな考へは爪の垢程も出て來ない、夢のない深い安眠が出来る、丁度今、手も足も硬ばらずに寝てるやうに休める、丁度今、身體を靜に横へて居るやうに安樂に、眠れる、今夢のないやうに、貧血のないやうに、其通り呼吸も樂に心地よく眠れる、晝間、眠ることがあつても矢張同じ様である、少しも變りはない。

此種の暗示を熱心に反覆し、毎回出來得べくんば、三十分乃至一、二時間に亘るを可とす。

### 三、神經性嫌食症及消化不良

ヒステリー患者は一定の食品に對する嫌忌症を有す、例へば、牛乳、肉類等の如し、患者は單なる肉類の觀念のみにて嘔氣、嘔吐を發す、之に關するヒルシユの暗示的説明法の大意は左の如し。

元來吾人が食物の味と稱するものは二つの個條より成る、一は理學的のものにして、他は心理的のものなり、理學的の味覺なるものは、根本的には主として該食品が吾人の身體に對して有する所の必要と裨益とに關係するも

のなるが、他の一つの心理的個條即ち吾人の習慣と、任意なる判斷との影響を受けて、其根本的味覺は全く正反對なる意識現象を呈する程度迄變化せり、従つて牛乳の如きは、元來必要な食品なるが、任意なる判斷の結果、或は之を嫌ひ、或は之を好むに至れり、されば不快なる觀念を、任意に心地よき觀念と置き換ゆる時は、從來牛乳を飲用せし際に起れる種々なる障礙は一掃せらるゝを得べし。

此種の暗示は活動性なるを以て極めて有效なるべし。

其他ヒステリー性の患者に於ては、全般的嫌食症を見ることあり、此種の障礙ある場合には、毎回口腔、咽頭、胃等の診察を嚴密にし、凡ての有害なる個條を除去する方法を講ずると共に、一方に於ては、患者の精神的狀態を精査し、之に好良なる影響を與ふべき暗示の様式、内容を案出するを要す。

豫後は概して好良なり。

概して精神的興奮に起因する食思不振、消化不良等に對しては、鎮靜的暗示を與ふるを第一義とし、懊惱、驚怖、苦悶、悲哀、忿怒等を輕減するに努力すべし。



著者の有する興味ある一例は、二十六歳の未婚婦人にして、十四五歳の頃、二三の強迫觀念ありしが、現に牛、鶏、豚を食する能はざるを以て催眠療法を余に乞へり。患者は十八九歳の頃、裁縫仲間より丑歳生れの者は牛肉を食すれば罰が當ると聞き、爾來之を用ひざるに至れり。鶏に關しては、嘗て盲腸炎を患へし時、醫師より鶏の皮は盲腸部に停滯する虞ありと云はれたる爲め、之を食すること能はざるに至り、豚は其生活状態の不潔なるを見知れるを以て之を口にすることを欲せず、強ひて之を嚙下すれば嘔氣、腹痛を起すを例とす。此の如く嫌食の理由著明なるを以て、予は之に相當する暗示を考案し、數回施術したるに、全部の嫌忌症治して自由に肉食を爲し、家人を驚かすに至れり。

#### 四、氣分變換

凡て感情生活の狀況は、患者の神經症狀に對して重要なる意義を有するは敢て贅言を要せず。

神經衰弱者の氣分變換に就いては其眼界を廣うし、身體、精神共に、現病の治

癒せる後に於ては活動に堪ゆべきを保障し、決して固有なる精神病を起すことなきを告ぐるを以て最良なる暗示の一とす。斯くして希望を前途に抱き、急かす、焦らす、休息すべき時は十分に休息し、病める時には全治する迄醫療を受け、徐に活動の時期の來るを待つべし云々と諭す時は、當然深部感動の興起あるを以て、氣分變換は間接に好影響を受くべし。

若し厭生、悲觀の傾向あらば、其眞因を確め、直接に原因的暗示療法を施すを可とす。

ヒステリー患者の氣分變換は、夢遊的催眠程度に於て治療を加ふる時は、迅速に效を奏し、簡單なる暗示の下に患者の憂鬱は四散して、爽快と樂觀とを以て置き換へらるゝを見るべし。

#### 五、知覺障礙

既記の如く、吾人は實驗的催眠術に於て、無感覺、感覺過敏若くは無痛覺等を起さしむるを得るのみならず、外科的手術を行ひたる實例をも擧げたり。手術に適するは、深き夢遊的催眠度にして、癰疽の手術、拔牙等、比較的容易なり、

止血は麻醉剤を用ひたる場合よりも迅速なり、尤も手術に先つて、數回催眠術を施し、不安、驚怖の期待を除去し、更に進んで、手術に必要な範圍の組織の無感覺と無痛覺とを暗示し、手術の直前に尙一回之を反覆するの手順を踏まざるべからず。

知覺鈍麻を訴へ來る者あらば、施術は比較的容易なり、例へばメスマルの觸擦法と共に、左の如き暗示を與ふ。

「今手を觸れて居る場所に血の循環が良くなつて來て、段々暖みを感じるやうになる、すると是迄感じのなかつたのが元通りになつて、何でも觸るものが分る様になる。」

無痛覺に對する暗示も略同様にて可なり。

ヒステリー患者の訴へに對しては、局部に於ける注意の集中を放散せしむるを便とす。

**神經性皮膚癢痒症** *Pruritus cutaneus nervosus* に對して、洗滌、入浴、其他の處置の奏效疑はしきを以て、メスマル氏法による暗示療法を施す時は、數回にして

障礙の除去せらるゝを見む、尤も萎縮腎、胃腸カタル等、を顧慮する要あり。

### 六 痙攣及麻痺

全身の痙攣ある場合には、ヒステリー性のものに對して特に著效あり、之に對する暗示の與へ方は、單に痙攣の起らざるを豫告するを以て足れり、とせず、一方に於ては、患者を催眠状態の下に置き、痙攣を誘發せしむる所の精神的個條を探索し、之に對する暗示を與ふるを以て有效とす、敢てヒステリーの病原と云はず、患者に最も大なる苦痛を與ふる所の記憶、若くは思想は、催眠術を施さざる平常の覺醒時に於ては容易に患者の念頭に浮び來らず、之を問ふも明瞭に答ふる能はざる場合多きに反し、催眠状態の下に於ては、感動の病的興作を沈靜せしめ、心靜にあらゆる懊惱の對象を想起し、之を陳述せしむること容易なり、かくして得たる心的原因若くは主なる誘因に對し、周到にして徹底的なる暗示を與ふるは合理的療法中の主なるものなり。暗示感性の亢進は往々ヒステリーに於て發現する所の徵候なるを以て、痙攣に對する療法の豫後、概して好良なり。

神経性胃痙に對しては、比較的簡單なる暗示を以て効果を收むることを得べし、尤も胃と共に心窩部に於ける皮膚、筋肉等の感覺過敏の有無を顧慮するを忘却すべからず。

局所的攣縮にして神経性の原因に基くものならむには其治癒困難ならず、癲癇性の痙攣に對しては暗示療法は著効なきを常とす。

ヒステリー性麻痺は催眠療法の好個の課題にして、催眠度は必ずしも深きを要せず、場合によりては覺醒時暗示と共に、一杯の蒸餾水を服用せしめたるのみにて起立、歩行可能となること稀ならず。

### 七、便秘

便秘に對するフーレルの暗示は左の如し。

衣服の上より手を腹部に觸れつつ、腸の働きは神経作用の爲めに強く盛になる、腸の運動が弱い爲めの便秘であるから、其運動が強くなると、毎朝定つた時間に(朝起きて間もなく)薬を使はないでも獨りでに便意を催して來ると暗示して、朝起後、一杯の冷水を五分毎に三回に飲用せしめ、其後五分間を

經過すれば便通ありと告ぐべし。

次にヒルシュは左の如き暗示を與ふるを可とせり。

「明朝丁度七時になると目が覺める、併し數分間寢床を離れずに居ること、其間に下腹部の方へ注意が向く、次第に腸に不安な感じがあつて、これから便意を催して來る前兆が現はれる。腸の不安は秒一秒と高まつて來て、今度は紛れもない腸の運動となる。下腹にはぐる／＼といふ音がして、少し痛みを覺える。之間もなく、抑へ切れない便意を催して便所へ行く、直ぐ通利があつて、當り前の多量の便を出す、此と同様な作用が毎朝／＼繰返される様になる。便秘は種々複雑なる原因より胚胎するを以て、場合によりては藥劑的、食餌的療法と平行せざれば奏効せざることあるべし、單に藥劑にのみ依頼すれば習慣性を起し、多量に服藥せしめざれば通利せざるに至ることあり、若くは時々藥劑を變更するの要あり、従つて胃障礙等を發すること稀ならざるを以て、催眠療法は特に常習性便秘に於て其影響の好良なるものあるを見る。

### 八、月經障礙

激しき感動は月經障礙を惹起すことあり、一方に於て婦人科的診察を施すと共に、此種の精神的影響の加はり居る場合に於ては之に對する暗示を必要とす、されど特に注意せざるべからざるは、月經不調の場合に於て、不謹慎に月經潮來の暗示を與ふる時は、妊娠中の母と胎兒とを害ふ虞れあることなり、即ち月經の暗示は流産を惹起さしむるを以てなり、或は子宮なきが爲の月經不調に遭遇することあり、されば専門的診察を第一とし、催眠療法は其結果を基礎として始めて成立すべきものなり。

月經不調に向つては原因療法と共に補助療法として暗示を與ふ、催眠度は輕微にて可なり、術式は衣服の上より腹部を上より下へ觸擦し、若くは温熱を作用せしめつつ今夜より月經潮來し、尋常に經過すべきを暗示す。

月經痛、月經前數日、腹部にメスマルの輕き觸擦を施し、今後月經時には疼痛伴はざるべきを暗示す、或は疼痛を漸々輕減せしむるも可なり。

月經過多、兩手を腹部に置き、月經不調の際とは正反對に、下方より上方へ

メスマルの法を施しつつ血液は心臓の方へ押戻されたるを以て、今夜より月經止むべしと暗示すれば催眠中より既に奏效するもあり、概して毎回三十分以上宛反覆して施術するを可とす。

### 九、強迫觀念及強迫的恐怖

強迫觀念の内容は種々なれども、最も多く遭遇する所のものは書信を認め、戸締りを爲し、燈火を消す際に伴ふ所の疑惑症にして、果して間違ひなく正しく記したるや、戸の錠は卸したるや、燈火の燃え残りはなきや等の頗めて痛苦なる觀念發起し來り、抑へむとして抑ふることは能はず、再三再四之を檢査すべく強制せらるゝものにして、之に對抗する暗示は、該觀念の知的成分と情的成分とを分離せしむるを以て主眼とす、強迫觀念の發起する際、毎常患者の經驗する所の懊惱、苦悶、疑惑等の情的成分は本病の根柢を爲す所のものにして、知的成分は寧ろ從屬的、浮動的のものにして、往々不合理的内容を有す、患者は屢々自家撞着に陥れる自覺を抱いて醫家を訪ふ、例へば自己の生存、世界の存在を疑ふが如し、これ畢竟、情的成分の病的なるに歸因する

を以て、暗示の構成は治療の見込と、疑惑症の消失とを以て骨子となすべく、患者は世界に稀れなる奇病に罹り居れるが如く思惟する場合あるを以て、其然らざる理由を語り、一定度迄は此種の傾向健康者にも存在するものなるを告げ、憂慮を除くと共に、患者の知力に應じて治療の方針を指説するも可なり。

著者の治療したる諸例に於ては豫後概して好良なり。

### 強迫的恐怖

汚染恐怖、赤面恐怖、廣濶恐怖、狹隘恐怖等、多種多様にして枚舉に遑あらず、凡て此種の恐怖を取扱ふ際には、障礙の最初の根源に遡るを要す、換言すれば發病の機會、原因等を精査し、而る後、之に適應する暗示を與ふるを原則とす。施術を反覆する間に患者は次第に抵抗力を増し、遂に治療に至るを例とす。

(著者の新撰精神病學第七版、四五二頁參照)

如上の強迫觀念及び強迫的恐怖は、固有なる強迫病に於て最も顯著なるが、其他ヒステリーにも現はれ、早發性痴呆にも來ることあり、早發性痴呆の如

き素地を閉却して單に強迫觀念の療法に着手するは、無意味の事なるを以て、豫め基礎となれる疾患を察するを必要とす。

次に附加すべきは單に症候に對する療法を施すを以て満足せず、吾人は同時に一般的暗示をも與ふるの餘裕をも有せざるべからず、一般的暗示とは、全身の神経系が催眠療法によりて安靜に、健康に、強壯に、抵抗強くなり、食慾振ひ、體重加はり、業務の興味増し、義務の觀念盛に、生の喜びを感ずると共に、氣軽く、愉快に、腦力全般に旺盛となり、了解、注意、記憶、自信、判斷等、凡て一層明敏の度を加へ、不快なる刺戟に對して精神の弾力性を徴すべく、從來重荷の如く心を壓伏し、矢箭の如く心を傷けたる印象は、凡て深く心を穿くことなく、横に外れて胸中の平和を紊すことなし、柳に風と受流すに至り、前途を樂み、悠々として向上の道を辿るとやうの内容を有するものにして、是れ決して強迫觀念の施術にのみ限れるにあらず、如何なる場合にも應用すべき性質のものなり。

斯くして患者の氣分一變し、宛然別人となれるが如き觀を呈すること多し。

十、慢性アルコール中毒

患者自身が悪習を離れむとする希望を有する場合には事は容易なり、催眠度は深きを可とし、先づ患者に取りて必要なるは酒にあらずして新鮮なる空氣なり、清涼飲料なり、茶なり、コーヒーなりと暗示し、次回乃至第三回頃に一杯の酒を與へ、其味ひ芳醇なりと告ぐれば患者は然りと答へむ、續いて暗示して曰く、そろ／＼と此コップを呑み乾して了ひなさい、非常に苦い味がしませう、後口が患者の然りと答ふるを聞きて、今コップは空です、後口は非常に苦い、そして嘔氣を催して來る、むか／＼して吐きさうになるのを、やつと我慢して抑へつける、表へ出て新鮮な空氣に觸れると、いやな苦い味が消えて嘔氣がなくなる、今後酒といはず、ビールといはず、葡萄酒、ウキスキ、凡てアルコール分を含んでる飲料を口にすると、一種嫌な苦い味がして來て吐きさうになる、其時新鮮な空氣に觸れると癒ると反覆して施術す、更に回を改めて、苦い味は益々強くなる、最早溜り切れない程吐き氣が強くなる、呑めば屹度吐くと繰返し、其後、アルコールは毒である云々と暗示し、要

領を簡單に説明し、最早酒は嗜好せぬ様になつたと強く反覆して印象を與ふ、之を *Verwekungs-methode* 嫌忌療法と名く、

以上は本病に對する催眠療法の術式の一例なり、

特殊なる場合として、覺醒時暗示と共に催吐劑を與へ（其作用を告げずして）卓效を奏したる例は著者の新撰精神病学第七版三八四—三八九頁に略記せり、

十一、慢性モルフィン中毒

*Wetherstrand* は暗示療法によりて四十二例のモルフィン中毒の中三十二例を完全に治癒せしめ、ベルンハイムは輕症患者に暗示的減量法を行ひ、*Agitation* は禁斷現象に對する催眠療法の好影響を説き、*Gewings* も亦治癒せしめたる實例を報告せり、著者の試みたる療法は概して好果を擧げ得たり、要するに本療法はモルフィン若くはコカイン減量法を行ふに際しては必須缺くべからざる手段の一とす、暗示の方法は左の如し、

最初一、二回は適當なる催眠度に達せざることあるを以て、暗示の與へ方は「今直ぐモルヒネの減量はせぬ、先づ以て全身状態、殊に神経系の強壯になるやうに力を注ぐ、私のいふことに注意を集中して貰ひたい、段々よく眠れる様になる、深く静に呼吸をする、一で以て空気を吸ひ込んで、二で以て空気を吐き出す」と告ぐるか、若くはリーボールの言語法(既記)を其儘應用するを便とすることあるべし、斯くして漸次催眠度を深くし、數回施術の後、徐々減量し、何等の悪影響起らざるべきを保障し、或は施術中に生理的食鹽水をモルフィンとして注射を試み、臨機應變の策を講じ、遂に全部除去に至らしむ。持続溶催眠鎮靜劑等の併用を必要とする場合多し。慢性コカイン中毒も亦之に準ず。

### 十二、慢性ニコチン中毒

暗示療法によらずして、自己の意志のみにて喫烟の習慣を離れ得たる人少なからず、されば暗示療法は自己の意志のみにては禁烟不可能なる場合に於て始めて有意味となるべし、簡單なる施術により治癒速に至るもあり、稍

困難なる例に遭遇せば、上記嫌忌療法を應用し、喫烟の際に不快なる臭味ありて宛然、蠅若くは鳥の羽毛を焼くが如し、且つ其際、頸部に灼くが如く、搔くが如く、蟲の這ふが如く、浸み込むが如き感覺を生じ、嘔氣を催す等の暗示を與ふれば奏效確實なり。

又一面に於てはニコチンの健康に有害なる理由を簡單に説明するを失念すべからず、覺醒時暗示亦効あり。

### 十三、手淫

聖書に記されたるユダの子オナンが之に耽りたるよりオナニーの名あり、オナニーは健康者の間に於ても、病的兒童の間に於ても、可なり廣く行はれ、幾多有害なる結果を生ずるものとす、健康者此弊に陥れりとすれば、通常結婚後常軌に復するを例とす、稀には高年に達する迄之を廢せざるもあり、最も危険なるは兒童の手淫なり、毎回其原因を精査し、周圍の惡感化に基くものか、搔痒性皮膚病衣服の觸擦による刺戟精神状態等につき遺漏なく調査し、此等の障礙若し存在せば之を除くに努むると共に、暗示の強影響の下に

置かざるべからず。

暗示の要領は、睡眠の安靜と若し夢中に局所に手の觸るることありとも、色情的感覺を惹起せざることを以て主眼とすべし、或は手指若し局所に觸るれば熱灼疼痛を覺え、離るる時は此感覺起らざるを指示するも亦一法なり。オナニーに起因する所の精神沈鬱及び自己非難はオナニーの弊去ると共に消散して、榮養佳良、氣分爽快となるを例とす。

施術は四週乃至六週を要すること多し。

又一便法として遊廓に赴かしめ、若くは普通の交接を爲さしむるを可とする人ありと雖も、是れ何等の効果なきのみならず、却つて有害なり、當面の問題はオナニーの制止にあり、除去に容易に效果現はれざる場合に於ても、他迄施術を反覆して體力の増進を圖らざるべからず。

#### 十四 色情倒錯

*Fetichismus, Masochismus, Sadismus, Mädehenstecher, Homosexualität* 等之に屬す(新撰精神病学第七版四五六一四五七頁)

此種の症狀は生來性病的状态に屬するものにして、暗示療法の効果なきが如しと雖も、痴愚白癡等と異り、知力は概して健康者の程度なるを以て、開拓の餘地少なからず、且つ這般の病的色情を誘發したる周囲の影響、變態色情を挑發する書籍、病的想像、強迫觀念及び誘惑等の諸條件を考查し、先天性の部分に、後天的に従屬したる成分、例へば聯想的、傳說的の分子に對する療法を講究し、其結果により更に先天的方面に對する好影響の波及を考案せざるべからず。

即ち術者は二種の見地の上に立てり、其一は性慾的過敏症にして、其二は色情の病的方向なり、色情過敏なるが故に、常に患者は性慾の對象につきて考慮す、而して社會的、法律的制裁あるに拘らず、其病的衝動を満足せしめむとす、されば治療の方針として、先づ以て色情の過敏を制限するの策を講せざるべからず、而る後脱線せる色情を常軌に復せしむるの暗示を與ふ。

以上の施術に際して注意すべき要項は二あり、其一は徹毒にして、其二はアルコホル中毒なり、此二者其いづれを有する場合に於ても、患者は克己、自制



の力を失ふものとす。されば此種の有害的個條を除き、色情を漸次冷靜に導き、且つ患者自身の絶望を除かむが爲めに、其不治の病にあらざるを告げ、既に存する所の有害なる聯想を分離せしめ、未だ聯合せられざる觀念を結合せしめ、新しき希望を植ゑ、其眼界を濶うし、意志を強うし、兼ねて社會的信用の背景をも暗示するを要す。

乃ち暗示の内容は左の如くなるべし。

- 一、正常なる異性の愛の本體を説き、色情倒錯の病的にして不自然なる旨を數回に亘りて暗示す。
- 二、異性に對する愛情の發現と共に、之を抑制する意志の力の増進を説く。
- 三、異性に對する色情の頻回ならざる満足は、健康と幸福との基礎なる旨を暗示す。

#### 十五、神經性心臟疾患

最も頻回に遭遇する所のものは、神經性速脈にして、所謂心悸亢進なるもの、是れなり、其他不整脈も亦之に屬す、時に脈波停止を來すことあり、神經衰弱

及びヒステリーに於て往々見る所なり。

患者は生命の危殆に瀕せるが如き驚愕と恐怖とに襲はるゝを以て、催眠的療法の必要を認む、又他の一面に於ては、ヘルシラフの云へるが如く、他覺的に證明し得べき心臟の疾患を有する者にして、何等の訴へをもなさざるあり、只努力興奮階段の昇降の際に於てのみ、心悸亢進を自覺するのみ、而して患者始めて醫診を受け、不注意なる醫師の言を聞きて、其重大なる意義を曉り、身心共に影響を蒙り、殆んど間斷なき心悸亢進之に基きて起り、夜間は殊に甚しく就眠すること能はず、恐怖と期待とにより、症狀益々増悪し、患者は自ら脈を觸れ、瞬間的結代と共に眩暈若くは窒息發作を惹起すに至る。

斯様の際患者の注意を心臟以外に轉せしむるは、用意周到なる醫家の任務なり、其一時的にして、神經性なる旨を論し、不安を除去するを必要とす、長日月に亘りて強心劑を用ひ何等の效果なかりし患者の、暗示療法により宿痾一掃せらるゝこと敢て稀なりとせず。

術式はメスマル氏法と言語暗示とに據るべし。

十六、機能性言語障礙(吃語、失音)

若し吃訥言語にして、器械的障礙若くは卒中性舌麻痺に起因するにあらずんば精神的原因より源を發す。斯様の場合に於ては發語能力は單に舌及び其他の器械的運動に連結せらるゝものにあらずして、主として吾人の精神状態に關係す。吃音家は其信頼する所の友人、親戚等の間に於ては比較的流暢に對談することを得るは周知の事なり、されば吃音矯正の方法として單に發音の練習に力を用ひしむるは、患者の苦惱と煩勞とを増さしむるのみにて、さしたる效果なきを常とす。故に此種の練習をなすに先つて暗示療法を施すを順序とす。換言すれば吃音は自己暗示の一種にして *Nichtsprechenkönnen* の觀念に捉はれ、或は *イ、チ* 等にて吃り、或は *シ、タ、フ、ラ* 等にて訥り、又は一定の言語若くは話法にて澁滯す、同輩の間にてはさまでならざれども、目上の人と對話する時は吃るもあり、要するに此種の吃語は麻痺性痴呆に於けるが如く痙攣性のものであらず、又單純なる習慣にもあらず、一種の強迫觀念なるを以て之に對する策は只催眠的療法あるのみ。

患者を催眠状態に置き、術者は一文を読みつゝ、之を後誦せしめ、最も多く吃る語句、綴字等に目印をつけ、一回施術の間に數度練習せしむ、之に先つて深呼吸を爲さしめ、精神の安靜を得せしむるを可とす。而して可なり長き期間に互りて上記の自己暗示の除去と、*Sprechenkönnen* の觀念の注入と練習とを反覆するを要す。

ヒステリー性失音症に對しては左の如き方針にて暗示を施すを要す。淺き催眠度に於て可なり、若し深催眠度に達せば、一、二回にして失音症は去らむ。先づ催眠中に於て喉頭部にメスメル氏法を施し、暗示を與ふ、聲の出ないのは癒つた、これから、高い聲で、「*いー、ろー*」と云つて御覽、患者は高聲にて、「*いーろー*」と發音するを例とす、今聞えた通り、聲の出ないのは治つた、立派な奇麗な聲です、今度は貴方の姓名をはつきりいつて御覽なさい、患者は再び需に應じて發聲す、此に於て、目を覺した後も矢張り同様に、はつきりと奇麗に音聲が出て來ると暗示す。

場合によりては暗示と共に咽喉頭に塗布劑を施し、或は電流を通ずるも可なり。

り。  
豫後好良にして殆んど再發を見ず。

### 十七、諸種の神経症

期待性神経症に對しては其煩惱なる期待を除き、病症の本態を説き、自信を與ふるに努むべし。上記の神経性吃語も亦之に入るべきものなれども、便宜上分離したり、時々遭遇するものは精神的陰萎にして是れ亦暗示療法によりて除去するを得べし。

感傳性神経症に對しては、一方に於て病者と分離するを必要とするのみならず、他の一面に於ては之に催眠的療法を施すを可とす。傳染せる疾病の褪色迅速なるを例とす。

恐怖性神経症に向つては其起點となれる恐怖を輕減、除去するを主眼とし、外傷性神経症に關しては其ヒポコンドリー性に陥れる分子を除き、煩惱を輕減するに努むべし。(新撰精神病學第七版三二五頁、心因性疾患參照)

### 十八、小兒に對する暗示療法

性格の缺陷、例へば虚言症、盜癖、不注意、美食症、怠慢、臆病、齧爪等に對する本療法の效果顯著なるものあり。催眠狀態に於て小兒の有害なる觀念は變形せられ、聯想は分離せられ、惡癖は除去せられ、性格一變の觀を呈すること稀ならず、往々覺醒時暗示にて奏效す。予は時に左の如き暗示法を應用す、即ち兒童に催眠術療法を行ふべきを告げ、之を臥位に置き、其他の言語暗示を用ひず、又凝視、メスメル氏法等を施さず、單に兒童の右の手首を執り、之を上下に動かす。次に左の手首を執り、同じ様に動かし、次に右の膝關節を殆んど直角に曲げて之を伸ばし、左脚も亦同様にする時は、兒童の暗示感性を著しく高め得るを認めたり、右了りて後閉目を命じ、欲する所の暗示を與ふ。

夜尿症に對しては良效あること多し、毎回其原因の分析的講究を必要とす。例へば尿道粘膜の知覺過敏若くは減弱、膀胱括約筋の衰弱、膀胱粘膜の知覺過敏若くは減弱、利尿筋の痙攣若くは衰弱及び寄生蟲、オナニー等に因する。泌尿生殖器の刺戟、其他暗夜の恐怖、夢及、就寢前多量の飲料の攝取等是なり。されば身心の検査を爲し、其原因の一を尋ね得たらむには、之に對する暗示

を施すべし。即ち、

「小便が出さうになつたならば屹度夜中に目が醒める、そして直ぐ起き上つて便器に小便をする、其晩から先病氣が治つて了ふ。」

と暗示す。

Trömer は最近十年間に於て治療せる百三十三例の夜尿症中、四三%は男兒五七%は女兒、年齢二歳乃至十五歳を報告せり、其中三分の一は著しき遺傳なし、四〇%は夜間の睡眠甚だ深く、一二%は淺くして不安なる興奮性の睡眠者なりき、此等の夜尿症に對する最も秀越なる療法は催眠的暗示なり、何となれば暗示によりて睡眠状態を或は制止し或は助長せしむること自在なればなり、熟練したる術者にござりては暗示は容易にして何等の危険なし、報告者は催眠術によりて上記の病例中三分の一を治癒せしめ、他の三分の一は輕快し、残りの三分の一は一部分効果なく、他は觀察中なりと。

Klatz は夜尿症の原因の大多數は心因性のものなるが故に、電氣療法を施すにもせよ、其他の療法を講ずるにもせよ、暗示の力を藉るを得策とす。

*Delius* は催眠的療法を行へる三十二例の夜尿症中、七二%治癒し、二二%は輕快し、四例は不良の結果に了りしを報告せり、暗示の内容は、小兒に尿意頻數を感せしめ、直に覺醒して、排尿する迄膀胱に尿を保存せしむるにあり、且つ幾度か罰せられて兒童は苦悶性となれるを例とするを以て、今後は殆んど刑罰なかるべきを説きて之を鎮靜せしむれば、兒童は適當の時刻に覺醒するに至るべし、其他從來の不快なる經驗を忘却せしむるが如き暗示も亦適切なり。

#### 十九 顔面痙攣及び痙攣性顔面神経痛

一方に於て著しき效果ありと説く者あれば、他の一方に於ては顔面神経及び副神経の痙攣に對して殆んど記載するに足る程の效果なしといふものあり、兎も角ヒステリー性痙攣に對しては良效あるものゝ如し。

暗示は一定の筋群の弛緩及び神経の安靜を基礎とす、若し可能ならむには既記の持續催眠 *Dauerhypnose* の下に治療すべし。

神経痛に對する處置に就いては疼痛の條項を参照すべし。

## 二十、齒科と暗示

獨逸に於て始めて催眠術を齒科に應用したるはバード、ゾーデンの齒科醫  
ファルク、シュツプなり。其報告中に左の如き記事あり。

……先づ予の試験せむとしたるは、齒科治療中の外科的一面に對する催  
眠術の應用にして、予の問題は、催眠術は抜齒に對して有効なりや、且つ患者  
を醒さしむることなくして之を行ふを得るや否や、といふにあり、有害なる  
後作用の有無も亦問題の一部を成し居たりき。

最初の試みは十四歳の丁稚に行はれたり、其上顎の左の小なる門齒の上に  
一の齒癭管あり、多量の膿を排す、渠は二年前白齒を抜取られたることあり  
て抜齒に對する抑制し難き苦悶を有す、されば言語暗示法による三回の試  
みは皆失敗に了れり、次に夜遅く來るべきを命じ、心竅に自然的睡眠が催眠  
的施術を補助すべきを待設けたり、同時に予は癭管中に注射を爲し、渠に語  
りて曰く、數回注射を繰返さば抜齒の必要なからむと。

夜間言語暗示は達せられたり、抜齒に着手するに先つて予は確實にカタレ

プシーの起れるを實見したり、抜齒は滞りなく着手せられ、患者はツァングが  
齒槽縁に達する迄何等の反應をも起さざりしが、抜齒の瞬間に渠は覺醒し、  
大聲を放つて泣出したり、驚くべきは創傷よりの出血殆んど無かりしこと  
なり、渠を宥め、すかして鎮靜せしめたる後、何故に泣き叫びしやを問ひしに、  
誰か自分を毆打せし者ありし故、恐れて泣きたる由答へたり、抜きたる齒を  
渠に示せしに、本能的に指を間隙に送りて齒の取れたるに驚き呆れ居たり、  
三四分後普通なる創傷の出血起れり。

續いて他の三人の患者にも同様の方法にて同様の試みを爲したり、其中二  
名は同様に出血なかりき、凡てが骨身に徹する如き泣聲を放ちたるが、これ  
不隨意的に起り來れるもの、如くなりき、いづれも齒の抜けたるに驚きの  
目を睜れり。

以上の經驗は、予に單純なる言語暗示の齒科的實地には應用すべからざる  
を教へたり。著者評、ファルク、シュツプの言語暗示法は舊式なる「睡れ」の命令に過  
ぎざりしが如きを以て、今日の進歩せる暗示的言語の應用の下には更に優

れたる成績を擧げ得べしと信ず、尤も抜齒の際の感覺に對する恐怖豫防的暗示を施すを要す。

次に予はシレンク、ノツチングの方法を想起したり、即ち麻醉劑によりて誘發せられたる催眠状態は、單純なる心的方法によりて惹起されたる催眠状態に比して其程度深しといふことなり、予は之を實驗的に後證せむとせり、最初の試験人物は二十三歳の給仕人なりき、予は臭化エチールをエスマルとの假面に點滴しつゝ、深く呼吸せしめたり、第六回目の呼吸の終りに、興奮期に相當する所の四肢の輕き伸張を見たるを以て假面を除き、もう熟睡したと告げ、患者にも斯く語らしめたるに、同時に顔面のチアノーゼは蒼白色に變化せり。

予は催眠度を深からしめむが爲めに次の如き暗示を與へたり。

- 一、上唇に手が觸れたならば口を開きなさい。
- 二、すると美味しい桃をあげるが、ちと冷たい。
- 三、目を覺した後は食べた桃の結構な味が想ひ出されて、他の事は一切忘

れる。

四、二分間立たぬ中はどんな事があつても、目が覺めぬ。

以上の暗示を反覆したる後、患者に之を繰返さしめ、其上唇に觸れたるに患者は直に口を開けり、予は鉗子を下の第一臼齒に當て、冷き鐵が患者の齒に觸れ居る間、渠は真に之を味ふが如き運動を爲せるを認めたり、抜齒は一分間にして了れり、催眠状態は尙持續せり、渠は抜齒に就いては何事をも想起すること能はざりき。

予は其後九回程同様の經驗を積み、只一例に於て少しく失敗したることありしのみ。

斯くして予は齒科に於ける催眠療法の有効なるを認めたり、其理由の一は暗示によりて不快なる後作用を豫防し得ること、及び麻醉劑の應用危険なる場合に於ても暗示療法を施し得る餘地あるが故なり。

更に進んで同氏は只一滴の臭化エチールと其他は水のみを用ゐて催眠状態を惹起さしめ齒科的治療を施したることもあり。

次に伯林の齒科醫 Richard Hummel の報告を左に抄記す。

「予は一九〇〇年に始めて催眠術及暗示に關する講演を聞き、之を我齒科に於ける實地的治療に應用せむとする希望を抱けり云々。

予の暗示の効果を奏せしは三十歳許りの肉屋の主人なるが、著しき苦惱の面持にて下の小白齒の抜齒を欲せり、予は渠を安心せしめて曰く、予は抜齒用に供する最新最良の藥劑を所有す、之を注射する時は全く無痛にて抜齒するを得べしと、是に於て予は齒齦に蒸餾水を塗布し、同じく餾水の數滴を病める齒の兩側に注射せり、二分後に抜齒は行はれたるが、患者の言によれば鉗子の齒に觸るるは分り居たれど、毫も疼痛を覺えざりきと。

第二例は二十二歳の青年に對して行へる言語暗示なり、渠は夥しき流涎あるが爲めに、患者の既往の經驗により下顎第二臼齒の正確なる充填困難ならむとの理由の下に之を拒めり、予は之に言語暗示を施して曰く、口腔内の洗滌を施さば流涎の除去容易なりと、乃ち醋酸陶土液を以て洗滌し、開口を命じたるに、果して流涎なし、直に齒孔を穿ち充填することを得たり。

次の一例は催眠状態の偉效を認むべきものなり。

三十六歳の某夫人、心臟瓣膜病あるが故に、一切の麻酔劑を用ふるを得ざる條件の下に、知友の醫師より送られたる患者なり。主訴は下顎の劇痛にして、診斷は下顎骨炎(第二臼齒の深き齶齒より起れる)顎下腺腫脹骨膜の化膿は既に潰裂し、軟部に出でたるを以て腫脹は泥様性状を呈せり、夫人は催眠術を承知し居り、暗示感性を有するを主張せり、依りて予は知友にして催眠術に巧妙なるグロル君を夫人に紹介し、數回施術を受けしめたり、グロル君の終結の暗示は左の如くなりき。

「今日から先、フンメル先生の所へ行つて治療椅子に凭りかゝると、先生が一から三迄を云ふ間に睡に就く、大變よく眠るので先生の聲だけが聞える、そして其いふことを守つて再び先生が起して呉れる迄、落ついて静に眠ることが出来る。」

夫人は再び來れり、予は一、二、三を數へたるに、迅速に催眠せり、よりて口を開かしめ、顎關節をカタレブシーの状態となし置き、完全なる無感覺を暗示し

同時に夢の間に瑞西に遊び(昨年の如く)自然の美を嘆賞する旨を告げたり。予は抜歯し、創傷を洗滌し、ヨードフォルムガーゼのタムポンを施したる後患者を覺醒せしめたり、患者は毫も手術を感ずることなく、心地よくホテルの屋上より繪の如き風光を展望し居たるなりと。

其他抜歯に着手すると共に、腦貧血を起す患者少なからざるは、主として恐懼、苦悶等に由るものにして、殊にヒステリー性の婦人に於て往々遭遇する所なるが故に、豫め催眠的療法を施す必要あり、腦貧血そのものは敢て深く憂ふるに足らずとするも、其發作が他患者に及ばず影響に至りては等閑に附すべからざるものあり、彼等は眼前の一發作によりて醫師の手荒き治療若くは堪へがたき疼痛、其他藥劑の不純等に疑念を馳せ、信賴の念を薄うする虞れあり、これ齒科専門醫の當面の一問題なり。

*Michel* は無痛覺の暗示のみならず、好んで健忘症の暗示を與ふ、若し最初の暗示が實現せず、抜歯に當りて患者は疼痛の徴候を呈する時は、小手術の手を止めて一片の綿を創上に置き、患者をして口を閉さしめ、再び靜に催眠術

を施す、而して完全なる健忘症を惹起さしむるを得たり、其他の小手術に際しても亦同様の方法を講ず、最上の効果は特に貧しき階級に屬する六歳乃至二十歳の患者に於て之を見たりと。

## 二十一、精神病と暗示

精神病の一部に關する暗示的療法は既に記載したるが如し、固有なる精神病の興奮期に於ては概して催眠術を施さざるを可とす、何となれば妄想を高むる虞あればなり、早發性痴呆、麻痺性痴呆は一般に效果なく躁鬱病に對して著者の時々應用して其効果を認めたるは、寛解して退院せむとする際、次回の發作に對する豫防法、即ち平素の攝生法及び若し再發したる際には直ちに參院すべき旨を暗示するにあり、殊に未婚の女子は發病當初、放逸に流れ、妊娠の虞あるを以て、催眠中之に對する警戒を説き、其有する所の病識を利用して病の初徴に注意せしむるを便とす、例へば、世の中が面白くなつて、口が軽く、家に居りたくなかつたら、お母さんにさういつて直ぐ病院へつれて來て貰ふやうに、といふが如き暗示を反覆し、患者にも之を言はしめ、而



る後退院せしむるを得策とす。

次に痴愚の如きは往々著效あるを認む、其惡癖の除去、危險性の緩和等、當初何等の影響をも残さざるが如しと雖も、反覆施術の後に於ては、漸次印刻彫琢の跡を認むるを例とす、即ち催眠的教育、暗示的感化を主とするものにして、長日月に互り極めて忍耐に、専ら具體的方法により施術するを便とす、變質者亦然り。

次に精神病看護上重要なは、看護人若くは附添人に對する催眠術にして、其主眼とする所は喧囂の間に處して神經衰弱を起さず、而も危險なる患者の行爲に對して急速豫防策を講じ得る様に準備せしむるを以て目的とする所の暗示なり。

即ち看護夫若くは附添人を催眠状態に置き、強烈なる喧躁の聞えざることによりて覺醒せられざるの暗示を與ふ、而して彼の耳邊に於て拍手し、口笛を吹く、彼は覺めず、續いて些細なる物音、例へば爪を三度弾く音を聞けば直に覺醒すべしと告げ、之を試むれば彼は忽ち醒む、而も拍手、足踏等の音響

は依然として何等の影響をも及ぼさざるなり。

是に於て彼に暗示して曰く隣室の最大なる喧噪も汝の安眠を妨ぐるることなし、靜に身心を休むるを得べしと雖も、汝の一患者若し竊に逃走自殺の目的を以て起上らむとするが如き異様の物音を耳にする時は直に目覺すべしと告ぐ。

興味あるゲルリソングの一例を左に抄記せむ。

「M.S.なる夫人、躁暴病にて入院せり、十四人の兒を生み、中十一人は健存す、常に軽度の落産にして十五分間以内に終了せり、躁病は慢性にして暴行劇甚、夜間は隔離室にのみ收容せり、其際患者は全然錯亂し、何人をも認識せざりき、入院後妊娠し居たるを發見せり、分娩の時期も判然せず、予は種々心を悩したる結果、患者を格子附の窓ある一室に收め、其戸口の廊下にベットを置き、之に看護婦中の最深催眠度のものを眠らしめ、暗示して曰く、毎晩安眠する、夫人のいつもの興奮の物音を聞いても目が覺めぬ、けれど分娩の兆候が現はれたら直ぐ起き上る、多分患者は靜になるだらう、ひそく泣くかも知れ

ぬ、自分にはごんな兆候があるかはつきりしない、それでも汝には分かる、直ぐ婦長の所へ飛んで行つて醫者を呼んで貰ふ之を一、二回暗示し該看護婦は任務に就き、患者は著しく發揚し、不潔にして錯亂し、破壊暴行を逞うせり、次席の醫員は右の如き予の準備に對して首を振れり、五月六日夜八時、次席醫員は患者を一診して何等分娩の兆候を認めず、該看護婦に向ひて、まだ間があるだらうと云ひて去れり、同夜十一時、褥中の看護婦は突然覺醒し、一寸室内を覗きて婦長の所に走り、始まりましたと報告せり、直に醫師は呼ばれ、分娩の際に間に合へり、予が産褥に駆け付けし時は早や數名の人其處に集り居り、患者よりは呪咀と鐵拳と足蹴とを以て歡待せられたり。

生れし兒は健康なりしが、後百日咳に罹りて死亡せり。

## 二十二、船暈

既に船暈を發せるものに向ひては左迄の效果あらざれど、暗示の豫防的價値甚だ大なり、即ち乗船に先ち若くは波靜まれる後、催眠療法を施す時は其後は船暈を起さずして風濤に堪ふるを得べし。

暗示の要領は不快なる船の動搖を心地よく感せしめ、一種の臭氣に對する抵抗力を加ふるにあり、或は後者に對する嗅覺遲鈍を暗示するも可なり。

Hofmann は船醫として、船の些細なる動搖によりても最も劇烈なる障礙を起す過敏なる船客に催眠術を施し、好果を收めたり、其報告左の如し。

第一例、二十八歳の士官、強健なれどアルコール不堪症あり、航海第一日より頭痛、嘔氣あり、第二日より凡ての食物を吐し、ヴェロナール、ナトリウム等無効なり、催眠術を施せるに只一回の治療にて全治せり、患者は其後の十六日間、航海に堪へ、凡ての食物を取り、海は荒るゝとも元氣盛なりき。

第二例、二十五歳の婦人、脊椎後彎兼側彎と肺尖加答兒とを有し、丈低く羸弱なり、二回の催眠術によりて効果を奏せり、只一度は浪荒れたる際嘔氣ありしが、一時間後に快癒せり、症状は第一例に同じ。

第三例、四十歳の女教師、嘔氣なく刺戟症と不眠症あり、前五回の航海の際いづも同様の症状ありたるが、上陸後は之を見ざるを例とせり、催眠劑を與へしに、僅に不安なる三、四時の睡眠を生せしのみ、五回の催眠術を施したる後

持續的治癒あり、毎夜催眠剤を用ひずして八時間を眠り得るに至れり。

### 二十三、精神分析學

ヒステリーに屬する種々なる症候の療法は既に記載したる如くなるが、尙附加すべきは所謂精神分析學 *Psycho-analysis* なりとす。

精神分析學の説く所によれば、ヒステリー、神經衰弱、若くは精神衰弱等は大部分幼時に於て受けたる精神的外傷に起因するものにして、其際に起れる顯著なる情緒の抑壓され、変除せられざりしものが中心核子となり、例令其中核は忘却せられ居るとしても、之によりて誘發せられたる病的感情及び身體的障礙は存続するを以て、患者をして最初の感動を想起せしむるの策を講じ、此種の抑壓され、埋没されたる原因的感情を發射せしむる時は、内心の重荷は一時に除かれ、抑壓に起因せる凡ての症候及びヒステリー性體質は消失するを得べし、即ち患者を誘導して自白せしめ、其感動の羈絆を脱し、自由の身となる機會を與ふるを以て目的とす、*Brewer* は當初催眠状態を利用して思想の聯合により潜在せる如上の強感情を帯べる觀念を喚起せし

め、此根源を絶つによりてあらゆる症候を一掃し得たりと稱せり、後 *Frank* は如上のブロイエルの方法を變化して催眠術を應用せざるに至れり、即ち患者の思想を其内の生活に集中せしめ、凡ての五官的刺戟を排除して渠は手を患者の前額に當て、忘れたる記憶を搜索して幼時に遡らしむ、フロイドは患者の抵抗を除去するが爲めに催眠術を施すを必要とせず、單に患者が想起し得べきを彼に確言すれば夫にて足れりと思惟せり、フロイドは矢張聯想の法則を應用して一定の語句を記し、若くは語りて患者をして直接之に關係ある字句を擧げしむ、例へば、花なる語を與ふれば、之に聯想して、美しい「香氣がある」、温室等を聯想するが如し、返事は急速にして躊躇せざるを要す、熟慮して巧妙、周到なる返答を與ふるは、精神的創痕の個所に觸れたるを意味す、此種の抵抗と糊塗と躊躇とに打勝つは、術者の巧妙なる手腕と能力とに待たざるべからざるのみならず、患者よりの十分なる信頼を受くるにあらずんば成功覺束なしと。

フロイドの假説によればヒステリーの症候全部は皆其端を色情的關係に

發せり、殊に片思ひ、滿されざる色情等の如きは原因中の尤なるものなりと、既記の如く精神分析的療法の追求する経路は正に暗示療法の反對を行くが如し、フロイドによれば暗示療法によりては一の永久的の成功をも得る能はず、單に一時的に症候をばかしたるに過ぎずと。

更に詳細に精神分析學を記述すれば左の如し。

フロイドの根本的觀念に二あり、其一は各種の精神的機轉は凡て法則によりて支配され、何一つ偶然的に起り來るものなし、其二は精神的機轉は心理學上の用語のみを用ひて科學的法則によりて説明せらるゝを得るものなりといふにあり、其二の思想に關しては必要上無意識的精神作用の存在を假定したるものなり。

更に進んで彼は複合體に關する理論を説く、複合體とは一定の情緒的、欲望的傾向を有する觀念の結合なり、而して其有する所のエネルギーは一定の目的を達したる際にのみ發射せらるゝものごとす、此エネルギーの發射は満足と稱する終極状態に到達せしむ、吾人は此複合體に全く氣が付かざるこ

とあり、若し二種の相反する複合體が同時に存在して活動するものごとすれば、形容的の意味に於てのみならず、實際的に、兩者の間に戰爭起る、而して此爭鬪は情緒的緊張を誘起す、此の如き爭鬪の犠牲者は一方の複合體を舉げて他の者を省みず、事件を落着せしむるか、若くは兩者共に貶くるか、此二策の外なきも、時には解決は病的にして、ヒステリー若くは其他の精神神經症を發することあり。

人は複合體の爭鬪の爲めに無意識に苦み、意識せられざる精神界に何事の起れるやを知らざれども、只、其結果の悲惨のみを感ずることあり。

若し此爭鬪を意識せば、複合體のいづれか一方を心の中より驅逐し、之を忘却し、若くは忘却せむと試むるによりて之を終熄せしむるを得べし、之を

*pression* 幽閉作用と名く。

幽閉せられたる複合體は最早存在せざるやうになれるにあらず、單に無意識となり、且つ無意識ながらも、満足<sup>を</sup>妨害するを得べし。

茲に假定せられたる活動的機能あり、*Censor* 目附と名く、此目附は複合體の

意識に表はるゝを防止し、若くは無意識界に之を驅逐するの任務を帯ぶ。目  
附付複合體は依然として意識に影響を及ぼせども間接的、彎曲的に作用す  
るものなり。

複合體の情緒的、欲望的元素は其從屬する所の觀念より分離し、獨立して存  
在することを得べく、複合體のエネルギーも亦本來從屬せし觀念より放免  
せられ得べき分離性のものにして、他の物と結合するを得べし。

複合體間の争闘は多くの精神的異常を生ず、例へばヒステリーの如き是れ  
なり、争闘の際には全力を竭して目附役を避けむが爲めの方法講せらる。即

ち(一) *symbolization* 象徴作用及び(二) *condensation* 凝縮作用等によりて爲さる、凝  
縮作用とは一の症候が二つ若くは二つ以上の獨立せる無意識的希望を代  
表することあるをいふ、(三) *displacement* 轉位作用とは元來複合體の一分分に  
附屬したる情緒が目附の監視の下にあらざる或元素に附着したるをいふ、  
(四) *representation of opposite* 反對表現とは、症候の一定の元素が無意識なる「希望」  
に關する相當の元素の正反對を描寫することあるをいふ、(五) *alterations in*

*time sequence* 時間的序列變更とは、ヒステリーに於て出來事の順序が轉倒せ  
られ、變更せらるゝをいふ。

争闘は主として、幽閉せられたる希望に關して起り、幽閉せる希望は主とし  
て「快樂」に因由す、快樂は色情以外に廣く各種の欲望、本能及び野心等を含む。  
精神神経症の原因を探求してフロイドは夢の研究が大なる價值を有する  
ことを發見せり、彼は夢を説明して曰く、夢は幽閉せられたる希望の表現な  
り、目附は覺醒生活に於ては活動すれども、睡眠中に於ては象徴作用を惹  
起さしむるに過ぎず、其結果として夢は意識に明白なる「公表的内容」を有し、  
覺醒後に於ても多少記憶せらるゝもの、**潜在性**無意識的内容を包含す。  
後者即ち**潜在性内容**は夢の主要なる部分にして、**公表的内容**は象徴的なる  
點以外には何等の價值なし。

象徴を解明する時は複合體が争闘を惹起しつゝあるを知る、乃ち複合體は  
患者にとりては幽閉せられて無意識的なれども、而も眞實なる希望なり、夢  
は又覺醒生活に於ては達すること能はざる希望を成就するの機會を患者

に與ふ。されば夢に關する唯一の必要なる研究は其象徵にありといふを得べく、其他の方法に於ては精神的生活を闡明するの道なしといふに歸着す。次に精神分析學の本論に入らむ。

精神分析の目的とする所は幽閉せられたる複合體を發見するにあり、當初フロイドは精神分析を爲さむとする患者に催眠術を施したれども其後之を棄て、今は *Free association* 自由聯想法を用ふるに至れり、自由なる聯想とは患者をして其心中に去來する凡ての事に就て自由に談話せしむる謂にして、特に患者にとりて些細にして重要ならざるが如く見ゆるものを出話せしむ、何となれば其無價値なる觀を呈せしむるものは、目附なればなり、其實最重要なるものなるやも計られず。

患者若し其心に起り來る或物を告ぐるに躊躇し、若くは之を拒む時は、目附が之を幽閉せむと試みつゝあるを察知すべし。

患者は彼の考へ得べき凡ての事を打明けたる後、醫家は其陳述の翻譯に着手するなり。

此自由聯想法以外に、複合體は言語を以てする所謂聯想試験によりても亦發見せらるゝを得べし、例へば百の言語表を準備し、之を一つ／＼患者に讀み聞かせ、各語に付最初に患者の心に來れる言語を書き留む、反應時間も亦記入せらる、餘り長き反應時間は抵抗を意味す、抵抗は又目附の暗中飛躍を意味す、されば抵抗の後心に現はれたる言語は疾患に關する重要な手がかりなり、最後に患者は其夢を語り、これも亦象徴的に翻譯せらる。

翻譯の方法は次の如し、

フロイドの述べたる所によれば、一婦人月經あるを夢みたり、翻譯せられたる意味は、月經の停止なり、彼女は母たるの不愉快の始まるに先つて更に長く自由の身を樂みたかりしなりと、又他の婦人は其腰部に牛乳の汚點を見たるを夢みたり、此意味は妊娠にして、若き婦人は長子に與へたるよりも多くの牛乳を次子に與へむとの希望を抱き、従つて夢みたるなりと。

プールの述べたる夢の一例を抄記すれば、一婦人街上を歩みて偶々荷車に繋がれたる馬の彼女の方へ駆け來るに遭へり、逃れむとすれども能はず、馬

は殆んど彼女の上に入り、之を押遣らむと手を差伸べたるに、馬は其手を口に入れて噛みたり。叫びつゝ驚きて醒めたり。此夢はヒステリーの發病直前若くは發病當時のものなり。ブリルは夢中の恐怖が色情的性質を指示し、馬は單に色情的象徴に過ぎざるを疑ひ、更に試験を重ねたるに、彼女は馬の交尾を見て最初の色情的印象を得たるを確めたり。然れど此試験の時期に於て彼女は突然口籠り、聯想の繼續を命せられて、馬とは關係なき事を語り出でたり。そは次の如し、

夢の前夜、煉瓦のストーヴより一小動物出て來りてベットのの中に入り、平素は鼠を恐れざりしが、其時は著しく恐怖し數時間に亘れり。ベットを搜索したれども何も見ず、然れど其臥褥中に横るを恐れたり。此事柄が彼女に想ひ起させたるは、嘗て鳥毛の臥褥を賣らむとして不成功に了りし後、二三時間にして起れる恐怖なり。彼女は再び口を噛み、思想の流れ涸渴したるを告げたり。醫師は彼女が何故に鼠を恐れしやを問へるに、婦人は其實物に驚かされたるにあらず、只幻影を想像したるなりと答へたり。即ち何人かが魔法

によりて悪影響を彼女に及ぼさんごせしにあらずやと想像を逞うしたれど、彼女は最早かゝるノンセンスを信せずと。

何人か悪影響を逞うせしやと問はれて、彼女は最初答を拒み、詰らぬ下らぬ話なりといへり。後彼女は臥褥を買はむと言ひ出したる男子がそれなりと自白せり。彼女はXなる男子は無禮なる奴にして、飽く迄彼女を訪問せむと固執せし故、彼が來りし時隠れて面會せざりしなりと云ひて、突然絶句して憤慨し、斯様なる事を追想するは愚なりしと語れり。醫師は彼女が或物を隠し居れるに氣つき、Xなる者と或關係ありしを疑へり。彼女は怒りて之を拒みしが、二日後にありのまゝを白狀せり。即ち馬はXの象徴にして、事件は色情的のものなり。

ブリルの第二の例は左の如し。

一婦人小き姪を伴ひて動物園に赴きしに、動物は皆檻より出で來りたるを以ていたく驚きたり。彼女は階段を見つけ、辛うじて攀ち登れり。頂上の戸は凡て錠を卸されたり。覺醒、此夢の精神分析は次の如し、患者はヒステリーに

羅り、異性を嫌ふこと甚し。姪は純潔、無邪氣、處女の表徴なり、猛獸は彼女を追跡しつゝありし動物的情慾を意味し、階上に達せむとする大なる努力は普通なる性の應接なり。全景は交接を象徴するものなり。彼女の開くこと能はざる凡ての戸は彼女の逸したる結婚の機會なりと。

斯くして精神分析學の主眼とする所は、患者の既往の歴史に於ける或不愉快にして痛苦なる、若くは羞耻に堪へざる出來事を發見するにあり、其理由とする所は、該出來事、即ち無意識的精神内に於ける其事柄の記憶は所謂争鬪の原因となりたるものなり。されば之を意識的生活に運び來り、事件の真相を患者に示す時は彼は治癒せらるゝなり。

其他フロイドの擧げたる多數の例の中、次の如きものあり、  
教育ある年増の未婚婦人、重症ヒステリーに罹れり、精神分析によりて漸々該婦人が或男子に戀したるが、其後男子は婦人の妹と結婚したりといふ告白を得たり。程なく妹は死去したるを以て、婦人は義兄が今は自由の身なれば己れを娶るものならむとの希望を抱きたるが、其倫理的思想と教育との

手前、此希望は強く幽閉せしめられたり。幽閉抑壓の結果はヒステリーの症候となれり、即ち最初的情緒的興奮が褪色したる後迄も長く存続したる所の發射せられざる精神的損傷に對する身體的、同價的、均衡的表現なりと。  
又他の一例は、年増の未婚婦人、新聞紙上の記事、話題等が犯罪に關したるものなる時、各種の罪を犯せりて己れを責むる強迫觀念あり、緻密なる分析の結果、フロイドは此等の強迫觀念が失戀の結果に續發したる色情的錯亂の後影響として發したるものなるを確め得たり。

二人の婦人はいづれも精神分析的療法によりて全治せしめられたりと。  
ジャコビーは精神分析學につき左の如き意見を有す、

「フロイド一派がヒステリーの原因と見做す所は不満足にして、従つて本法の基礎確實ならず、何人も何時かは深甚なる感動を抑壓せざるべからざることありしなるべく、意志の鞏固なる人々には何等の悪影響を及ぼさるに反し、一部の人のヒステリーを惹起すは元來神經系の不安定なるに歸因するを以て、失戀の機會に於てのみならず、他の感動によりても同様に發病



し得べし。フロイドは疑ひもなくヒステリーの製造に關する苦惱性色情的經驗の意義を過大視せり。彼は偶然色情問題を發見して、凡てを同一視せむとするの弊に陥れり。而して彼が患者に就き煩勞なる研究検査を爲す間に、知らず／＼暗示的に吹込みたる幾多の未經験的事項の、患者の經驗となりて陳述せらるゝに遭遇せしならむ、即ち醫家自身の心づかざる間に、患者に暗示して其爲したることなき戀愛的經驗を爲したるが如く思惟せしむることなきにあらず。

フロイド一派の得つゝある所の結果の一樣なるは決して偶然にあらず。されど深甚なる感動にしてヒステリーを惹起すに十分なる程度のもの、深く記憶に彫琢せられて潜在するを例とするを以て、熱心なる精神分析的方法以外的手段にては之を復活せしむるに由なし。又吾人は、最初の感情的起點が記憶より消失して、之に起因せる二次的身體的障礙のみ存續することを拒む能はず。

次にフロイドは機能的神經障礙の發生に關して夢も亦一定の影響を有す

と信ずるは特記せざるべからざる事なり。而して此種の夢の經驗も亦凡て戀愛に關係あるものと見做せるは再度の失策に陥れるものなり。夢は神經病の原因たらむよりは寧ろ病的なる神経系の産物と見るが妥當なるが如し云々

ヒルシラフは又精神分析學を批評して、フロイド一派の原因と見做せるものゝ多くは症狀なり、さればヒステリーの症候的療法に外ならずと論せり。以上の如く諸家の意見はフロイド一派の所説を認容するに躊躇しつゝあり、其如何なる程度迄眞理を含有するやは今後の研究に待たざるべからざるは勿論なれど、確に一面の眞理を含有するは興味あることなり。

而してフロイド一派の Jones が暗示の治療的效果と題して説く所左の如し、「便宜上暗示の二つの異なる内容を區別する時は、一は觀念性にして他は情緒性なり。第一の場合に於ては、暗示なる名稱は或人の精神へ或思想を有効に運搬するをいふ——ベルンハイムの定義、便宜上之を言語暗示と稱するを得べし。第二の場合に於て暗示なる名稱は、與へられたる情緒的狀態の獲

得を云ひ表はす時用ゐらる、例へば一人が他人の精神的影響の下にある時の如し、多くの著者が問題の知識を有せずして精神分析的療法の赫々たる結果に關して、是れ畢竟暗示の結果のみと批評するが故に、如上の二種類の内容の區別を説明する要あり。即ち茲に二種の異なる批評、明白なる混同を認むるに難からず、或は曰く、精神分析の際惹起されたる原理は虚偽なり、何となれば單に暗示的影響を及したるに過ぎざればなりと、又他の者は曰く、發見せられたる記憶の眞實なると虚偽なることを問はず、患者の狀況の輕快は醫師の個人的影響の結果なりと。

一般に承認せられたる所によれば、上記の第二の場合、即ち情緒性暗示と稱すべきものは基本的、根抵的價值を有し、第一の場合、即ち言葉の觀を爲すものなり、されば暗示感性の亢進例へば言語暗示の感受性の増進は、輸入せられたる情緒状態の二次的結果にして、吾人の論せんとする問題は主として後者に關するものなり。

暗示的影響の最も完全なるものは催眠状態の間に於て見らるゝものにし

て、ナンシー派の金科玉條として知らるゝ所の、暗示と催眠とは本體的に同一作用の階級的差異あるに過ぎずといふ言は一般に承認せらるゝが故に、兩者を同一に思料するを得べし。

本問題に關する吾人の知識の近代的最大進歩の一と見做すべきは、主要なる仕事は從來思惟せられしが如く、術者によりて爲されずして、被術者によりて爲さるゝといふ事實を漸次承認し來れることなり。

換言すれば吾人の爲すべきことは、術者の方面よりする絶對的作用、若くは影響といはむよりも、寧ろ種々なる被術者と共に變化する所の固有なる性能の上に存すと謂ふべし。されば吾人は最早被術者を目して意志強盛なる術者の手に委ねられたる憐むべき自動人形と見做すこと能はず、患者の胸中の奥底に於て構成せられ、上場せられたるドラマに於て、術者は一の役割を有するに相違なきも、決して缺くべからざる大役を務むるにはあらず、吾人は此種の脚本中に活動する所の諸種の力そのものに對して研究の必要を感ず、其等の力こそ暗示及催眠術に於ける眞の問題なれ。

此種の作用の心理學的重要なる特性はベルンハイム等によりて意識の分離と名けられたるが、一見正當なるが如し、然れども此分離を以て催眠的方法によりて生せしめられたる人爲的狀態と見做すは早計の嫌なきにあらず、何となれば健康なる心に於ても、病的なる精神に於ても、分離は常に存在し、單に術者によりて利用せられたる迄なればなり。

概言すれば、分離の性質及び範圍と暗示感性との間に密接なる交通を有するを以て、此等の現象の最も顯著なる表現と見るべき、ヒステリーの場合に於ける催眠状態に就きて研究するの必要を認む、吾人は、疾病てふ顯微鏡を以て心的作用を研究するの更に便宜なるべきを信す。

近來、催眠とヒステリーとの問題が別々にせられたる主因は那邊にありや、要するに健康者に於て用ひられ得べき催眠状態の大なる頻回の度が、兩者の各々獨立せる状態なるを證明したるに歸因するが如し。

「吾人の各が多少の暗示性を有す」といへる *Sizis* の決論は其後の研究者によりて十分に確認せられ、凡ての人は多少ヒステリー性なり」といへる *Mochius*

の金言も亦單に諷刺にあらずして、正確なる事實なること承認せられたり。*Braid* はヒステリーに於て活動する所の無意識的、分離的傾向が健康者に於ても出現するは、ヒステリーの症候の發生と心理學的に酷似する所の機械的作用に因由するものなるを多數の例證によりて詳述したり。

如上の見地より考察する時は、暗示なるものは一般に信せらるゝが如く、最早分解すべからざる孤獨的現象にはあらずして、一般なる心理學的機械的作用の一變種たるの觀あり、其機械的作用は精神神經症の障礙に於て主要なる中樞的因子となるものなり、簡言すれば、暗示は *Transference* 交付作用と稱せられたる一般的機械的作用の表現にして、此交付作用は又 *Irreversibility* が最近に *Introjection* 内射作用と名けたるものゝ特殊なる變種にして、且つ最後に *affective displacement* 情緒的轉位作用の固有型を爲すものなり、本作用の過度なる活動は精神神經症に特有なるを見る、此等の作用を説明するには一般のものより特殊なるものへと、逆に進むを以て最も便利なりとす。

轉位作用とは不快なる情調を伴ふ所の一の觀念より他の比較的不快なら

ざる觀念へ情緒を轉位せしむるをいふ。

*Repressed complex* 抑壓せられたる複合體は該複合體の本源的情緒を帯べる第二の觀念によりて意識的に置き換へらる。此二つの觀念の間の聯合は極めて表面的のものなり、其機械的作用は日常生活に於て常に目に觸るゝを例とす、平凡なる一例を引けば、小兒の人形の如し、其人形に對して、小兒は赤ん坊扱ひにして相當の注意を拂ふ、即ち人形の觀念が赤ん坊の觀念を排除したるものなり、然れど精神神経症に於ては此種の作用の範圍は極めて廣大なり。

此種の患者の *inadequate emotional reaction* 不相當なる情緒的反應、即ち極端なる同情、外見上些細なる機會に於て彼等の示す所の強度なる愛憎は同様に説明するを得べし、外界の出來事は聯想によりて以前に經驗したる同様の出來事の潜伏せる記憶を喚起し、之に起因したる異常に強き反應は、一部は現在の出來事の爲にして、一部は既往の出來事の爲めなり、即ち兩者に歸因す、従つてヒステリー患者の所謂 *exaggerated emotions* 誇張せられたる情緒なり。

るものは、單に外觀的に誇張せられたる迄にして、外界の刺戟との關係に於てのみ然り、無意識的原因との關係をも考察する時は、情緒は全く當然にして論理的の發露たるを知らむ。

患者の方面に於て彼自身の個性に其周圍を合體せしめむとする(身に引受ける)過度なる傾向、及び斯くして自己を擴大するを *Introjection* 内射作用と稱せらる、凡て吾人に通有なる傾向の誇張せられたる迄なり。

最も興味ある内射作用の表現は、患者の周圍に於ける人々との關係に於て之を見る、患者は彼等に愛憎及び其他の情緒を交付す、その情緒たるや、何年か以前に全く他の人々との關係に於て成立したるものにして、突然醫師に懲りたることある兒童が其後如何なる醫師に對しても恐怖の念を抱くが如し。

此の如く、嘗て情緒と聯合したることある人に類似したる人の面前に於て、同一なる情緒を経験する傾向を *Transference* 交付作用といふなり、されどフロイドは此名稱を一程度迄制限して、病例を處置しつゝある醫師に關し

て如上の作用を生したる機會に於てのみ之を用ふるを便せり。精神神経症の患者を取扱ひたる豊富なる經驗を有する醫師は、彼等の示す所の態度が如何に變幻極りなく、信賴し難きかを了知せるならむ、彼等は氣まぐれを以て廣く有名なり。

然り乍ら、此種の解し難き行爲は、其因て來る所は如何にも不相當なる病的なる反應の如く見ゆる外部の機會のみならずして、既往に於て成立し、無意識的に存在せし情緒の偶々類似の機會に遇うて喚起せられたるに想到せば直に理解することを得べし。即ち聯想の問題なり、醫師の言語、音調等は無意識的に或忘却せられたる經驗を想起せしめ、患者は之に對して反應するものなり、故を以て反應は意識せる個性によりて惹起されたるにあらずして、刺戟せられたる或無意識的複合體によりて發せられたるものなるを理解すべし。

特殊なる意義を有することは、醫師に交付せられたる情緒が最も頻回に其兩親殊に父との關係より胚胎し來れる觀察なり、醫師に拂はるゝ尊敬及び

其名聲と權威ある位置は父との聯想の構成を容易ならしむ、且つ醫藥的忠告の一片の強制音調の稍嚴肅なること、及び癢止若くは過失の批難等は如上の印象を完成せしむるに十分なり、最も多くの場合に於て患者の兩親に對する破倫的關係、殊に父に關するものが其疾病の中心核子となれるが故に、此處に表はされたる交付作用の型は特殊なる意味を有するものなり。斯くして患者より周圍の人々及醫師に交付せられたる情緒的機轉は、一見多種多様にして感謝、憎惡、愛情、恐怖、嫉妬及び其他を包容するが如しと雖も、精神分析的研鑽によれば、此等の複雑なる作用は其外觀の如く、本源的、分析不可能のものにあらずして、却つて其反對に更に、より深き傾向に對する二次的反應に過ぎざるを證明し得たり。此の一層深く、一層本源的なる傾向は常に精神色情的活動の主成分、若くは誘導體たることを發見せしはフロイドの最も大なる業績の一なり。

怨恨、忿怒、嫉妬及び其他の情緒は不満足なる色情的經驗、失戀等の二次的反應として發現し得るは眞理にして、コングレーヴの耳慣れたる詩句はよく

這般の消息を言ひ表はしたるものと謂ふべし。

天國も戀愛の如き憤怒を嫉妬に變じたることなく、

地獄も婦人の如き狂暴を嘲笑せしことなし。

吾人と關係すること最も大なる精神神經症、即ちヒステリーに於ては、其症候は種々なる色情的慾望の假裝したる表出なり。症候中、幽閉せられたる情緒に對する部分的及び不満足なる出路を備ふるものは、最近にして一時的の變化し易き性質のものにして容易に治癒するを得べし、反之、治癒困難なるは一層持続的なる、一定不變性の症候にして、問題の病的情緒に對する一層相當なる出路を證明しつゝあり、されば一定量に上れる空腹なる需要及び慾望は其前に現はるゝ如何なる適當なる者にも愛着せむと準備しつゝあり、而して醫師の觀念に對する此種の愛着は即ち交付作用を組成するものとす。

交付せられたる情緒が絶対的性質、即ち執着性のものならむには、精神的交通 *Psychical rapport* が患者と醫師との間に生ず、勿論患者の方に於てのみなり、

若し患者が此等を醫師に交付すること能はずんば、患者は醫師を同情が無いと稱して他の醫師に依るを例とす。

*Rapport* なる語は心理學的に患者の精神内に於て二つの個性の無意識的融合を爲すの謂にして、色情的本能の女性的成分に關係す、宛然兒童が其兩親に關して最初に經驗したる樂しき服従と同様なるものにして、是れ實に其從順と温良との本源たり。

右の精神的交通なるものは吾人が前に情緒性暗示と稱したるものと同一にして、容易に言語暗示を受領すべき基礎を成すものなり。

此の療法に於て種々なる幽閉せられたる情緒、即ち他人と患者との間の既往の經驗に於て發生したる情緒が一つ、醫師に交付せらるゝが故に、患者が其の色情的性質を實現する場合に於ては其の本源を極むるを得べし。

斯くして醫師は、既往に於て種々なる症候を構成して、僅に不満足なる表出を見出したる秘密の希望及び慾望に對する制馭權を手中に收むるを得之

に對して *Sublimation* 昇華作用を行ひ、色情的ならざる社交的目的に轉換せしむるも亦自在なり。

精神分析學の赫々たる功績が單に暗示に起因すといふ評論は現に起りつゝある作用の無識より胚胎するを以て、次の如き駁撃を以て之に酬ゆること容易なり。

暗示は醫師によりて無意識的に用ひらるゝ時は、意識的に其力の及ぶ限り之を開拓する時よりも其効果著しく大なりと主張するは不合理なるべし。加之、交付作用に適する情緒的交通は暗示の全部にして精神分析學に於ては慎重に觀察せられ、其結果は惹起せらるゝや否や中和せらる。

ジャネは催眠的療法の例に於て得られたる、有效なる結果は、主として夢遊的影響、即ち醫師の思想の先入主となるに因するを明示せり、此事たるや、吾人が情緒性暗示と稱したるものと同一なり、即ち絶對的情緒の交付作用是れなり。

種々なる方法によりて治療せられたる患者を研究する時は、何人も精神分

析學以外の方法に於ては凡て同一の法則が適合するを供述するを得べし。即ち情緒的暗示が有效なる結果の主因なることは是れなり。種々なる精神療法的方針、例へば説服法、催眠療法、單純なる獎勵の如き、其他種々なる理學的療法、例へば電氣にせよ、マッサージにせよ、體操にせよ、皆悉く同様なる關係の下にありといふを得べし。

此等の場合に於ける暗示の働きの方法は次の如し、即ち幽閉せられたる色情的情緒は其従前の表現より種々なる症狀へ誘導せられ、一層適當なる物、即ち醫師の身體に執着するに至る。心理學的に觀察すれば、是れ單に一の症候を他の症候もて置き換へられたるに過ぎず、即ち醫師に對する病的なる精神色情的信頼是れなり、而して其下部に横はる所の病的器械的作用は依然として變ることなし、即ち複合體は少しく遠く轉位せられたる迄にして融解せられたるにはあらず。

専門的催眠術者及び其他によりて爲されたる誇張的要求に反して、催眠術及び暗示によりて得られたる所謂永久的结果なるものの甚だ不十分なる

は一般に承認せらるゝ所なり、精神神経症の軽度なるものは、此方法によりて永久的に治癒せしめらるゝは疑ひなしとするも、其場合に於ても成功は甚だ不確實にして、不一定なり、然れども重症なる病例に關しては屢々吹聴せられたる樂觀に對して全然只の水泡的結果を経験せしに過ぎず、頻々として再發起り、一症候は他の症候に代らむが爲めに置換られ斯くして全力を盡すも慢性神経病者は實地家に向つて同様の光景を提供するの外なきものなり、如上の場合に於て情緒的作用が舊きトンネルに注流せむとする傾向は甚大なるを以て、有効に保たれ得る新しき出路は唯醫師との密接なる交渉に於て、交付作用に對する機會を反覆するに存するのみ。此種の不便にして有害なる結果に就ては予は敢て一言するの要を認めず之を病的症狀に對する統治權を得せしめ、患者の完全なる獨立の恢復を目的とする精神分析學によりて收められたる結果と對照せば蓋し顔色なからむ、其本源を極めて始めて有害的勢力を除去し、一層有用にして社交的な作用に變化せしむるを得るなり。

さればフロイドの業績は暗示の性質に對する眼識を吾人に與へたるのみならず、其根抵となる所の種々なる作用を永久的に影響する力を吾に與へたるなり。

### 第十一章 治療的成績

上記の成績は著者によりて多少の差異あるべし、暗示療法の一定の術式の結果を正確に判斷するには、單に其成績を調査するのみにては足れりとせず、治療的原則の性質及び問題とされる疾病の性質を確定し、頻回なる同様の觀察を積み、偶然の結果を除外するを必要とす、尙之に附加すべきは一定の日月の間の成績の比較なり。

從來報告せられたるもの、中、或は多發性硬化、小兒麻痺、脊髓空洞症、パラノイア及び鬱病等の暗示療法にて治癒したりとあるは、精確に診査せば恐らくヒステリーの症候群の誤診なりしならむ、其他觀察期間の甚だ短くして全治せりと稱するものは、其後の病狀の對照を缺くを以て信頼し難し、尙他



に考察すべき點は眞實に治療したりとすることも果して暗示療法のためなりしや否や、其他に治療すべき條件なかりしや、自然的の治療ならざりしや等なり。

例へば關節リウマチス、肺結核、ヒョレア、濕疹、ブルンケル、ウルチカリア、インフルエンザ、月經障礙、ジコージス及潰瘍性乳房癌等の如きは自然的治療の傾向を有するのみならず、同時に應用せられたる物理的療法の効果に負ふ所大なるものあるを以て、暗示療法の結果と認むること能はざること多し。次に或著者は只一回の覺醒時暗示によりて疣を除去したりと稱す、其期間短きは五日、最も長きは四箇月なりき、此種の治療の眞因は暗示によりて有害なる手扱を除きたる結果にして、間接的效果の一なり。

- 一、催眠状態の程度
- 二、催眠に關する信頼の度
- 三、暗示的影響

一、催眠度に關して先づ思料すべきは淺表なる催眠状態なり、本状態は覺醒時とさしたる相違なく、單に安息せりといふ迄なれど、其効果に至りては必ずしも微弱ならず、疲憊せる神経系にとりて好良なる影響を與へ、短時間にして一定度の恢復を待設くるを得べし。家庭に於ては責任と煩惱との念を去る能はず、従つて單時間に於て著しき休息の效果を得ること能はざる者も、醫家の施術室に於ては無關心に休息を爲すことを得べし、尤も時間の長短は疾病の輕重によりて斟酌すべし、例へば不眠症の患者に對して比較的長時間の催眠を必要とするが如し。

治療的効果は此種の催眠的安息状態の持續と、頻回の度と、完全とに關係すべし。次に深き催眠度即ち夢遊的催眠状態に於ける治療的成績は該状態の病的ならざる限り、疑ふべからざるものあり、恐らく最も迅速に、完全に奏效する状態ならむ、殊にウェツテルストランドの持續的催眠状態の偉功は實に贊嘆に値するものあり。

病的なる夢遊的催眠の寧ろ有害なる結果多きに反し、正常なる夢遊催眠

度は暗示感性の著しき亢進を示すを常とすれど、後者は術者の意志のまゝに惹起せしむること困難にして、寧ろ患者の神經狀態の如何に負ふ所大なるものあるが如し。

二、催眠術に關する信頼の度は治効に影響する所大なり、一派の著者は患者は催眠療法を神秘なる一種の方術と思惟し、信仰を以て來るが故に卓効ありと主張するに反し、新しき學派に屬する人々は神秘なる箇條を催眠術中より取除くを以て適當にして且つ必要なりと思惟し、患者をして催眠術の決して不可思議なるものにあらざるを知らしむるを急務とすと説く。

要するに患者の立脚地より觀察するも、神秘的勢力に對する盲目的信仰よりは、這般の精神的作用に通曉せる正眞の信仰を抱いて醫家を訪ふを可とするは何人も首肯する所なるべし、之によりて信念の淺きを來すが如き時代は過去れり、正しき信念より正しき希望は生れ、治療輕快率益々多きを加ふべし、内科的治療に於ても醫家に對する信頼の度は疾病の經

猶豫後等に對して一定の影響あるべきは疑を容れず、まして催眠療法を施すに當りては、患者の理解より生じたる信頼を基礎とするを以て、效果最も確實なりと認む、加之神秘なる方術と思惟し、試験的に、或は術比べ的に術者を訪ふ者ありとするも、醫家よりの説明によりて此種の自己暗示は一掃せられ、誠意を以て治を乞ふに至るべきは見易き道理なり。

### 三、暗示的影響

暗示感性を實驗的、治療的の兩面に分てば、幻覺、強直等を起さしむる實驗的暗示感性は淺表なる催眠狀態に於ては亢進せざるを例とす、反之、深き夢遊度に於ては著しく亢進し、且つ性質上の變化を呈す、然れど治療的暗示感性は表面的の催眠度に於ては量的に亢進すれど、性質上の變化なきを例とす。

覺醒時に於ける精神療法は催眠狀態に比すれば不完全なるを免れず、即ち注意は絶えず轉導せられ、患者は時々自己の意見を語り、心を醫家の言に專にすること能はず、従つて暗示的影響の力は薄弱なるに反し、淺表な

る催眠度に於ては患者の注意の集中あり、反論、抗言は殆んど除去せられ、言々肺腑に徹するの概あり、暗示の作用は遙に確實にして權威あるものとなるを例とす。

次に深催眠度の治療的暗示感性感大なるは敢て贅言を要せず、只術者は毎常任意に本状態を惹起さしむること能はざるを遺憾とす、若し本状態を喚起し得ば、實際に與へらるゝ暗示は、最強力にして最有效なるものに屬するを疑はず。

終りに暗示療法 of 適應症に關しては左の三種の見地より之を誘導するを妥當とす。

- 一、患者の個性
- 二、疾病の性質
- 三、應用せんとする療效の種類

一、患者の個性より即ち其神経系の構造及び精神状態より誘導し得る適應症とは、單純なる方法によりて容易に眞の催眠状態を喚起し得る個人的傾向を指示するなり。

器質的疾患に對しては素より直接の效果を認めず、雖も此種の患者に於ては食餌、睡眠、氣分、看護法等を整頓せしむるによりて間接的効果を擧ぐることに困難ならざるべし。

二、適應症としての疾病は概して各種の神経性の障碍なるは既記の如し、而して器質的疾患の中にも、機能的神経的变化と關聯を來せるものも亦部分的適應症と見做すを得べし。

三、最後に療效の性質として記載すべきは、既に何回となく反覆したるが如く純然たる機能的性質のものなり、尤も上記の如く器質的疾患に罹れる者と雖も暗示療法 of 效果を奏すべき神経的若くは精神的合併症の存在する場合には此限りにあらず。

之に反して禁忌すべき場合は病的なる重き催眠度の發生を目標とす。

## 第十二章 被術者となれる術者

Blueler は 1889 年の「ミンヘン醫事週報」第五號に於て催眠術に罹れる彼自身の経験を報告せり、極めて有益なるを以て之を左に抄記す、

「學友スバイエルはリーポールの方法を應用して予を催眠せしむるを得たり。予は睡眠の觀念を強めむが爲に夜やと更けて臥床の上に横はれり、催眠せんとする善良なる意志は有し居たれども、予は暗示の力と其影響とを研究せむが爲め、催眠中自ら大部分の暗示を除去せむと試みたり。

努力的凝視法も予に對して何等催眠的影響を有せず又純粹なる言語暗示法も效果少き様に覺えたれば今回は次の如き把柄を捉へたり、即ち予は數年前視覚像の統覺に對する周邊網膜像調節反應等の意義に關する實驗を爲したることありて、其際一定の不正確なる注視によりて視野の不定なる部分的缺損が完全に起れるを想起して之を利用せり、例へば額縁に嵌れる繪を眺め居れば、額縁の一方は缺損して見えざるが如し、此缺損は宛然意識に上り來れる盲斑と同様なる自覺的現象の働きを爲せり。

かくて予は如上の適意の方法にて施術者の眼を注視せり、視野の缺損は同

時的の言語暗示により、從來經驗せしよりも遙に急速に現はれ來り、著しく擴大せり、而して統覺し得べき對象は早く朦朧の觀を呈し來り、予は眼の輕き灼熱と之に續く稍強き濕潤とを感じたり、今や物象は其境界を失ひて光と影とのみに目に映せり、驚異すべきは此状態が予を疲勞せしめざりし事に、我目は努力せずして靜に廣く開きたるまゝ、瞬きもせず、頭部より足部迄全身を下つて心地よき温感の行渡るを感じたり。

「目は獨りでに閉づるといふ暗示を與へられて始めて閉目の必要を感じたり（それ迄は努力せずんば閉目すること能はざるやう感じ居たり）而して外観上活動的に宛然普通の疲勞の際急速に眠りつく時の如く目を閉ぢたり。催眠迄要せし時間は約一分間なりき。

予は今や心地よき安樂なる休息状態にあり、他の事情の下にありては長く此位置に横はるは不便ならざるにあらざりしならむも、予は位置を變せむとする何等の必要をも感せず、予の精神は完全に清明にして自己を觀察しつゝ、ありき、予の術者が術後予の陳述したる凡ての物を是認せるに徴して

も明かなり。

次の暗示が予の意識せる思考内容に及ぼしたる影響は覺醒時に於けること異なる所なかりしが、其暗示は大部分實現せり、予は予の特殊なる注意を術者の上に向けずして、獨り予自身の上のみ向けたり、學友は予の一方の前膊を高く水平に舉げて、自分では此位置を換へることが出來ぬと語れり、予は其後直に腕を動かし始めたが、軽く手を抑へられたること新しき暗示を施されたることにより完全に實行すること能はざりき、而して今や予の二頭膊筋は、予の腕を下方に動かさむとして伸筋の力を藉らむとする時、予の意志に反して收縮するを覺えたり、予は一層の努力を以て予の意志を遂行せんとせしに、屈筋の收縮は甚大にして、前膊は予の欲せし如く外方に倒るゝ代りに上膊の上に動き來れり。

次に學友は我右の手の知覺は麻痺せりといへり、予竊に思へり、此種の暗示を與ふるには時期尙餘りに早ければ、渠は失敗するならむと、渠は手背の針刺を告げし時、予は之を予を迷はさむ爲めの言と信せり、何となれば單に鈍器

の觸接を感せしのみなればなり、想像するに予が懷中時計の縁の如きもの、然れど覺醒後眞實に針刺せられたるを知るに及んで少なからず驚かされたり。

眞實の知覺麻痺は達せられざりしが、手は宛然眠れるが如く、一時癢辛の感覺及び厚き繃帯を巻かれたるが如き心地せり。

それより明朝六時十五分に起床の暗示を與へられたり、予は望みの時刻に覺醒する習慣を有せざりき、是に於て予は目を開きて消燈せざるべからざるに至れり、消燈は甚だ拙劣なる方法にて爲せり、目の見當がよくつかざる様にて、吹消す際に生ずる氣流を轉向せむが爲め手をホヤの上に斜に翳したるに何時の間にか屢々ホヤに觸接せり、而も毫も疼痛感覺なし、火炎の上に手を斯く迄長く保たむこと催眠状態以外にては到底不可能なる事なりしならむ。

強く反覆されたる早起(六時十五分)の暗示は不快なる結果を生せしめたり、予は終夜目を醒し居らざりしが、絶えず六時十五分ならざるかを考へ居た

りしと信ず、時々予の境地の可なり明確なる意識を有せしを以て、教會の塔の大時計に注意し、心を静めむとせり、余の住居は教會に隣接すれど未だ大時計の音は一度も耳に入らざりき、六時の音は聞えられど目はまだ覺めず、六時十五分を打つ時計の音と共にドアを叩かれる音聞えて予は覺醒せり。

次回には心地よき安眠の後何等の障礙なく定められたる時間に覺醒するを得たり、これ暗示の内容の變更せられたるに歸因す。

翌晩は、ベットに横はりたるまゝ右のスパイエル君より二回、其翌日はフェレル君より一回催眠術を施されたり。

上記の試験は極めて容易に繰返され、且つ一方の腕の強直は惹起され、一定の行爲は課題されたり、暗示的無痛覺は、之に續いて他の暗示が與へられたる時は短時間のみ持続し、針刺の際には單に觸覺を惹起すに過ぎざりしが、催眠中に疼痛を覺ゆるに至れり、之に反して長き散歩の後に起れる脚部の疼痛性強直は二三回の暗示の後持続的に治癒せるを見たり、一定の運動の不

可能の暗示與へられたる時は、最早拮抗筋の收縮を頻回に觀察することなく屢々意志の傳導路の中斷せられしが如く、筋肉は予の大なる努力を無視して收縮せざるに至れり、其後の暗示の際には予の意志は薄弱となり、屢々余の問題に反抗するの元氣を失ひき、そは無益なる徒勞なるを其瞬間に於て暗示に抵抗する念慮が寸毫も浮ばざりしことによりてなり。

行爲の課題に對しては長く之と争ひ、終には敗北して之に従ふ、これ一面に於ては意志力の缺乏あるを恐らく反射に服従するが如し、又他の一面に於ては自己そのもの活動的干與なくして之を行ふことを得るが故なり、例へば一方の脚を舉上するが如し、又予は術者に對する好意より其請に應ずるが如き感情を抱きたること屢々なりき。

余は行爲中に於ても抵抗を試むべく往々十分の明覺を有せしだけ、其無用なることを予の領解の誤謬より己れに立證せり。

既に始まりたる行爲の終了に付き新しき暗示、若くは命令與へられたる時は最初の瞬間に於て不快を感じ、その爲め抵抗は容易となれり、室外に出で

物品を取り來れといふ暗示に對しては容易に之に抵抗することを得れども、若し此種の行爲分解せられて、先づ片足を動かし、次に他の脚を、云々、次第に實行せしむるが如き暗示に對しては抵抗すること能はざりき。催眠後暗示の實行は予之に抵抗し得たり、併し之にはかなりの勞力を要せり、他の場所に置換へざるべからざりし皿を注意せざらむが爲め、一瞬間は談話に紛して予の問題を忘れ居たれども、予は其皿を注視せるを發見せり、暗示に關する考慮は就眠する迄余を苦しめ、單に安靜を得むが爲めに殆んど臥牀を離れて起き出で、命令を實行せむとせり、されど程なく就眠して暗示の作用は失はれたり。

幻覺を惹起すことは只一回成功せり、フオーレル君は予に一本の指を口中に入れしめ、其味苦しいへり、其時直に蘆薈様の苦味念頭に浮び、甘苦、鹽味を感覺せるに面を喰ひ、確に手の汚れ居れるを信せり、覺醒後の對照により余の指には此種の味を有する物質の附着し居らざりしを知れり。

此場合に於ても暗示は、予の意識せる思考内容に對しては、意識せざる予の

精神に對するよりも別途の作用を有したりき、後者即ち意識下精神は暗示の實現に際して有力なる役目を爲したるなり。

予の意識は殆んど變化を呈せざりき、されど最終の二回の催眠状態に於て、餘り強からざる健忘を暗示せられて醒めたる後は、凡てを想起するに骨折れたり、實驗の時間的序列は忘却し、論理的關係は之を喚起するを得たり、第三回の短き催眠状態に於ては各の追想は缺乏したりき、術者が靜に予を眠らしめし時一回、就眠前幻覺の輕き痕跡現はれたることありき、予は多年、就眠前幻覺に就き研究する所ありき。

覺醒は暗示によりて予の意志に反して約十秒許りにして起れるが、何等の隨伴症候なく宛然淺眠より覺めたるが如くなりき、云々。

フオーレル自身も亦一〇〇〇年ミンヘンに於て臥床の上にて就眠せんとする際、若くは肘掛椅子にもたれて、一種の自己暗示を試みたることありしが、其際、大なる骨折を以て當初部分的に覺醒するを得たり、即ち一定の筋群は先づ以て覺醒したれど、換言すれば隨意的に之を動かし得たれど、其他の身

體の部分はカタレブシーを起し居たりと、其間部分的の睡眠往來し、渠自身の爲さざりし足音若くは運動等の幻覺現はれたりと。

次に知名の術者 Tatzel は次の如くいへり。

「余は屢々催眠術にかゝれり、而して極めて心地よき感じなりきといふの外なし、名狀しがたき心地よき魅するが如き温感は全身に漲り、殆んど重力の法則を脱出したるが如き心地せり、四肢は全部其力を失ひ、身體は愉快なる虚無に融解し去りたるが如し、開眼若くは一腕の舉上は到底不可能なる事に屬し、予は只此睡眠様状態の永續せむことを希望せり、予は素より意識を失はず、完全に予の考慮の統治者たりき、身邊に起れる事も亦一切精確に聽取するを得たりしが、此種の輕き催眠状態の余に示したる所は、病みて刺戟性なる神経に對して此状態が如何に心地よく緩和的なる、融解的なる影響を逞うすべきかといふにあり。」

催眠中の患者の感想

ウエツテルストランドの報告中に患者の自己觀察の記載あり、興味あれば

其大要を左に譯出す。

第一例神經衰弱者にして苦悶、穿鑿症、疑念及び意志薄弱等あり、三ヶ月間日々半時間宛催眠療法を施され、治癒したるものなり。

「醫師の凝視するに委ねて、己れの意志を睡眠といふ目的に集中させて居る、と程なくうつとりとして來た、睡りといへば睡りだが極めて珍妙なもので、普通の睡眠と違ふのは、先づ第一に自分が眠つたと思つて居る點である、それから又其眠の淺いと來ては、身邊に起つて來る事柄が何でも分る、周圍の音聲、言語、凡ての足音、街上の雜踏などが皆耳へ這入つて來る、耳元に嘔ぐ術者の言葉を傾聴しやうといふ氣になつても格別の違ひはない、物音は同時に聞えたり、聞えなかつたりしたもうとうに自分は自分へ話された術者の言葉に鎖で繋がれた様に結付けられて居つたのだ、それが自分に取つては何百遍となく繰返した程強力な反覆であつた、心を靜に愉快に持て、仕事を勵んで自分の經濟向のことなどは願慮せぬがよいと、余は自分に尙幾度か此言を繰返した、そして閉目のまゝ、靜に横つて居ると、何だか氣が遠くなる



やうな感じがした………間もなく催眠して居る間に、自分は自己に對して偉大な力を有するに至つたといふ氣がした。當初はさうなれさうにも無つたが、そしてこんなことを強く考へた。普通一般の人間たるものが例令ちつとやそつと病氣があらうと催眠術者の勢力の下に全然壓倒さるべきではない。又こんな事も明白である。屢々聞く話だが、自分が欲しない場合には何人も自分を眠らせることが出来ぬといふのも全く眞實だ。譯合は只さうしたなら自分の健康を害ひはせぬかと考へてせぬ迄の話だ………自制が段々恢復されるにつけて湧いて來た幸福と勢力との感じは筆にも舌にも盡すことが出来ない。最初の二回の施術を受けたゞいで、自分はもうさうに全快して了つたやうに考へ始めた程變化して來た。その後になつて落膽の時期が來た、その時には何でも凡てが錯覺で、もあるやうな氣がしたけれど、堅忍でなければならぬ位の了見は持つて居た。徐々とも確實に催眠療法の一部が予に徹底的な影響を揮つた。全體が次のやうな事をする丈だ。椅子に腰をかけて浅い睡眠に這入り、上記のやうな簡単な言葉を術者

が耳に囁く、それで以て病的状態が取除かれて普通な健康な元氣のある身體となるのである。

人が考へてるやうに催眠術は一度かゝるご慣れつこになるやうなものではない。例へばモルヒネとか其他の麻酔劑のやうなものは譯が違ふ。意志の力を麻痺させるやうなことは尙更ない。醫者と病人との共同作用で意志は新勢力を得るのだ。身體に病氣があるやうに意志にも病ひがある。其時は術者の言葉で以て全治させられるといふに何の不思議もない。宛然親友の激勵によつて勇氣を鼓舞され、慈母の訓誡によつて小供の元氣がよくなる様なものである。

第二例患者は左の如く述べたり。

「椅子に腰を掛けて目を閉ぢた。その時撫でるやうな手が、額や顙顚や、頬や、胸や、腕にさはるのを感じた。そして低い而も確乎した音聲で眠に就いたことや、四肢に心地よい温覺を感じる。ことや、神経の安静と思想の休息のことなごを話された。さうして居る中に自分は眠に就いて居らぬことに氣がついた。

少くとも自分達が夢中で周囲のことが一切分らなくなる睡眠とは異ふ、自分達はちつとも夢を見て居らないことも同様に確かだ、自分は自分が眠つたといふ事を承知して居る、心持よく腰を掛けて他人の家に居るといふこと、獨りでないといふこと、及び三十分後には歸途に就くといふことも分つて居る、窓掛と窓との間に一匹の蠅がぶん／＼いつて居るのが聞える、庭には鳥が囀つて居る、梢をゆする風の音も聞える、それから又術者は爪立になつてそちこち動き廻つて、一方の患者の前や、他の患者の前へ行つて立止つて、低い聲で療治をして居る、つゞりの分らぬ囁き聲が時々耳に這入つて来る、凡てが完全に覺めて居る時のやうにはつきり聞えたが、無關心は全身に漲つて、宛然靜穩な夏の日に故郷の樹蔭に憩んで居つて、外界の熱鬧が忘却の中へ沈んで行く時のやうである、若し身體を動かさうとすれば、出来るといふことは疑ひもないが、身動きはしたくはなかつた、又さうしやうといふ考を起したことはほんの一回もなかつた………一回、一回と病症は解けて消失したことがよく意識されるので、元氣が盛になつて來た、自分にどつて

は治療の時間は嗜好の時間のやうであつた、健康を増進する飲料を用ふる時間のやうであつた、若くは超自然な鑛泉療法を施されてるやうであつた、そして自分が時々之に憧憬れるのは影響が根本的で且つ眞實であつたといふ證據と見るべきであらう、以上の二觀察は非醫者ながら高等の教育を受けたる人々の感想にして、之を専門的に批評するも確に眞理と見做さるべからざる程、よく實際と一致せるものなり。

### 第十三章 暗示の刑法的意義

暗示によりて影響せらるゝ犯罪的行爲は主として施術の巧拙と被術者の個性の如何とに關係す、即ち健康者の美的、倫理的、感情的醜惡にして不道德なる催眠後の暗示との争闘を演出す、例へば被術者に對して覺醒後卓上のコップの水を呑むべしと命ずれば、此種の暗示は直に實行せらるゝを例とすれども、草履を卓上に置くべしと語れば、術後患者は草履を眺めて當惑し、

失笑し、之を行はずして去るもの少なからず、餘りに馬鹿らしき仕草なればなり。少數のものは之を實行すべし、今後者の暗示感性の大なるもの、一人を催眠せしめ、覺醒後茲に列席して居るA君の頬を打て、然らずんば己れの手にインキを注げよ、然らずんば卓上にある余のナイフを盗み去れ、と告ぐる時は、暗示の侵入に對する倫理的及び美的感情の苦闘を生じ、如上の對抗觀念及び暗示感性甚大なればなる程、争闘熾烈を極むるは當然の理なり、其轉歸は此兩者の力の持続と強さとに關係すべし、従つて此對抗的二力を組成する所の各種の成分を考察する要あり、即ち左の如し。

- 一、個人的暗示感性の高さ。
- 二、被術者の頭腦に於ける暗示的作用の持続。
- 三、催眠的教育の強さ。
- 四、催眠の深さ(殊に分解作用の程度)。
- 五、相當せる作用を出來得る限り迅速に且つ十分に遂行せしむるに適したる暗示。

六、被術者の普通なる個性、即ち倫理的、美的素質の高さ、及び種類、意志の力、及び教育程度。

七、被術者の瞬間的精神状態。

就中第六項は關係最も重大にして、苟くも良心なき者ならむには、犯罪的暗示の實行は良心ある普通人に比して遙に容易なるものあらむ、殊に利害關係の纏綿せる際には然り。

第四項は催眠後の暗示に關係を有するものにして、被術者の覺醒時には犯罪的暗示に抵抗する力は催眠中よりも強きを例とす。されど種々なる關係より問題は極めて複雑となり得べし。

フオーレルは列席せる法官の前にて七十歳の男子に深き催眠術を施し、之に向つて曰く「我等の正面に座て居る奴は悪漢だから殺して仕舞ふと思ふ、此小刀を以て」と白墨を渠に渡して「奴の腹部を刺せ」と、彼は見る間に血相を變へ、怒を以て震ひながら、右手に白墨を攫み、突然立上りて前面に向つて二回劇しく空中を突けり、渠は激しく興奮せるまゝ、催眠状態にあり、白墨を予

に返すことなくポケットに之を仕舞ひたり。渠を覺醒せしめしに汗びつしよりの有様にて興奮し居たり。催眠中の追想は少しもなく何か間違でも起つたのでせうと云へり。

如上の方法により色情的濫用を爲し、發覺したる實例少なからず。要するに暗示せられたる犯罪は被術者の側に於て動機なしに遂行し得るものなり。

催眠術の其他の危険は疾病の發生にあり、拙劣なる施術は往々ヒステリー様發作の原因となり、食思不振、消化不良等の暗示により遂に高度の衰弱を惹起さしむるものとす。リーポール、ベルンハイム等の指摘したるが如く、運命判斷者が往々にして人の死期を豫言し、時に適中することあるは、要するに自己暗示若くは暗示の作用に歸因すと、又フオーレルは婦人の經血を二週間延期せしめ得たる實驗を有せり。

未熟なる術者が知らずくの間、に有害なる後影響を與へつゝある例は夥しき數に達するものあり。

醫師ならざる催眠術者某、嘗てヒステリー患者を治療して好果を得たり、續いて千里眼の某女を施術し、遠隔の地にある男子の疾病を診斷して其肺の變化を述べよと命じたり。千里眼は口を開き始めた際、突然死して倒れたる、解剖的所見、腦貧血及肺水腫の初徴は何等著しきものなかりき。病める肺の戦慄すべき觀念は夢遊期に於ける女子にショックを與へたるにあらずや、或は偶然の死か、リエポール、ベルンハイムによれば眼前に映じ來る肺の病的變化は急死を惹起さしむるに足るものありと、此の如きは催眠術の危険の一例なり。

然らば被術者の犯罪的行爲を如何に處罰すべきか、被術者は責任能力なきにあらずや、問題は簡單ならざれども、眞に犯罪の目的を以て催眠術を施し、何等の犯罪的意志なき被術者をして、動機なくして犯罪を遂行せしめたる場合には罪は術者にありて被術者になし、然れども好悪なる者ありて若し催眠術を利用して悪事を爲し、己れに犯罪の意志なかりしを陳述して罪を術者に嫁せむとするが如き場合に於ては、前述の關係は正反對となり、術者